

鳥羽館跡遺跡

県営ほ場整備事業豊科南部地区に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書

1994. 3

長野県 豊科町教育委員会

鳥羽館跡遺跡

県営ほ場整備事業豊科南部地区に係る
埋藏文化財発掘調査報告書

1994. 3

長野県 豊科町教育委員会



遺跡近景（南上空より）



遺跡全景（上空より）



遺跡近景（西上空より）



調査地全景（北上空より）



調査地全景（上空より）

序

鳥羽館跡遺跡は今から500年ほど前に築かれたとされる館の跡です。今でも北西隅に残っておりますが、周囲を堀と土塁という施設で囲んだ立派な館で、上鳥羽の古い町並みもそのころ形成されたと言われています。

しかし、その館も長い年月を経て荒廃し、土に埋まり、やがて水田へと姿を変えました。そして、今またほ場整備事業によってその景観も大きく変わることとなりました。

今回、この県営ほ場整備事業にさきがけ、長野県松本地方事務所より豊科町教育委員会が委託を受け、発掘調査を実施いたしました。調査は平成4年7月から9月の炎天下に実施され、本書はその後の整理作業とあわせて結果を報告するものであります。残念ながら、私たちの郷土を築いてきた先人の生活の跡は、上に埋まってからというもの、後にも先にも発掘調査にかかるわっただ私たちだけしか目にすることできなかったものです。その内容を紹介する本書が多くの方に活用され、また、今後の文化財保護と郷土の歴史の解明に役立つことを期待いたします。

ここに調査にご理解とご協力をいただきました松本地方事務所をはじめとする関係機関、また上鳥羽地区の皆様に対し、深甚の敬意と感謝を申し上げ序といたします。

平成6年3月

豊科町教育委員会

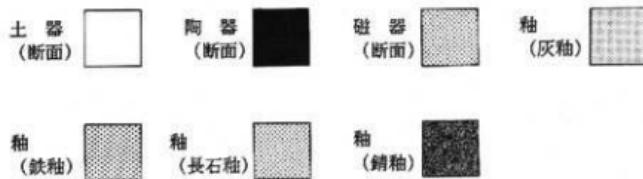
教育長 小幡正行

例　　言

- 1 本書は平成4年7月17日から9月25日に実施した、長野県南安曇郡豊科町大字豊科145番地 烏羽館跡遺跡の緊急発掘調査の報告書である。
- 2 本調査は松本地方事務所より委託を受け、豊科町教育委員会が実施した。
- 3 調査の記録にあたっては、新平面座標系による測量座標を用いた。
- 4 本書の作成にかかわる図面、遺物整理等の作業の分担は第1章に記した。
- 5 本書の編集は、事務局が行なった。執筆は第2章第1節を森義直が、他は山田真一が担当した。
- 6 註、引用文献、参考文献等は各章末に一括掲載した。
- 7 遺物実測図のうち、古代土器の種類は次のように表した。



また、中世以降の土器・陶磁器については次のように表した。



- 8 出土遺物及び図類は豊科町教育委員会が保管している。

目 次

第1章 調査の経緯と方法	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査体制	2
第3節 調査の方法	3
第4節 調査経過	5
第2章 遺跡の概要	9
第1節 地形と地質	9
第2節 周辺の遺跡	11
第3節 町内の城館跡	13
第4節 中・近世の鳥羽	17
第3章 調査の結果	19
第1節 調査の概要	19
第2節 遺構	19
1 堅穴住居址	19
2 土坑・柱穴	22
3 堀	58
4 上塚	60
第3節 遺物	61
1 土器・陶磁器	61
(1) 古代の土器	61
(2) 中世以降の土器・陶磁器	62
2 金属製品	64
3 石器・石製品	64
4 銭貨	64
5 その他	64
第4章 調査の成果と課題	65
第1節 鳥羽館跡遺跡の発掘成果	65
第2節 古代における安曇郡南部の様相－豊科町内の発掘調査から－	66
第3節 中世～近世初頭における様相－出土遺物からの概観－	68
第5章 結語	75

挿図目次

挿図1	工事の範囲と調査地の位置	3	挿図23	S K62断面図	45
挿図2	遺跡の位置	8	挿図24	S K61・62・89実測図	46
挿図3	調査地の土層	10	挿図25	S K63~65実測図	47
挿図4	周辺の遺跡	12	挿図26	S K66~68・88実測図	48
挿図5	遺跡周辺字界図	15	挿図27	S K69~73実測図	50
挿図6	天保2年絵図	16	挿図28	S K74~81実測図	52
挿図7	調査地区画図	20	挿図29	S K82~86実測図	55
挿図8	S B1実測図	21	挿図30	S K87~91実測図	56
挿図9	S K1~5実測図	23	挿図31	堀全体図	58
挿図10	S K6~8実測図	24	挿図32	堀断面図(1)	59
挿図11	S K9~13実測図	26	挿図33	堀断面図(2)	60
挿図12	S K14~19実測図	28	挿図34	堀(土橋部分)断面図	60
挿図13	S K20~21・33実測図	30	挿図35	出土陶磁器の組成	62
挿図14	S K22実測図	31	挿図36	堀の規模	65
挿図15	S K23実測図	32	挿図37	町内遺跡出土遺物実測図	67
挿図16	S K24~32実測図	34	挿図38	古野町館跡遺跡全体図	69
挿図17	S K34~40実測図	36	挿図39	梶海渡遺跡全体図	70
挿図18	S K41~43実測図	38	挿図40	遺跡の時期	71
挿図19	S K44~49実測図	40	挿図41	出土土器・陶磁器の組成	72
挿図20	S K50~54実測図	41	挿図42	山上土器・陶磁器の組成	72
挿図21	S K55~57実測図	42	挿図43	出土土器・陶磁器の組成	72
挿図22	S K59・60実測図	44			

表目次

表1	町内の城館跡	13	付表1	柱穴一覧表	79
表2	出土遺物の構成	71	付表2	出土土器・陶磁器観察表	87
表3	関係年表	74	付表3	金属製品一覧表	90
報告書抄録		76	付表4	石器・石製品一覧表	90
			付表5	錢貨一覧表	90

第1章 調査の経緯と方法

第1節 調査に至る経緯

事業の概要 本調査は県営は場整備事業豊科南部地区に伴う緊急発掘調査で、事業の主体者は長野県松本地方事務所である。事業は豊科町の中南部に位置し一級河川梓川及び犀川左岸に展開する水田地帯においては場整備を計画し、高性能農業機械の有効利用、水田の汎用化、農地の集団化を図り、労力の節減、作物の品質向上等、総合的改善を期することを目的としている。事業総面積は 387.8haで 平成2年度から着手された。

埋蔵文化財の保護と調査の経緯 区域内の埋蔵文化財の保護については、事業者・長野県教育委員会・豊科町役場耕地課・豊科町教育委員会が参加して協議がもたれ、平成4年度は鳥羽館跡遺跡に工事の影響が及ぶため、その発掘調査を実施することとなった。調査は平成3年10月の試掘調査を経て、平成4年7月から9月にかけて実施された。翌年1月から整理作業を本格的に開始し、平成5年度にその報告書を作成した。

補助事業の経緯 本調査は平成4年度及び5年度の国宝重要文化財等保存整備費補助事業（国庫）、文化財保護事業（県費）として行なわれた。その文書記録は以下のとおりである。

- 平成3年9月25日 平成4年度県営は場整備事業豊科南部地区に係る埋蔵文化財保護協議を豊科町公民館及び現地にて開催
- 10月14-25日 鳥羽館跡遺跡試掘調査を実施（豊科町教育委員会）
- 平成4年1月6日 平成4年度文化財関係補助事業計画書提出
- 5月20日 平成4年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書提出
平成4年度県営は場整備事業に伴う埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約を結ぶ
- 5月27日 平成4年度国宝重要文化財等保存整備費補助事業計画内定（通知）
- 6月15日 埋蔵文化財（鳥羽館跡遺跡）発掘調査の通知提出
- 7月9日 平成4年度文化財保護事業県費補助金事業計画内定（通知）
- 7月15日 平成4年度文化財保護事業県費補助金交付申請書提出

平成 4 年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付決定（通知）
9月7日 平成 4 年度文化財保護事業県費補助金交付決定（通知）
9月25日 埋蔵文化財（鳥羽館跡遺跡）発掘調査終了届・埋蔵文化財拾得
届・同保管証提出
12月21日 平成 5 年度文化財関係補助事業計画書提出
平成 5 年 2 月 26 日 鳥羽館跡遺跡埋蔵物の文化財認定通知
3月22日 平成 4 年度県営は塙整備事業に伴う埋蔵文化財包蔵地発掘調査
実績報告書提出
平成 4 年度国宝重要文化財等保存整備費補助事業・平成 4 年度
文化財保護事業（県費）実績報告書提出
3月31日 平成 4 年度文化財保護事業県費補助金 額の確定
平成 4 年度国宝重要文化財等保存整備費補助金 額の確定
5月20日 平成 5 年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書提出
5月28日 平成 5 年度文化財保護事業県費補助金交付申請書提出
6月1日 平成 5 年度県営は塙整備事業に伴う埋蔵文化財包蔵地発掘調査
委託契約を結ぶ。
平成 5 年度事業着手
8月11日 平成 5 年度国宝重要文化財等保存整備補助金交付決定
9月27日 平成 5 年度文化財保護事業県費補助金交付決定

第 2 節 調査体制

調査主体 豊科町教育委員会

調査担当 山田真一（豊科町教育委員会社会教育課）

調査員 森 義直

作業参加者 青木台朗 飯沼定計 大飼あさ江 海野和子 海野節子 大島健太郎
小川和徳 金沢洋 熊井かつ江 熊谷吉勝 胡桃沢慎一 小林武夫
杉田幸司 高山修司 竹内亜矢子 田尻知江子 田中万喜 鶴見寛行
手塚秀了 鳥羽良也 西沢千至江 降旗耕一 松岡杜久 丸山泰典
丸山勇次 三枝聰 水谷しげき 一原信 一原千はる 本山茂子

本山登 山崎英樹 山田知恵子 渡辺忍
事務局 農科町教育委員会社会教育課社会教育係
丸山幸安（社会教育課長） 浅川秀明（社会教育係長） 丸山千枝美
宮沢万茂留 浅川登 小川正弘

第3節 調査の方法

試掘調査の実施 鳥羽館跡遺跡は、主に地籍図からの研究と堀及び土塁の存在によりその位置が知られてきた。今回、工事が館跡主郭と予想される地域に及ぶにあたり、まず、試掘調査を実施し遺構の存在と土層の状況を確認した（平成3年）。

発掘調査の方法 調査は麦の刈り取りを待って開始した。主郭のほぼ半分が対象となっことから、その様相を明らかにすること。また、いつ、誰によって築造されたかが不明



図1 工事の範囲と調査地の位置

であることから、その手がかりを得ることを目標にした。調査は、調査地外への排上の移動が限られたため調査地内で土の移動を行ったが、諸々の制約のため、全面の調査は行えなかった部分がある。それらについては工事の際、地下の遺構に影響のないよう配慮し、また、規模を明らかにするため、トレチ法をあけ掘を確認した。

試掘調査の際、搅乱が著しく、砾層まで安定した面が存在しないことが確認されていたのでその直上を検出面ととらえた。表土は重機で剥ぎ、検出は人力で行なった。

遺構には検出順に豊穴住居址にSB、土坑にSK、柱穴にPの記号を冠し通し番号を付けていった。Pを付した中には掘立柱建物を構成する柱穴とみられるものがあり、これらはまとめてSTの記号を付した。遺構名は現場での調査終了後に整理し、変更したり追加したものもある。掘り下げは四分割し、その上手で土層を観察する方法を基本に、適宜応用して実施した。また、堀部分の調査についてはその底までは工事によって破壊されないと判断から、トレチ法を採用し、上面の調査にとどめた部分もある。

調査記録　測量は委託設定した国土地標に基づき1/20で行ない、必要に応じて1/10等大縮尺で行なった。写真はモノクロネガとカラースライドを使用し、その他にカラーネガでも撮影をしている。また、館の全容を明らかにするため航空写真を委託して撮影した。

調査記録は主に次の者が担当した。

遺構測量　大島健太郎　鶴見寛行　熊井かつ江　田尻知江子　手塚秀子
西沢千至江　本山茂子

遺物復元　熊井かつ江　小林武夫　田尻知江子

遺物火焼　熊井かつ江　田尻知江子　山田真一

遺構トレース　熊井かつ江　田尻知江子　山田真一

遺物トレース　熊井かつ江　田尻知江子　山田真一

遺構・遺物写真　山田真一

調査指導・協力　調査中は以下の方々、ならびに諸機関からご指導、ご協力いただいた。記して謝意を表したい。

会田進　青沼博之　磯村賢治　市川隆之　伊藤和明　今村克　小穴喜一　小穴芳実
人久保知巳　大沢哲　小口達志　小原稔　河西克造　神沢昌二郎　桐原健　久保田剛
熊谷康治　倉科明正　小林富雄　小林秀行　小林康男　坂横善一郎　笠本正治
澤谷昌英　重野昭茂　島田哲男　清水孝寿　新谷和孝　関沢聰　高桑俊雄　竹内長増
竹岡喜恵人　竹原学　鳥羽嘉彦　鳥羽良也　直井雅尚　中野正實　野村一寿　原明芳

荻原哲子 橋口昇一 平林彰 深沢恒則 降旗和夫 降旗俊行 丸山毅一 御子柴将司
三村肇 三村竜一 宮島義和 望月正昭 百瀬新治 百瀬忠幸 山岸洋一 山下泰永
吉沢克彦 鳥羽の自然と歴史研究会 豊科高等学校 南安曇教育会

第4節 調査経過

平成4年7／17（金） 曇 調査員会議。

作業説明会開催。

7／18（土） 雨／晴 ブレハブ設置。

調査区設定。器材等搬入。

7／20（月） 晴 器材等搬入。

7／21（火） 曇 バックホー・ブルドーザーにより水田耕耘・中間土を除去。



7／22（水） 晴 引き続きバックホー・

ブルドーザーにより中間土を除去。

7／23（木） 晴 引き続きバックホー・
ブルドーザーにより中間土を除去。

7／24（金） 晴 引き続きバックホー・
ブルドーザーにより中間土を除去。本
日より検出作業を開始する。

7／27（月） 晴 検出作業継続。平安
時代土器片数点出土。朝日計測基準杭
設定。

7／28（火） 晴 検出作業継続。遺構
検出状況写真撮影。

7／29（水） 晴 遺構（土坑）検出状
況写真撮影。北西端の土坑から掘りは
じめる。

7／30（木） 晴 遺構（土坑）掘り下
げ継続。検出状況略測図作成。SK21
より石鐵出土。



7／31（金） 晴 遺構（土坑）掘り下
げ継続。SK22より焼土・炭化物多量

出土。

8／1（土） 晴 SK7 東に SB1 挖出。堀にトレンチを設定し掘り下げを開始。SK2より錢貨出土。



8／3（月） 晴 土坑・堀掘り下げ開始。SK34～検出状況写真撮影。

8／4（火） 晴 土坑・堀掘り下げ継続。

8／5（水） 晴 土坑・堀掘り下げ継続。セクション図作成。基準杭設定。SB1掘り下げ開始、黒色土器坏出土



8／6（木） 晴 土坑・堀掘り下げ継続。セクション図作成。

8／7（金） 晴 遺構掘り下げ継続。セクション図作成。

8／17（月） 晴 柱穴完掘。SB1・SK22掘り下げ。土坑完掘写真撮影。

8／18（火） 晴 SB1掘り下げ。南東側床面より須恵器坏出土。土坑完掘写真撮影。

8／19（水） 晴 遺構完掘。写真撮影。遺構平面図作成。



8／20（木） 晴 遺構平面図作成。SK22・42他掘り下げ。

8／21（金） 晴 遺構平面図作成。堀掘り下げ。SB1疊等出土状況図作成。



8／24（月） 晴 SK22・SB1写真撮影。堀掘り下げ。遺構平面図作成。遺構清掃。

8／25（火） 晴 遺構清掃。

8／26（水） 晴 ラジコンヘリコプターを利用して空撮を行なう（写真測図研究所）。

8／28（金） 晴 調査地及び周辺の地

質調査を行う。

8／31（月） 晴 バックホー・ブルドーザーにより排土移動を行う。

9／1（火） 晴 バックホー・ブルドーザーにより表土・中間土除去。

9／2（水） 晴 バックホー・ブルドーザーにより表土・中間土除去。



9／3（木） 晴 検出作業再開。「市民タイムス」取材。

9／4（金） 晴 検出作業終了。遺構掘り下げ開始。

9／7（月） 晴 遺構掘り下げ継続。

9／8（火） 晴 遺構掘り下げ継続。
セクション図作成。SK60より銭貨出土。

9／9（水） 晴 遺構掘り下げ継続。
セクション図作成。SK61より青磁片出土。

9／10（木） 晴 遺構掘り下げ継続。
セクション図作成。SK66より銭貨出土。

9／11（金） 晴 遺構掘り下げ継続。
セクション図作成。

9／14（月） 晴 遺構掘り下げ継続。



9／16（水） 晴 遺構掘り下げ継続。

9／17（木） 晴 遺構掘り下げ。土坑写真撮影。朝日計測基準杭設定。

9／18（金） 晴 遺構掘り下げ。土坑写真撮影。基準杭（メッシュ）設定。

9／19（土） 晴 全体清掃。午後現地説明会開催（50名参加）。



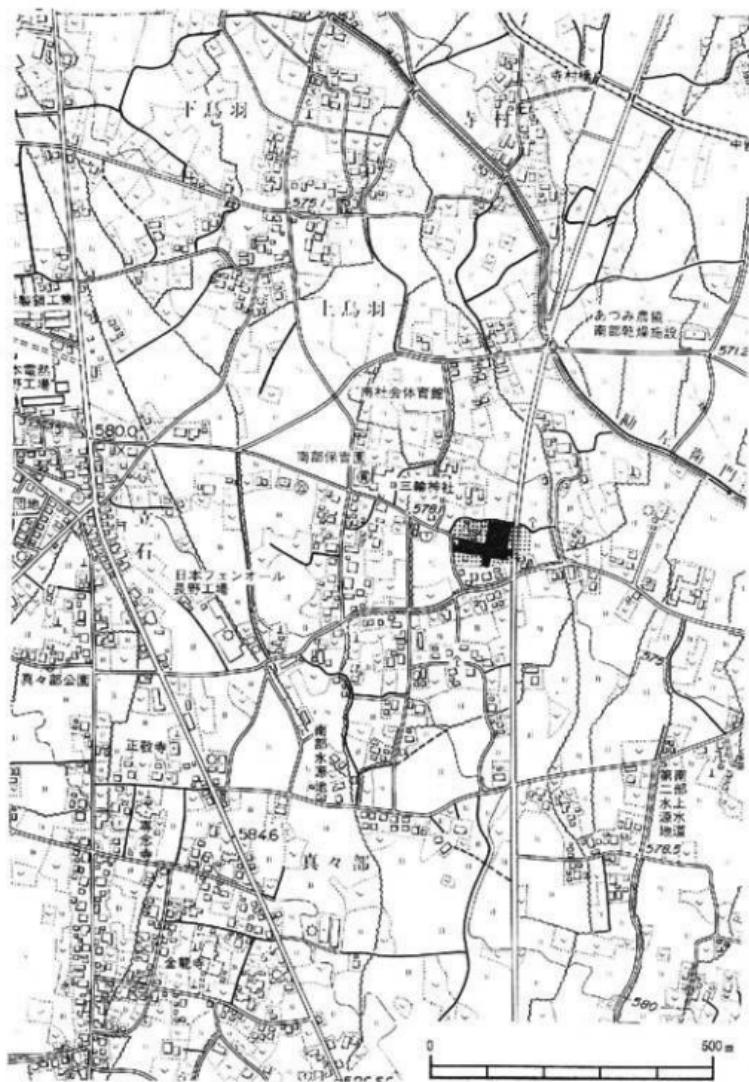
9／21（月） 遺構平面図作成。遺構写真撮影。

9／22（火） 晴 遺構平面図作成。SB1カマド断ち割り、精査。

9／24（木） 晴 遺構平面図作成。機材等片付け。

9／25（金） プレハブ等撤収。

以後、教育委員会事務局別室で整理作業を継続。平成5年度報告書（本書）作成。



挿図2 遺跡の位置

第2章 遺跡の概要

第1節 地形と地質

地形・地質の概説 鳥羽館跡遺跡は南北約50km、東西10~15kmにかけて広がる松本盆地の中央やや北寄り、安曇野の標高577mの地点に位置する。松本盆地に流入する主要河川の一つである梓川により形成された大扇状地の沖積地で、梓川と奈良井川が合流して犀川となる合流点の南西約3km付近にある。

松本盆地は、更新世の中頃（およそ70万年前）の造盆地運動により、西は山麓線に沿い東もほぼ東山の山麓線に沿って南北方向に走るそれぞれ複数の大断層で陥没し、この陥没地に南から奈良井川、南西から梓川、北からは高瀬川をはじめとする大小の河川が流入し、大量の土砂を厚く堆積させ現在に至っている。盆地の西部山地は飛騨山脈の東端にあたり、地質学上は美濃帯と呼ばれる中・古生層と中生代末の花こう岩類より成り、上記断層の他、それに雁行する幾本かの断層により、急傾斜をなして盆地と接している。これらの山地を侵食して運ばれた沢や河川の砾は、供給源である山地の地質により、硬砂岩・粘板岩・チャート・花こう岩などが主である。梓川水系ではこの他に、乗鞍・焼岳の安山岩や穗高連峰の火成岩も混入している。

東部山地はフォッサマグナの堆積物で、新生代の第一紀層と火成岩より成る。古女鳥羽川が城山付近に流下し厚く礫層を堆積させているが、本遺跡付近には及んでいない。したがって本遺跡付近のベースを成しているものは梓川水系の扇状地堆積物で、上砂の厚さはおよそ400mと推定されている。その堆積物の上に北西方向から鳥川系の古い扇状地堆積物（更新統とみられる）の扇端付近が重なり、その南端は吉野～裾海渡にまで及んでいるものとみられる。

一方、南西方向からは梓川村の黒沢山（標高2051m）を源流とする黒沢川扇状地の扇端が、梓川による扇状地を覆って上鳥羽地区まで達しており、本遺跡の土層の主体を成している。

遺跡付近について 梓川左岸には3つの段丘が存在し、上段からロームの載った更新世の上野面と、次のロームの載らない完新世（沖積世）の丸田面、その下の現梓川の氾濫原である岩岡面となっている。梓川の流路は、丸田面の堆積が終わるところから北から東へ

向きを変え、その結果、広い岩岡面が形成されるに至った。このうち直接本遺跡と関係が深い丸田面は、梓川村丸田から下立田～人妻を通り、上真々部から下鳥羽の太子村付近で消滅している。

丸田面段丘は太子村付近で消滅する前に上鳥羽で一度切れており、鳥羽館跡遺跡はちょうどその付近に存在している。もしこの段丘が切っていないならば、遺跡は丸田面と岩岡面の境界すなわち比高は小さいが段丘崖に位置するものと推定される。では何故この付近のみ段丘が消えているのか。遺跡の土層や地形から推定すると、この段丘が消滅したのは完新世における黒沢川の大洪水によるものとみられる。黒沢川扇状地は、上野面を梓川村や三郷村で広く覆っており、その下の丸田面の一部も覆っている。本遺跡付近ではさらに現氾濫原である岩岡面にまで達し、丸田面の段丘を一部消滅させているのである。

遺跡内の土層について 土層は南西から黒沢川扇端の洪水層が堆積しているが、扇状地上を長距離移動してきたため、二次的三次的な堆積物が混合しあい、極めてふるい分けが悪く酸化して黄褐色化した砂礫土層となっている。礫質は硬砂岩が一番多く、粘板岩・チャート・玢岩、それに花こう岩が少し含まれている。これは黒沢山流域からの疊に途中で梓川扇状地上の堆積物が一部混合したものとみられる。上層は堀や土塁を作ったり、さらにそれを埋めたり耕地化したりするための人工的な手が多く加わっており、一番手の加わっていないとみられる東北隅の土層柱状図をあげておく。基盤の黄褐色砂礫土は上部の土層とは色の違いのみで、質的な違いは認められなかった。

洪水について 本遺跡の立地条件は前述したとおりであるが、平安時代以後も自然堆積（この付近は年平均1mmの速さで堆積している）による細粒堆積物以外の、極めてふるい分けの悪い褐色砂礫土層がその面の上に載っている。このことから、遺跡を覆うような黒沢川系の洪水を1～2m受けているものとみられる。

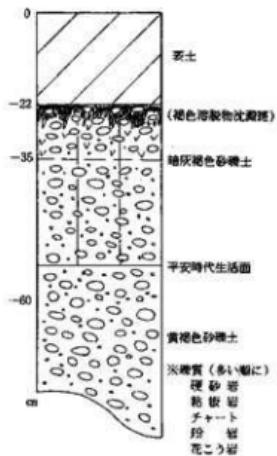


図3 調査地の土層

第2節 周辺の遺跡

町内の遺跡 豊科町は北アルプス山麓にひろがる安曇野の南東に位置し、地形的には肥沃な水田地帯となっている平地と犀川右岸の東山に大別される。

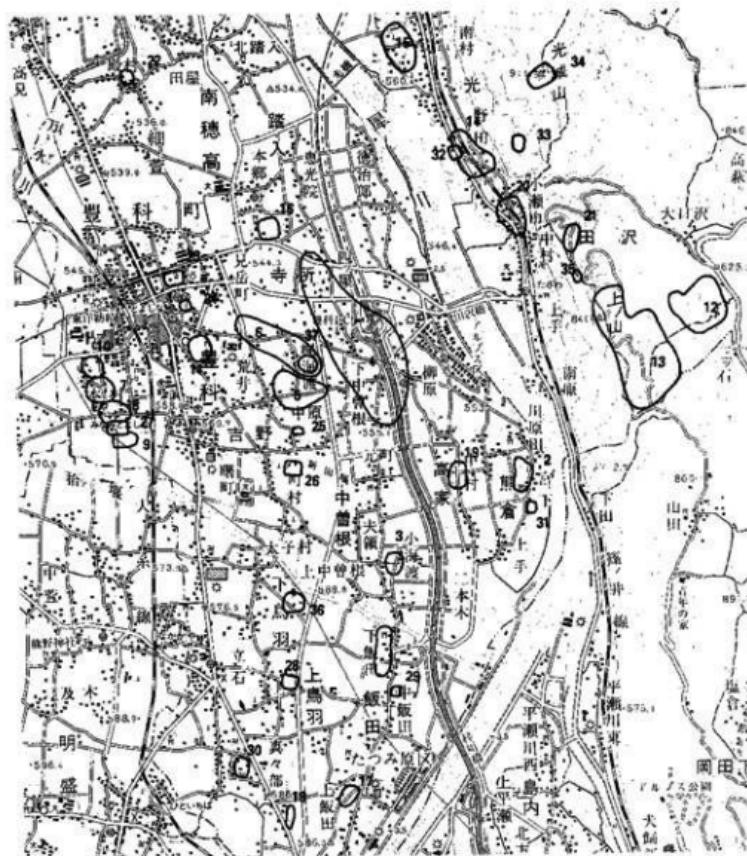
扇状地の複合より成る平地では、犀川をはじめとする各河川の影響で各所に砂礫の厚い堆積がみられ、一方、100cm以上の深い耕上帶も存在する。したがって、遺跡はわずかな遺物出土地が「点」として知られているのみで、その広がり・性格等は不明なものが多い。また、過去に紹介されている遺物もその所在が不明であったり、出土地点が明確でないものが多い。発掘調査も今までに数例しか行なわれていない。このように町内の遺跡を述べるには必ずしも資料に恵まれていないが、以下、時代ごとに概観していきたい。

先上器時代にさかのぼる遺跡は現在のところ発見されていないが、縄文時代には犀川段丘上から東山にかけて遺物の出土が知られている。犀川左岸段丘上の熊倉遺跡で打製石斧・凹石・右岸段丘上の光遺跡では中期上器の出土が記録されている。東山山中では1986・87年に行なわれた窯跡群の発掘調査の際、五領ヶ台式土器を主体に早期から中期にかけての土器と石鎌が出上している。また平地部では、1990年発掘の吉野町遺跡（吉野町館）で石鎌が出土しており、成相遺跡でも打製石斧の出土が報告されている。

弥生時代には、光城山山麓から犀川段丘上にかけて町田遺跡が形成される。瓦の粘土採取中に発見された遺跡で、土器では白瀬式・箱清水式、石器では太形蛤刃石斧・扁平片刃石斧・石包丁等の出土がある。上器には人面付のものもある。

古墳時代の遺構・遺物は現在のところ確認されていないが、奈良・平安時代には各所で遺物が出土している。宮前遺跡・小海渡遺跡・真々部巾下遺跡・吉野町遺跡・荒井遺跡・梶海渡遺跡・柳原遺跡・本村遺跡・大海渡遺跡・姥ヶ池遺跡・成相遺跡・原村遺跡等が知られ、古代の安曇郡高家郷の一部にあたると推定されている。このうち、吉野町遺跡・梶海渡遺跡で発掘調査が行われ、住居址は前者で8軒、後者で1軒発見された。いずれも9世紀後半に位置づけられる。また、両遺跡とも縄釉陶器が出土している。広大な沖積地の開発が進んでいたことが窺われるが、住居址はこの一時期のみで集落は継続していない。

一方、東山山中では須恵器窯跡群が形成される。1986・87年ゴルフ場造成に伴い行なわれた発掘調査では須恵器窯跡17基、整穴住居址26軒などが調査された。芥子望主山から公田盆地にかけて形成された窯跡群の一つの中心をなし、その製品は松本平に広く供給されていたであろう。また、瓦・鏡等の出土もあり、この時期、上田から松本に移転した信濃



1 宮前遺跡	11 成相遺跡	21 上ノ山北遺跡	31 熊倉氏館跡
2 熊倉遺跡	12 真苗平塗跡群	22 町村館跡(相賀氏館跡)	32 町田館跡
3 小海並遺跡	13 上ノ山窯跡群	23 法華寺燈跡	33 出沢城跡
4 上手木戸遺跡	14 町田遺跡	24 構えの堀留跡	34 光城跡
5 荒井遺跡	15 光通跡	25 中村堀留跡	35 上ノ山城跡
6 横海波遺跡	16 鹿村遺跡	26 古野町館跡(古野町遺跡)	36 推定日光寺址
7 柳原遺跡	17 飯田古宮遺跡	27 成相氏館跡	37 推定法藏寺址
8 本村遺跡	18 真ヶ原巾下遺跡	28 鳥羽館跡	
9 大海波遺跡	19 町田跡	29 飯田窑跡	
10 鶴ヶ池遺跡	20 小糸幡遺跡	30 真ヶ浜氏館跡	

插図4 周辺の遺跡

名 称	立 地	規 模 ・ 遺 構	時 期	現 状
1 殿村館跡(細萱氏館跡)	平 地	本郭:東西34m 南北38m, 二の郭:東西27m 南北34m, 堀 土塁	中世	宅地
2 法藏寺館跡	平 地	東西109m 南北109m, 堀	中・近世	寺院
3 橋えの墓館跡	平 地	東西45m 南北54m, 堀	中・近世	墓地
4 小村酒屋敷跡(福屋敷)	平 地	東西45m 南北36m, 堀 土塁	中・近世	宅地
5 古野町館跡(堀の内)	平 地	本郭:東西63m 南北72m, 二の郭, 堀 土塁	中・近世	宅地・水田
6 成相氏館跡	平 地	本郭:東西63m 南北54m	中・近世	水田
7 鳥羽館跡	平 地	本郭:東西90m 南北81m, 二の郭, 堀 土塁	中世	宅地・水田
8 飯田野跡	平 地	東西30m 南北25m, 土塁	中世	畠
9 貞々部氏館跡	平 地	本郭:東西81m 南北81m, 二の郭, 堀 土塁	中世	宅地・寺院
10 熊倉氏館跡	平地(段丘上)	土塁	中世	宅地
11 町田館跡	平地(段丘上)	東西60m 南北72~90m	中世	宅地・水田
12 出沢城跡	尾根上	本郭:東西20m 南北26m, 堀 土塁	中世	山林
13 光城跡	山 頂	本城:東西60m 南北15m, 二の郭:東西42m, 南北18m 堀 土塁	中世	山林
14 上ノ山城跡	尾根上	上堀	中世	山林

表1 町内の城館跡 (草末参考文献より、規模は間数を1.8mで換算)

国府を初めとする官衙あるいは古代寺院との関係が窺える。

中世～近世には殿村館跡(細萱氏館跡)・貞々部氏館跡をはじめ多くの城館が築かれる(表1)。とりわけ大伴氏の系譜に連なる細萱氏の居館 殿村館跡の築造は中世前期にさかのぼるとされており、安曇野の開発の拠点として果たした役割は大きい。他は戦国期以降の築造とされる。いずれも松本から安曇への交通の要衝で、以後集落の中心として現在に至っている。豊科町に残る古い町並みは、ほぼこの頃、基盤ができたといつていい。

一方、この時代の集落址には上手木戸遺跡がある。1986年、中央自動車道長野線の工事に先立ち発掘調査が行なわれ、内耳・土器を伴う竪穴状遺構、掘立柱建物址等が検出されている。また、1991年に発掘された梶海渡遺跡では多くの土坑が検出され、中には墓址と考えられるものもあった。1506～1611年に当地に所在したと言われる法藏寺址に関連する遺構と考えられている。

第3節 町内の城館跡

町内の城館跡については小穴芳実氏を中心に研究が進められ、現在15箇所の存在が知られている。それらは、文献・地籍図からの研究と遺構の確認によって明らかになってきた

ものである。以下、氏の研究成果によってそれらを概観し、あわせて鳥羽館跡の調査前の知見についてもふれておきたい。

殿村館跡（細萱氏館跡） 豊科町の北部、細萱地区に位置する。四周に幅約5mの堀を巡らせ、東南隅には土塁を残している。堀の内側は約35mを測り、また、東側に副郭を設けている。築造は中世前期に遡ると推定されている。細萱氏の初見は文明15年（1483）の「三宮穗高社御造営定日記」（穗高神社蔵）で、穗高神社の中世の造営発令者の地位にある。

法藏寺館跡 町の中心地、新田地区に位置する。方100mを超す大型の館跡で、幅約4mの堀を巡らし、内側に土塁を築いている。慶長16年（1611）、法藏寺が吉野梶海波から移転し、現在に至っている。

構えの墓館跡 法藏寺館の南200mに位置する。三方を堀が巡り、西に堀の痕と考えられる一段と低い塁が残る。法藏寺館の前衛（構え）として構築されたと考えられている。

中村堀屋敷跡 豊科町の中央部吉野地区に位置する。東西45m、南北36mの屋敷地で、西と南に規模の小さい堀と土塁を残している。築造年代は明らかでないが、小笠原氏配下の平瀬氏の寄子、丸山氏が居住していたと推定されている。

吉野町館跡（堀の内） 中村堀屋敷の南300mに位置し、堀の跡と土塁をわずかに残す。主郭は約70m四方で、その西に副郭が設けられている。1990年、主郭部分ほぼ全域の発掘調査が行われ、堀をはじめ、約580の土坑・柱穴が検出されている。堀は幅3.3～4.5m、深さは約1mであった。遺物から、16世紀末に築かれたことが推定される。

成相氏館跡 西部、本村地区に位置する。堀・土塁などの遺構は残っていない。

飯田砦跡 南東部、飯田地区に位置する。四周に土塁をよく残し、その内側は東西30m、南北25mを測る。東と北側の堀は十か塁となって残っている。飯田氏の屋敷であったと考えられている。

真々部氏館跡 豊科町の南西部、真々部地区に位置する。方約80mで、堀と土塁の痕をわずかに残している。また、現在金壇寺となっている場所が副郭であったと推定されている。武田氏の安芸侵攻に際して築かれ、真々部氏が居館したとされる。周囲には多くの寺院も建立されている。

熊倉氏館跡 土塁と竹の群生により、熊倉地区、春日神社南方の河岸段丘上に推定されている。熊倉氏は永亨の乱（1439年）の「結城陣番帳」にその名が見られる。

町田館跡 海野氏の一派、田沢氏が居館したと考えられるもので、田沢川の右岸、町



挿図5 遺跡周辺字界図

(豊科町地方史同好会作成字界図より)

田の段丘上に推定されている。

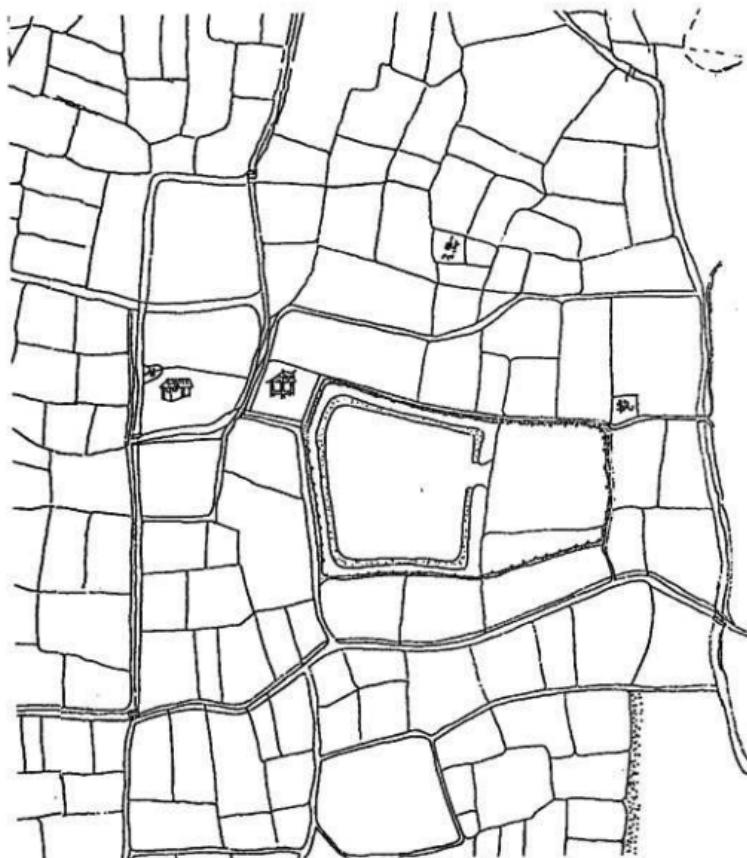
田沢城跡 光城山の南西に張り出した尾根上に位置し、堅堀と段郭が確認されている。主郭の範囲は 26×20 mを測る。

光城跡 光城山山頂にあり、主郭は東西50m、南北15m、副郭は東西42m、南北18mを測る。また、主郭の後背を中心に多くの堅堀が設けられている。

上ノ山城跡 上ノ山の北方の尾根上に位置し、三段の郭と土塁を残している。小型の城で、主郭は南北19m、東西15mを測る。城下に館が推定される花村若狭の城であったと推定されている。

鳥羽館跡 豊科町大字豊科145番地があたり、南北約80m、東西約90mを測る。その西北隅に堀と土塁をよく残している。東には土塁に囲まれた副郭（字古屋敷、149番地）がある。また、東北に稻荷社、北に山の神が祭られており、西には阿弥陀堂があったとされる（資料1）。挿図6は鳥羽家蔵の天保2年（1831）の絵図で、堀と土塁が確認できる。館主

は平瀬氏配下で、後に筆貢に移った丸山将監と推定されている。丸山氏は既に、天正7年（1579）の諏訪大社『下宮春宮造営帳』に「代官丸山管三」とその名が見られ（資料3）、天正年代には鳥羽にいたことが窺える。



挿図6 「天保二辛卯年墨引量分圖成相組上鳥羽村繪面」（部分）
（鳥羽の自然と歴史研究会トレス）

第4節 中・近世の鳥羽

鳥羽郷 文献上における鳥羽の初見は文明8年(1476)の『下諏訪春秋両宮御造営帳』で、住吉庄18郷のうちに「戸間」郷が認められる。「戸間分 合羽拾參俵壹斗 此代武賀七百文」と記されており、2700文を負担したことがわかる(資料2)。次いで天正7年(1579)の『下宮春宮造営帳』では「鳥羽分 正物壹貫四百九十文 代官 丸山管三」となっており、1490文を負担している(資料3)。周辺村落と造営負担額を比較すると、前者では真々部の4400文、飯田の3600文、中曾根の4400文などに比べて少なく、後者では真々部の1515文、飯田の1280文、中曾根の1550文などと肩を並べるほどになっている。この100年間に鳥羽郷の開発が進展したことが窺える。

日光寺 鳥羽館跡遺跡の北方、800mには寺村という村落がある。現在、下鳥羽西原に所在する日光寺の故地とされる地域で、本寺・古寺・大門沖・薬師堂の地字を残している。同寺縁起によると天文20年(1551)に武田氏の兵火によって消失、弘治3年(1557)再建以来、幾度か消失・再建の記録があり、その後現在地へ移ったことが記されている。ちなみに、は場整備事業に伴い実施した立会調査ではその痕跡は認められていない。

近世初頭の鳥羽 上鳥羽村は鳥羽堰を中心に関開し、西村・北村・東村・南村の4集落を形成している。寛文6年の検地帳によれば、家数は本百姓19、門百姓9で五人組は4組となっている。庄屋は鳥羽館跡を屋敷にしている。

註 (1) 遺跡名についても若干の混乱が生じている(続ヶ池遺跡等)。現在、あらためて調査・確認作業を進めており、今後、変更することがあり得る。

参考文献 『豊科町誌』(1955年)

『南安曇郡誌』第二巻上(1968年)

長野県教育委員会『長野県の中世城館跡一分布調査報告書』(1983年)

長野県教育委員会『上手木戸遺跡』(『中央自動車道長野線埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 10—豊科町内一』、1989年)

豊科町教育委員会『豊科町の土地に刻まれた歴史』(1991年)

中野正寅『上下両鳥羽村の村落史』(『信濃』46-2、1994年)

資料1

「国安郡烏羽村ニ小庵有之、開基丸山特監居士と申云ハ
候、元ハ塔原(生家か)小丸山ニ城主ニ西、丹経原(平家家か)
合戦ニ老武者故、深手ニ而烏羽村ニ養生、其筋真々部尾張守
真光禄者故引取、介抱ニ而落命、大凡于レ今右之法名ニ而御
座候、勇猛之将領ニ氣、旧名ニ而事相済候中被レ中置候趣杯、
近所真々部村真光寺提岩和尚之茶話ニ而承り及候、其後当地
ニ而丸山氏と申方へ相尋候得共、貌と相知不レ申候、元末ハ
右之御方大身にて、犬上、平瀬等之城主と同様ニ申伝候事、
鳥羽之居屋舎不なども、只今ハ廻环も荒じ、廢地方上間計、
只法号ト俗号と同様ニ書候迄ニて、體成事不レ存候、御學故、
右有增ニ通御座候、以上

八月口

正願寺

小見奥右衛門尉様

御尋ニ付

(豊岡町の土地に刻まれた歴史より)

下諒方春秋兩宮御造宮帳

戸間分

合初拾參依堂斗此代威質ヒ百文

同人

資料2

(叢書教育会編『叢訪史料叢書』第2巻
1983年より)

正物壹貫五百五十文

中曾根分
代官

正物壹貫四百九十五文
正物壹貫八百八十文

飯田分
代官

熊倉分
代官
飯田右馬充
二木清介
竹内筑後
同名山下野
丸山智三

正物壹貫五百八十文

中曾根分
代官

四郎左衛門尉
六郎左衛門尉

資料3

下　宮　春　宮

正物壹貫五百十五文　真々部分

外玉鳥御
代官　飯鳩專祐

有賀旗石衛門尉

(叢書教育会編『叢訪史料叢書』第2巻
1983年より)

合羽甘武侯代四貫四百文

飯田分
中曾根分

同人

合羽甘武侯代四貫四百文

中曾根分

同人

第3章 調査の結果

第1節 調査の概要

調査の概要　調査は、一部トレンチ法を用いながら、館跡の主郭部分の半分近くを全面的に発掘した。調査面積は2,875m²である。調査地内で上の入れ替えをし2回に分けて検出したこと。中間土の擾乱が著しかったこと。礫が多く検出が困難であったことから十分に遺構を明らかにできたとはいえないが、当初、確認されていなかった平安時代の堅穴住居址をはじめ、館の掘・多くの建物跡・土坑などの遺構を調査した。これらは遺物からみると概ね9世紀代、15世紀から20世紀までに位置づけられそうである。

遺構と遺物の概要　平安時代の堅穴住居址は1軒検出された。吉野町遺跡の8軒、拠海渡遺跡の1軒の調査例に次ぐもので、ほぼ同時期のものととらえられよう。そこから出土した遺物は少なく、わずかに須恵器と黒色土器の环があわせて3点得られただけである。しかし、少量ながら平安時代の遺物は調査地内に広く分布しており、周辺に遺構があったことも考えられる。

中世以降の遺構には館跡の堀、掘立柱の建物、土坑等がある。しかし、多くの柱穴が検出されたものの建物に組めた例は少なく、館の様相は十分に明らかにできたとはいえない。今後の検討課題である。遺物には在地産の土器・陶器・国内外の陶磁器といった多くの焼き物の他に、錢貨、鉄器、石器などがある。

第2節 遺構

1 堅穴住居址

平安時代に属する堅穴住居址を取り上げる。中世以降のもので、規模からその範疇に入ると考えられるものがあるが、それらは土坑の項で取り上げる。

S B 1　D-10に位置する。礫混じりの褐色土を掘り込んで構築されており、SK7・P17に南側を切られる。平面形は4.00×4.35mの方形で、主軸方向はN-87°-Eを示している。壁は一部で崩落しているが、ほぼ直に掘り込まれたものと考えられる。床面は礫が

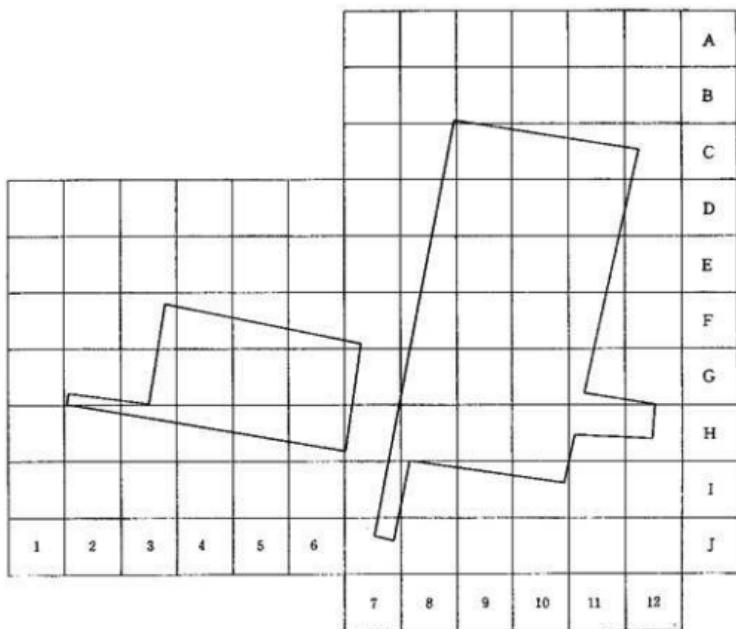


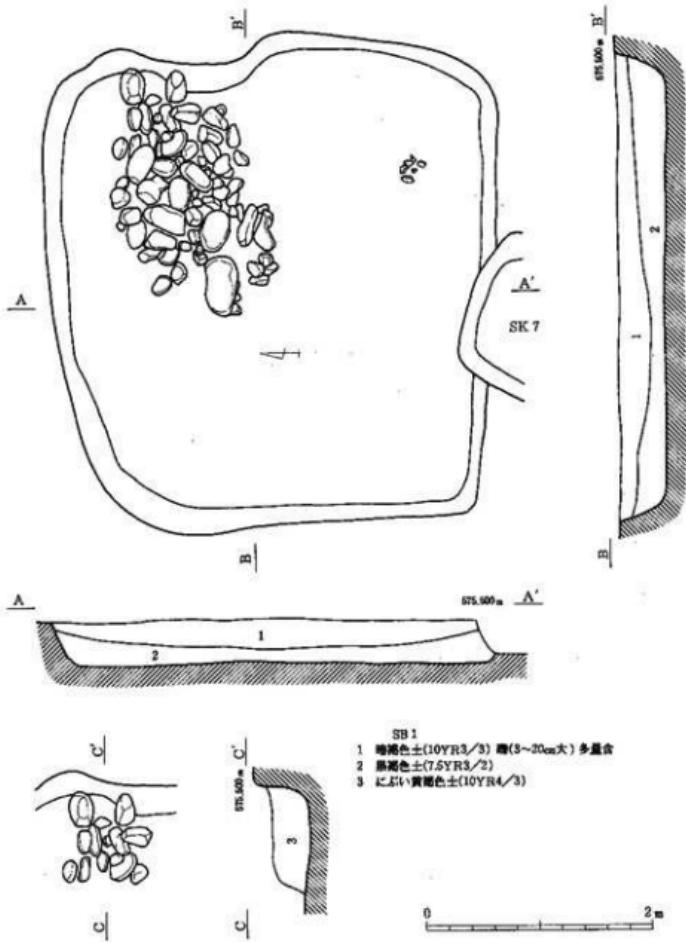
図7 調査地区画図

混じるが概ね平坦であった。しかし全体に軟弱で、堅緻な部分あるいは貼り床は認められなかった。

カマドは東壁の中央より北側に寄ったところに設けられている。15~30cm大の花崗岩を芯材に用いて構築されている。比較的小形で、芯材になる左右の壁の間隔は狭い。火床は薄く、焼土の散布もわずかに認められたにすぎなかった。貯蔵穴等の施設、柱穴は検出されていない。

覆土は二層に分かれ。自然堆積の様相を呈しているが、カマド前には20~50cm大の多量の礫が、意図的に投入されている。

遺物は少なく、カマド前の礫の下から黒色土器壺1個体と軟質な須恵器壺1個体が、南東床面から須恵器壺1個体が出土しただけである。他に土器片はわずかに2点小片が得られただけで、十脚器の甕類などは一切認められなかった。黒色土器壺の体部外面、須恵器壺の底部外面にはそれぞれ墨書きがあった。



掲図8 SB1実測図

2 土坑・柱穴（掘立柱建物）

平面形態・規模・出土遺物等さまざまな、多くの坑が検出された。過去2年間の中・近世遺跡の調査経験から、規模・覆土等の違いにより土坑と柱穴を分け、柱穴については表により提示（付表）した。本項では土坑89基と、柱穴のうち建物に組めた2棟について取り上げる。

SK1 主郭北側C-9で掘端から1.5m入ったところに位置する。平面形は0.93×0.70mのやや不整の椭円形を呈す。深さは10cm、覆土は灰黄褐色土で1層はしまりを欠き10cm大の礫を含んでいた。また、底面にも大形の礫が露出している。

遺物の出土はなかった。本址は掘り込みがしっかりしていないことから、搅乱によるものとも考えられよう。

SK2 主郭北東側端部のC-10に位置する。平面形は1.83×0.95mの椭円形で、疊混じりの褐色土中を直に掘り込んで構築されている。深さは31cmを測り、底面はほぼ平坦であった。覆土は暗褐色土の単層で小礫を少量含んでいる。

遺物には黒色土器杯の小片がある。また、北東側、底面より5cmほど浮いたところから銭貨が出土している。

SK3 主郭北東隅 D-11の掘端に位置する。1.13×1.05mの不整円形を呈す浅い鉢状の構造で、深さは12cmを測る。覆土は二層に分かれ。とともに炭化物を含んでいるが、特に下層に顕著であった。また、上層には10cm大の礫も多く見られた。

遺物の出土はない。

SK4 主郭北側 D-8に位置する。平面形は1.93×1.85mの隅丸方形で、壁は斜めに掘り込まれている。深さは28cmを測る。底面は平坦でしっかりしており、その東隅の壁際に径25cm、深さ30cmの穴が掘り込まれている。覆土は三層に分かれ。うち、1層には小礫が多量に含まれていた。

遺物の出土はない。底面の穴については本址の施設とは考え難く、切り合い関係があつたと思われる。

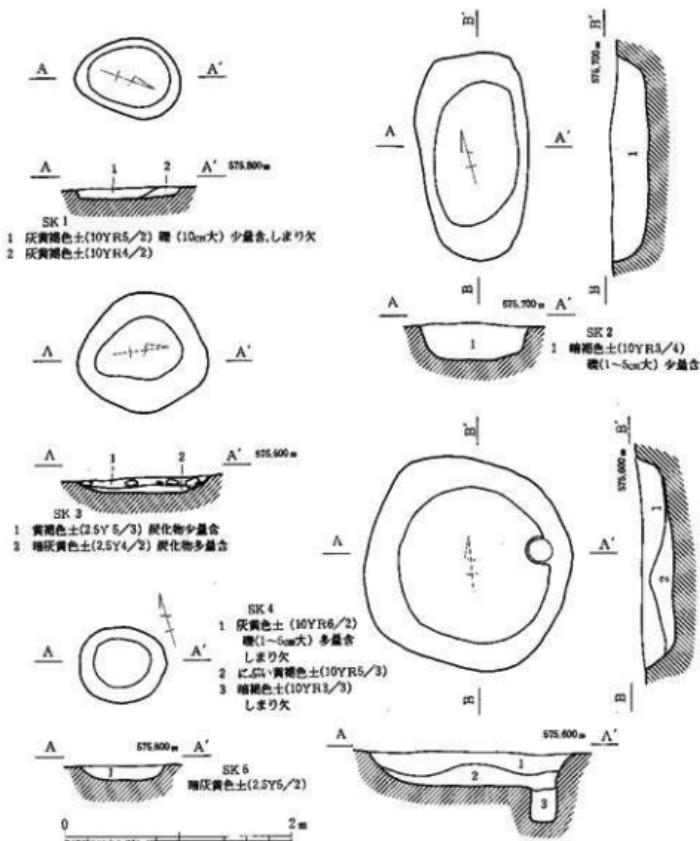
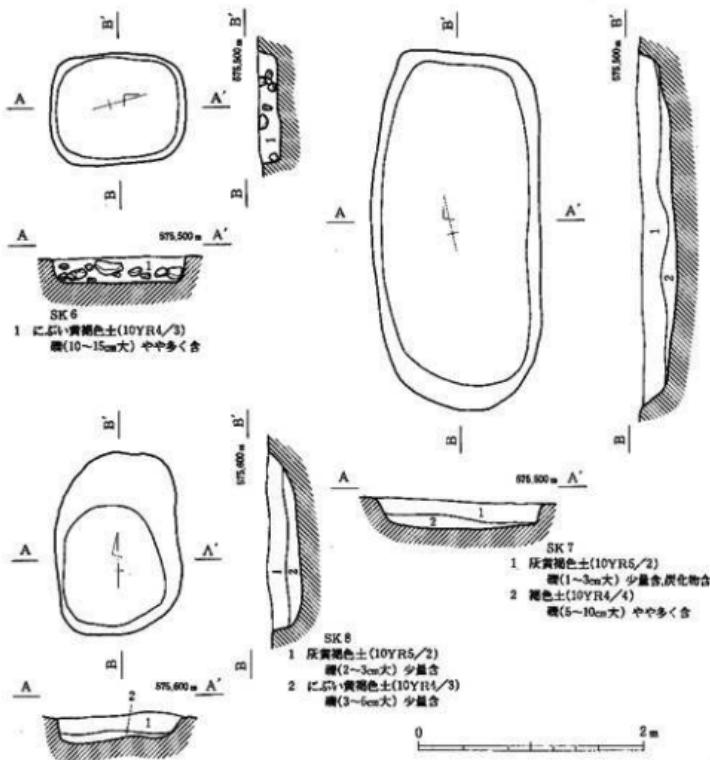


図9 SK 1 ~ 5実測図

SK 5 主郭北側 D-9に位置し、SK 4に近接する。0.75×0.70mの円形を呈す浅い遺構である。掘り込みは不安定で、底面にも礫が露出する。覆土は暗灰黄色土の単層で炭化物がわずかに見られた。

遺物には上器皿の小片がある。



挿図10 SK6～8実測図

SK 6 七郭北東側 D-10にSK7と並んで位置する。礫を多量に含む褐色土中に掘り込まれて構築されており、平面形は1.33×1.04mの隅丸方形を呈す。壁は直で、底面は平坦であった。深さは20cmを測る。覆土はにぶい黄褐色土の単層で、南東側を中心として礫を多く含んでいた。

遺物の出土はない。

SK7 主郭北東側 D-10に位置し、SB1を切る。平面形は3.15×1.50mの隅丸長方形を呈す。壁は崩落のためか南西側で緩やかになるが、ほぼ直に掘り込まれており、底面は概ね平坦であった。覆土は二層に分かれ。礫が多く含まれており、また1層中には炭化物も見られた。

遺物は西壁際中位より砥石、南西壁際底より凹石の出上がある。

SK8 主郭北東隅 D-10に位置する。平面形は1.65×1.10mの楕円形で、深さは27cmを測る。壁は斜めに掘り込まれておき、北側で特に緩やかになっている。また、底面はやや傾斜をもっており、覆土には全面に礫が含まれていた。

遺物の出土はなかった。

SK9 主郭北東側 E-9に位置する。平面形は2.90×1.34mの長楕円形を呈し、深さは41cmを測る。壁は東西がゆるやかになっているが、南北は直に掘り込まれている。底面は基盤の礫が顔をのぞかせるものの、概ね平坦であった。覆土は三層に分かれ。全体に礫を多量に含んでおり、また、1・2層中には炭化材（クヌギ・ヒノキ）が含まれていた。

遺物は大窯期の灰釉丸皿（16世紀中葉）と内耳土器、釘が出土している。

SK10 主郭北東側 E-10に位置する。平面形は0.65×0.63mの円形で、深さ10cmほどの浅い遺構である。底面には基盤の礫層が露出しており、また覆土中にも小礫が少量含まれている。

遺物の出土はなかった。

SK11 主郭東端やや北寄り E-10にSK12と並んで位置する。平面形は0.90×0.79mの楕円形で深さは15cmを測る。壁はやや崩落しているが、斜めに掘り込まれていたものであろう。底面はほぼ平坦であった。遺物の出土はない。

SK12 主郭東端やや北寄り E-11にSK11と並んで位置する。平面形は0.80×0.70mの円形で、断面半円形に掘り込まれている。最大壁高は25cmを測る。覆土は二層に分かれ。うち、2層の上位中央に15cm大的の礫が1個入り込んでいた。遺物の出土はなかった。

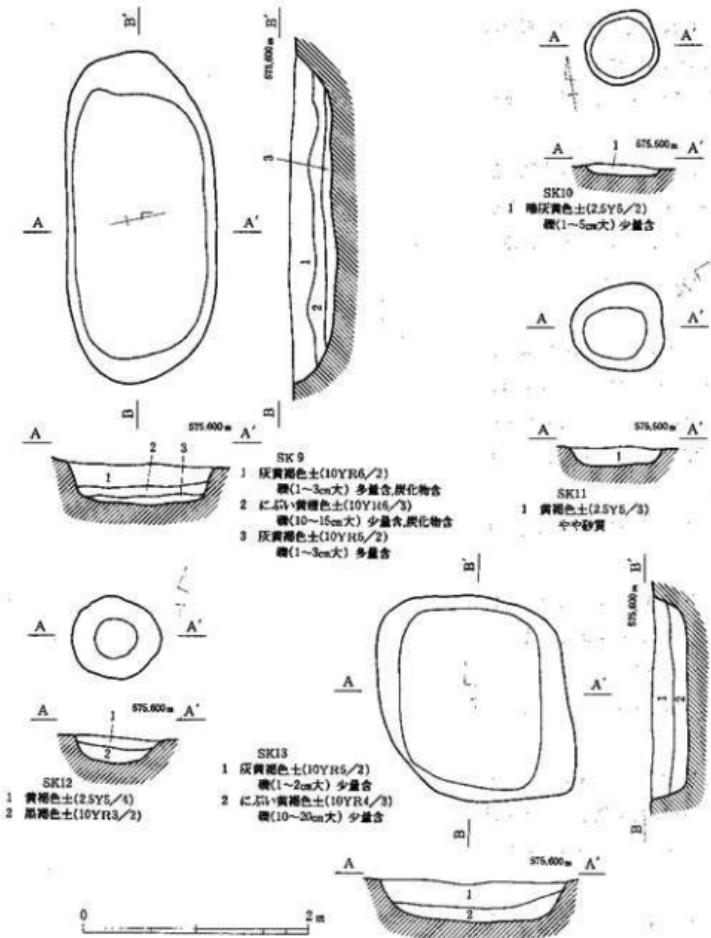


图11 SK9～13実測図

SK13 主郭中央やや北東寄り E-9に位置し、SK14に近接する。礫混じりの褐色土中に掘り込まれて構築されており、平面形は 1.85×1.65 mの不整長方形を呈す。壁は斜めで、底面は基盤の礫が露出するものの概ね平坦であった。覆土は二層に分かれ、ともに礫が含まれている。特に2層中には大形の礫が見られ、北と西の壁際には30cm大のものもあった。

遺物の出土はない。

SK14 千郭中央やや北東寄り E-8に位置し、SK13に近接する。平面形は 1.28×1.10 mの不整円形を呈す。断面半円形に深く掘り込まれており、最大壁高は43cmを測る。覆土は小礫を少量含む灰黄褐色土でSK13の上層と同様であった。

遺物の出土はなかった。

SK15 主郭東端やや北寄り F-10に位置し、SK11・12・16に近接する。 1.60×1.35 mの円形で浅い遺構である。壁は斜めに掘り込まれており、底面は平坦であった。覆土は黒褐色土の単層である。

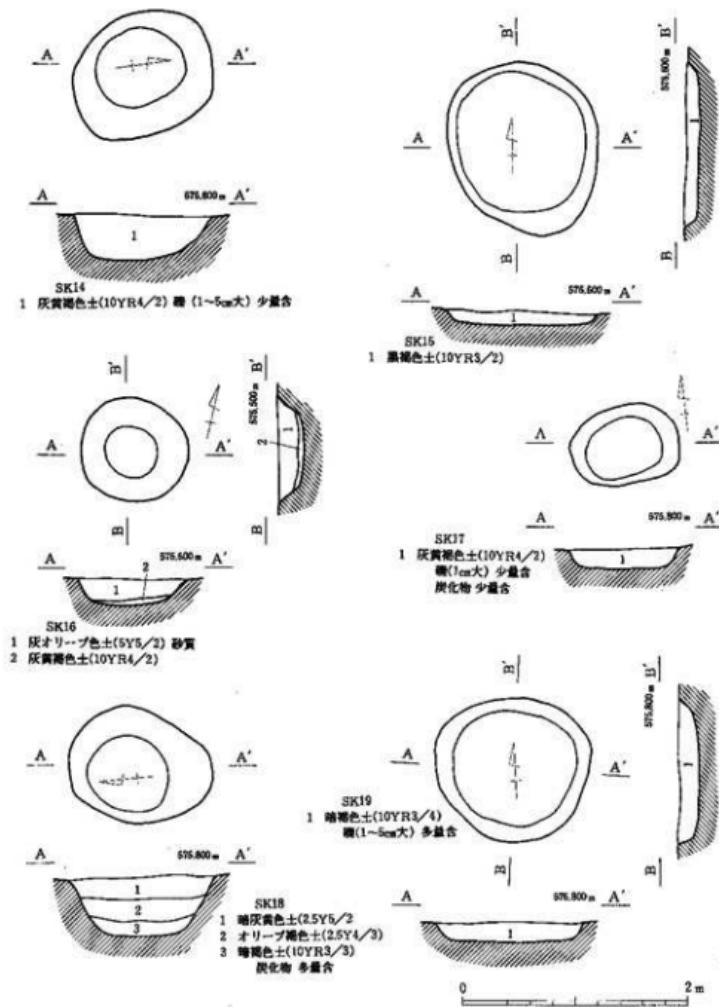
遺物は北西隅から大窯期の灰釉丸皿（16世紀中葉）が出上している。

SK16 主郭東端やや北寄り F-10に位置し、SK15に近接する。礫混じりの暗褐色土中に掘り込まれて構築されており、平面形は 1.12×1.05 mの円形を呈す。壁は斜めで緩やかな傾斜をもっており、また、底面も丸みを有している。覆土は二層に分かれ。底に薄く灰黄褐色土の堆積があるが、その上は砂質の灰オリーブ色土が入り込んでいる。礫は含まれていなかった。

遺物の出土はない。

SK17 主郭中央 E-8に位置する。平面形は 0.96×0.70 mの精円形を呈し、壁高は28cmを測る。壁は斜めに掘り込まれており、底面は概ね平坦である。覆土は灰黄褐色土の単層で、小礫と炭化物を少量含んでいる。

遺物は北側上面より陶器片（19世紀以降）が出土している。



挿図12 SK14~19実測図

SK18 主郭中央 F-8に位置する。平面形は1.30×1.00mの梢円形を呈し、残存壁高は53cmを測る。壁は斜めに深く掘り込まれており、底面はやや丸みをもっている。覆土は三層に分かれる。うち、3層中に炭化物が多量に含まれていた。

遺物の出土はなかった。

SK19 主郭中央 F-8に位置し、SK20に近接する。平面形は1.35×1.30mの円形で、最大壁高は20cmを測る。壁は斜めに掘り込まれ、底面は平坦であった。覆土は暗褐色土の単層で小礫が含まれている。

遺物の出土はなかった。

SK20 主郭中央 F-8に位置し、SK19に近接する。平面形は1.58×1.50mのやや不整の円形で、最大壁高は43cmを測る。壁はほぼ直に掘り込まれておらず、底面はやや丸みをもつものの平坦であった。覆土は二層に分かれる。ともに炭化物を微量含んでいる。

遺物は検出面から須恵器壺・黒色土器壊の小片、2層中より古瀬戸天目茶碗、土器皿、内耳土器が出土している。

SK21 主郭中央やや東側 F-9に位置する。南側をSK33に切られ長辺の長さが不明であるが、概ね3.8×2.10mの不整の長方形を呈している。主軸方向はN-7°-Eを指す。壁はほぼ直に掘り込まれておらず、最大壁高は38cmを測る。底面は平坦であるが、一部基盤の礫が露出していた。覆土は二層に分かれ、ともに炭化物を少量含んでいる。

遺物には須恵器壺片、土器皿、古瀬戸天目茶碗（15世紀中葉）がある。特に西側からの出土が多い。また、西壁際-30cmに石鐵が混入していた。

SK22 主郭東側中央 F-10に位置する。平面形は4.88×2.10mの長方形で、主軸方向はN-16°-Eを指す。基盤の礫混じりの褐色土中に斜めに深く掘り込まれており、最大壁高は61cmを測る。底面は平坦で、わずかであるが鉄分の沈澱も認められた。覆土は七層に分かれる。6・7層を除いて焼土・炭化物が多量に含まれており、また、1・4層の西側を中心に大形の礫もあった。炭化物の多くは大麦の種子とスギ・ヒノキなどの材であり、大麦は1～3層に、材は4層に多い。焼土は全体に小塊が含まれているが、覆土中位では層を成している（2層）。しかし、礫は特に被熱した様子が窺えず、この遺構の中で何

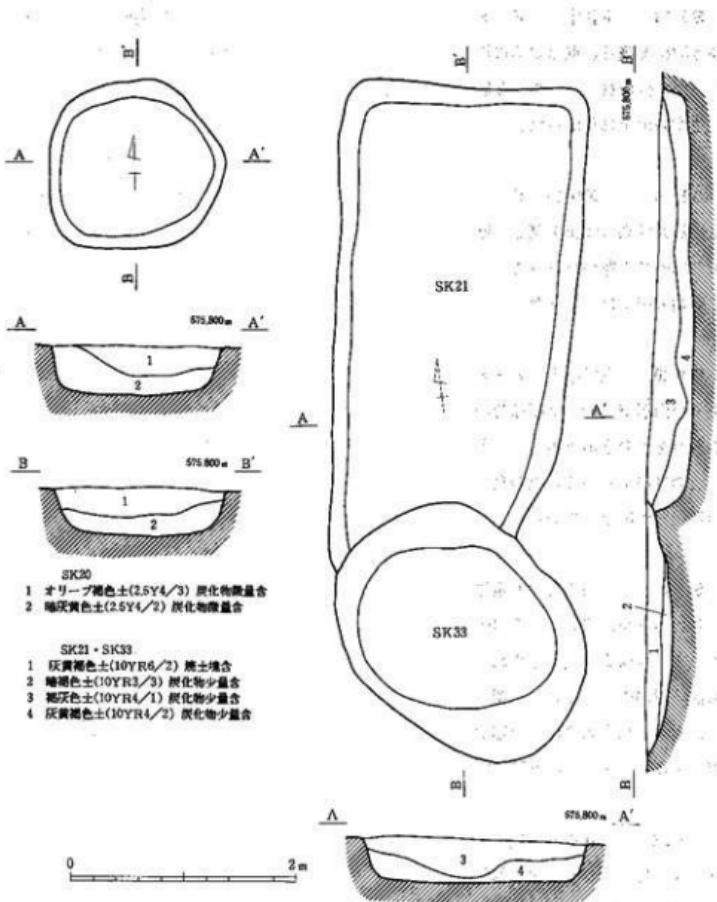


図13 SK20・21・33実測図

らかの焼成活動が行われたり、火災が起ったとは考えがたい。

遺物は北東側1層中より黒色土器碗、内耳土器、土器皿、古瀬戸と思われる小片、また材に打ちつけたと思われる釘が出土している。

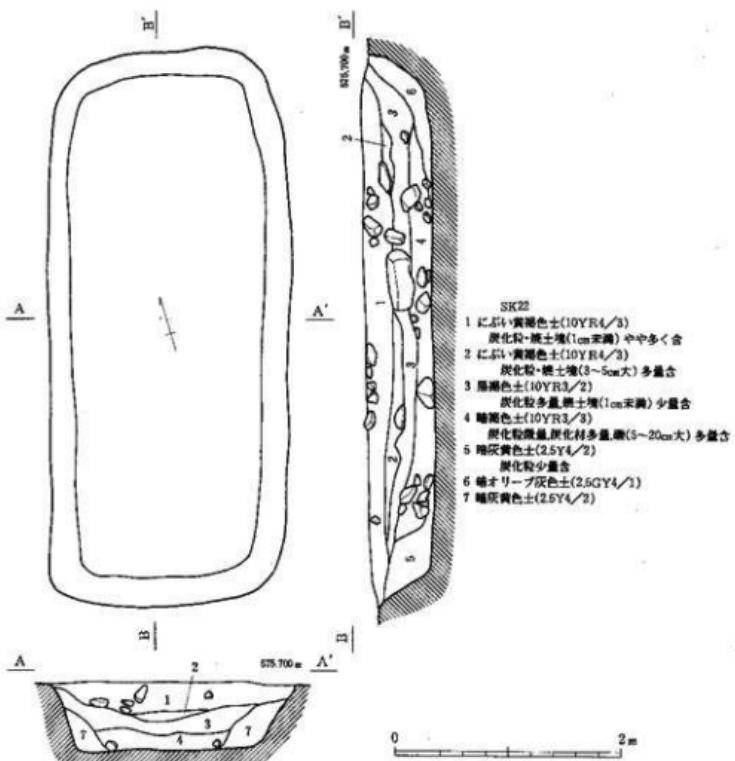


図14 SK22実測図

SK23 主郭東端中央 F-10に位置する。東側で堀の堆積土が載るが、接して併存していたものと考えられる。平面形は4.30×3.65mの不整円形を呈す。深さ135cmで、深く斜めに掘り込まれ、すり鉢状となっている。覆土は大きく二層に分かれる。うち、2層は粘性に富み、3層は砂質で炭化物を少量含んでいた。また、底から壁にかけて鉄分の沈澱も認められており、灌水していたことが窺える。堀と接続して水を貯めた施設だったのであろう。

遺物は主に上位より出土した。須恵器壺・黒色土器壺の小片がそれぞれ1点ずつ。他に内耳土器がある。

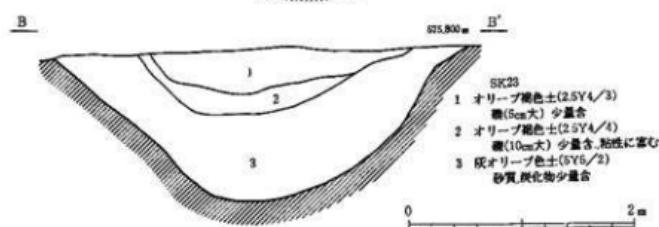
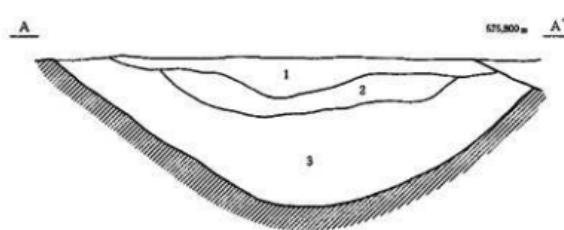
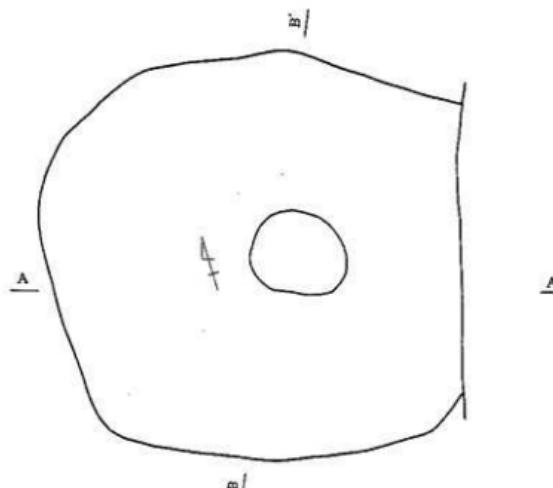


図15 SK23実測図

SK24 主郭中央やや東側 G-9に位置し、SK21・33に近接する。平面形は2.10×1.65mの楕円形で、壁高は35cmを測る。壁は西側でやや崩落が認められるが、ほぼ直に掘り込まれていた。底面は平坦である。覆土は三層に分かれ、全体に小礫を少量含んでいた。また、2層に焼土が含まれ、3層東側からは炭化物が出上した。炭化物は表面に漆を喰ったヒノキ片であるが、形状は不明である。

遺物には土師器甕の小片、古瀬戸瓶子（13世紀）、灰釉鉢（19世紀）がある。

SK25 主郭中央 F-8に位置する。平面形は1.70×1.36mの楕円形で、ほぼ垂直に掘り込まれた壁の高さは48cmを測る。覆土は暗褐色土の単層で、小礫がやや多く含まれている。底面は西側で基盤の礫が露出するものの平坦であった。

遺物は北側より陶器の小片が出土している。

SK26 主郭中央 G-8に位置する。平面形は0.92×0.55mの楕円形で、壁は斜めに掘り込まれている。底面は基盤の礫が露出するもののほぼ平坦であった。覆土中には灰色土塊と10cm大の礫が含まれており、意図的に埋めたことが窺える。

遺物の出土はない。

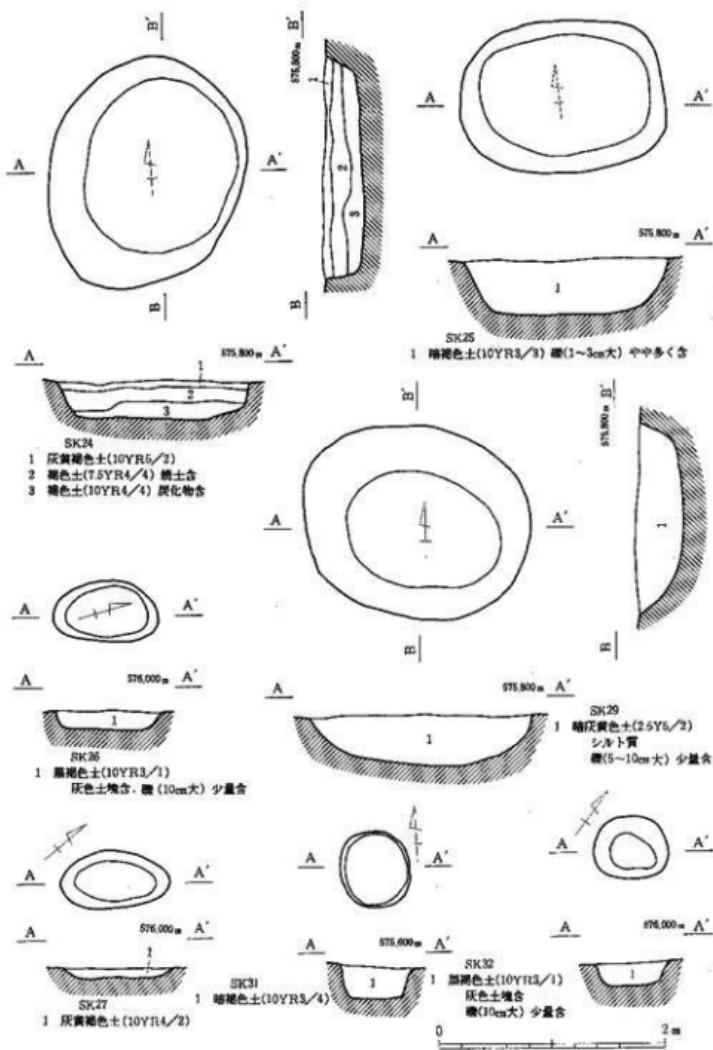
SK27 主郭中央やや東側 G-8に位置し、SK21・33に近接する。1.00×0.50mの長楕円形を呈す浅い遺構である。壁は斜めで、底面にはやや凹凸がある。覆土は灰黄褐色土の単層であった。

遺物の出土はなかった。

SK28 主郭東側中央 G-10に位置し、SK22に近接する。平面形は2.03×1.71mの楕円形を呈す。壁は緩やかな傾斜を持っており、また底面も丸みを有している。覆土は暗灰黄色土の単層で、やや粘性に富んでいる。また、その最下位、底面に接して炭化物と漆膜が出土した。

他に遺物の出土はなかった。

SK31 主郭中央東側 F-9に位置する。南西から北東方向へ溝状に堆積する疊混じりの黒褐色土中に構築された円形の遺構である。規模は0.67×0.60mで、壁高は30cmを測



擇図16 SK24~32実測図

る。底面は平坦であるが、中央に35cm大の礫、それを取り囲むように5cm大の礫があった。覆土は暗褐色土の単層である。

遺物の出土はない。

SK32 主郭中央 G-8 に位置する。平面形は 0.68×0.58 m の楕円形を呈し、壁高は20cmを測る。壁は斜めに掘り込まれ、底面は平坦である。覆土は黒褐色土の単層であるが、灰色土塊と10cm大の礫が含まれている。北東2mに位置するSK26と共通するもので、意図的に埋められたものと考える。

遺物の出土はなかった。

SK33 壬郭中央東側 G-9 に位置し、SK21を切って構築されている。平面形は 2.40×1.85 m の不整円形を呈す。底面から壁が緩やかに弧を描きながら立ち上がっており、深さは22cmを測る。壁・底面とも基盤の礫が露出している。覆土は二層に分かれ、1層中には焼土塊、2層中には炭化物が認められた。

遺物には陶器小片と上器皿がある。

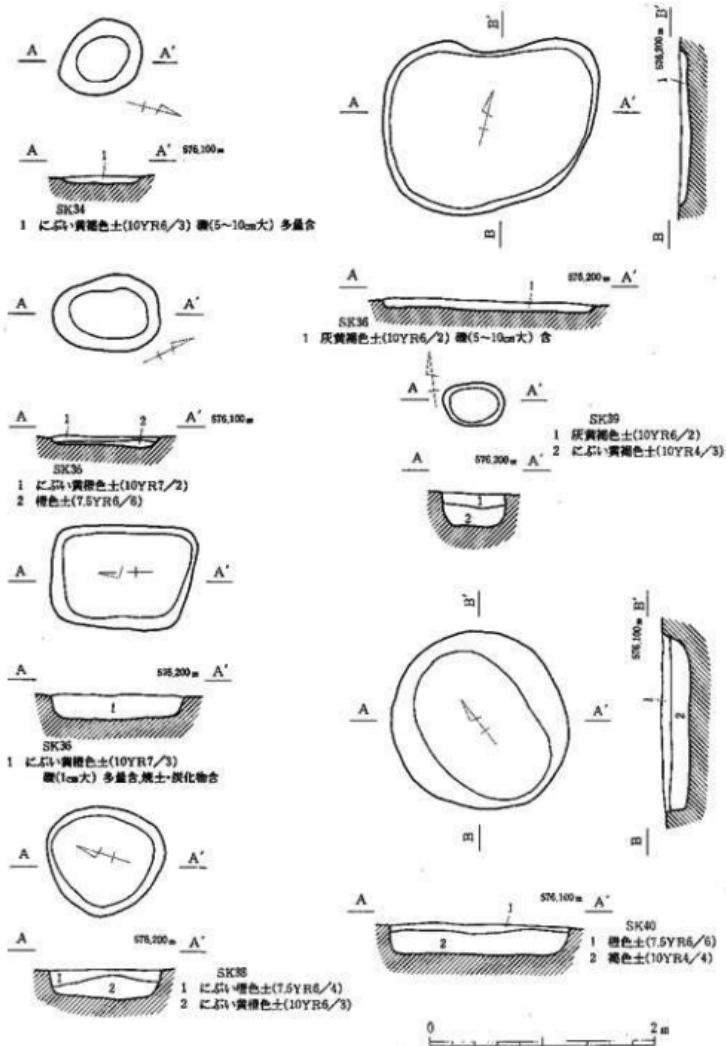
SK34 主郭南側中央 H-6 に位置し、平面形は 0.81×0.67 m の不整円形を呈す。深さ6cmの浅い造構で、壁・底面とも掘り込みがしっかりしていない。覆土はにぶい黄褐色を呈している。遺物の出土はなかった。

SK35 主郭南側中央 H-6 に位置し、SK36に近接する。平面形は 0.95×0.68 m の楕円形で、深さ8cmほどの浅い造構である。壁は斜めに緩く掘り込まれており、底面はほぼ平坦であった。しかし礫が露出し、特に底面の境が判然としなかった。覆土は褐色の強いもので、二層に分かれる。

遺物の出土はない。

SK36 主郭南側中央 H-6 に位置し、平面形は 1.85×1.40 m の不整形を呈す。深さは10cmと浅く、底面はほぼ平坦であった。5~10cm大の多量の礫が詰まっており、その上に灰黄褐色土が堆積したものと考えられる。

遺物は北西側より陶器小片（中世）が出土している。



挿図17 SK34~40実測図

SK37 主郭中央西側 F-5に位置する。平面形は $1.27 \times 0.93\text{m}$ の不整形を呈し、壁高は21cmを測る。底面には基盤の跡が露出しており、また緩やかに傾斜を持っている。覆土は小礫が多量に入ったにぶい黄橙色上で、焼土と炭化物が認められた。

遺物には土器皿と内耳土器がある。また、漆膜と錢貨（至道元宝）、釘も出土している。

SK38 主郭中央南西側 G-5に位置し、平面形は $1.07 \times 0.95\text{m}$ の不整形を呈す。壁は直に掘り込まれているが、底面はやや丸みを有している。残存する壁高は25cmを測る。覆土は礫をほとんど含まないもので、二層に分かれれる。

遺物の出土はなかった。

SK39 主郭南側中央 G-6に位置し、SK45に近接する。楕円形の小形の遺構で、規模は $0.55 \times 0.37\text{m}$ 、深さは32cmを測る。壁は直、底面はほぼ平坦に掘り込まれている。覆土は礫の混入の少ないもので、二層に分かれれる。

遺物の出土はない。

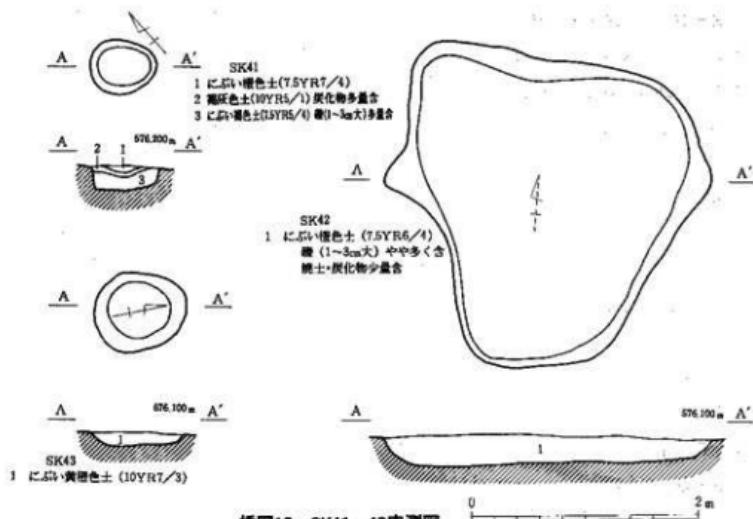
SK40 主郭南側やや西寄り H-5に位置する。平面形は $1.64 \times 1.55\text{m}$ の楕円形を呈す。底面は平坦で、壁は一部崩落しているものの直に掘り込まれている。壁高は28cmを測る。覆土は礫の混入の少ないもので、二層に分かれれる。

遺物には古瀬戸茶壺・灰釉仏花瓶（15世紀）がある。

SK41 主郭中央西側 G-5に位置し、SK42に近接する。楕円形の小形の遺構で、規模は $0.58 \times 0.50\text{m}$ 、深さは23cmを測る。壁は直に掘り込まれており、底面は南西側が高くなっている。覆土は二層に分かれれる。うち2層中に炭化物が多量に、また3層中に小礫が多量に含まれていた。

遺物は南側より志野丸皿（17世紀）が出上している。

SK42 主郭中央やや西側 F-5に位置する。 $2.75 \times 2.60\text{m}$ の不整形を呈し、深さは25cmを測る。壁は崩落している部分もあるが、ほぼ斜めに掘り込まれていたと考えられる。底面には基盤の跡が露出しており、緩やかな傾斜を持っている。覆土はにぶい橙色土の單層で小礫がやや多く含まれていた。また、焼土・炭化物も少量認められた。



挿図18 SK41~43実測図

遺物には須恵器壺・黒色土器坏の小片、土器皿、内耳土器、古瀬戸鉄釉平碗（15世紀）、大窓期の灰釉丸皿（16世紀）と瀬戸美濃天目茶碗（18世紀）がある。

SK43 主郭中央や東側 H-5に位置し、SK42に近接する。円形の小形の遺構で、規模は 0.80×0.71 m、深さは7cmを測る。やや傾斜を持つ底面から壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は礫の混入の少ないぶい黄褐色であった。

遺物の出土はない。

SK44 主郭南側中央 H-6に位置し、平面形は 2.18×1.82 mの不整梢円形を呈す。壁はほぼ直に掘り込まれており、残存する壁高は35cmを測る。礫混じりの底面は緩やかな傾斜を持っており、やや西側が高くなっている。覆土はぶい黄褐色上の単層であるが、西から北側にかけては礫が多量に認められた。

遺物には内耳土器の小片がある。

SK45 主郭南側中央 G-6に位置する。平面形は 1.74×0.94 mの隅丸長方形で、深さは24cmを測る。壁は直に掘り込まれ、底面は一部礫が混じるが、ほぼ平坦であった。

覆土は二層に分かれる。うち、1層は礫とともに炭化物が多量に認められ、また2層は砂質であった。

釘と明治時代の一銭銅貨が1層上位より出土している。

SK46 主郭西側中央 F-3に位置する。平面形は $0.78 \times 0.42\text{m}$ の不規格円形を呈し、深さは22cmを測る。壁は斜めに掘り込まれており、底面は礫が混じるもののはば平坦であった。覆土は黒褐色土の単層で小礫が少量含まれている。

遺物の出土はない。

SK47 主郭西側中央 F-1に位置し、小礫が多量に混じる褐色土中に掘り込まれて構築されている。平面形は $2.07 \times 1.40\text{m}$ のやや不整の楕円形を呈す。壁は緩やかで、礫の混じる底面もやや傾斜を持ち、浅いすり鉢状になっている。覆土はオリーブ黒色土の単層で、小礫が少量含まれていた。

遺物には黒色土器壺と磁器の小片がある。

SK48 主郭西側中央 F-4に位置する。円形の小さな追構で、規模は $0.60 \times 0.55\text{m}$ 、深さ15cmを測る。壁は緩やかに掘り込まれ、礫混じりの底面も丸みを持っている。覆土は黄灰色土の単層であった。

遺物の出土はない。

SK49 主郭中央やや西寄り F-4に位置する。平面形は一辺が 1.85m の方形を呈す。壁は直に掘り込まれ、一部袋状になっている。深さは60cmある。底面は基盤の礫が顔を出すものの平坦であった。覆土は三層に分かれる。うち、3層中に炭化物が多量に含まれていた。

遺物は1層中より内耳土器・石臼、2層中より黒色土器壺・須恵器壺・内耳土器が出上了。主体は内耳土器である。また、北西側の3層上位に骨片が少量認められた。

SK50 主郭西側中央 F-4に位置する。平面形は $1.85 \times 1.43\text{m}$ の楕円形を呈す。壁は斜めに掘り込まれており、小礫混じりの底面も緩やかな傾斜を持っている。残存する壁高は29cmを測る。覆土は暗灰黄色土の単層で炭化物が少額認められた。また、南側に30cm

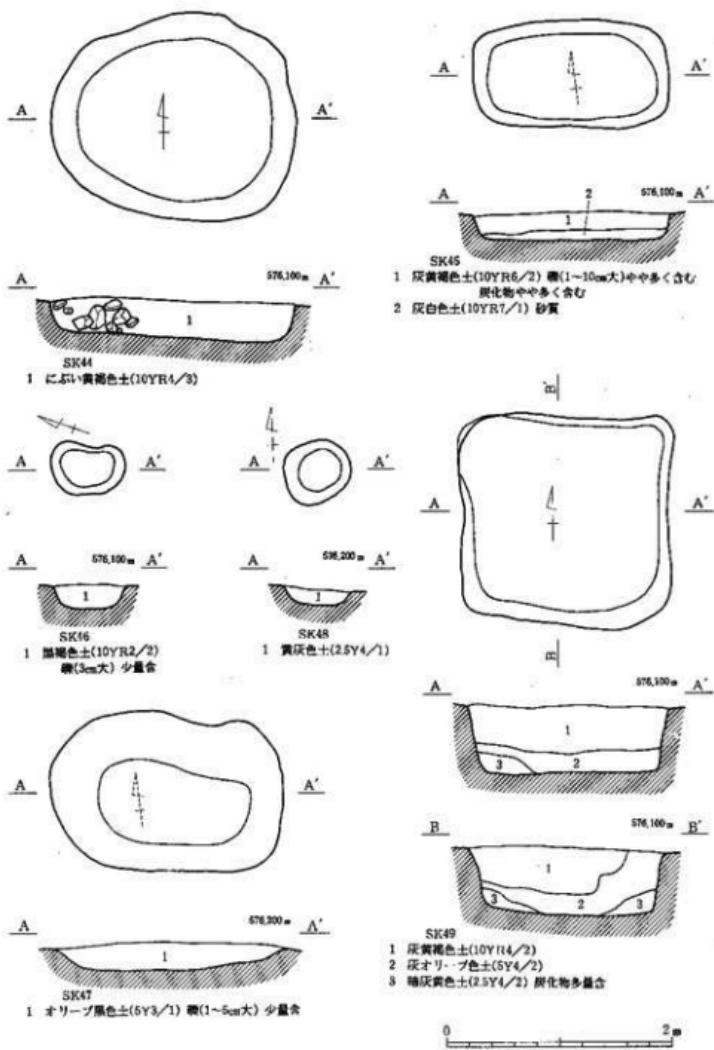


図19 SK44~49実測図

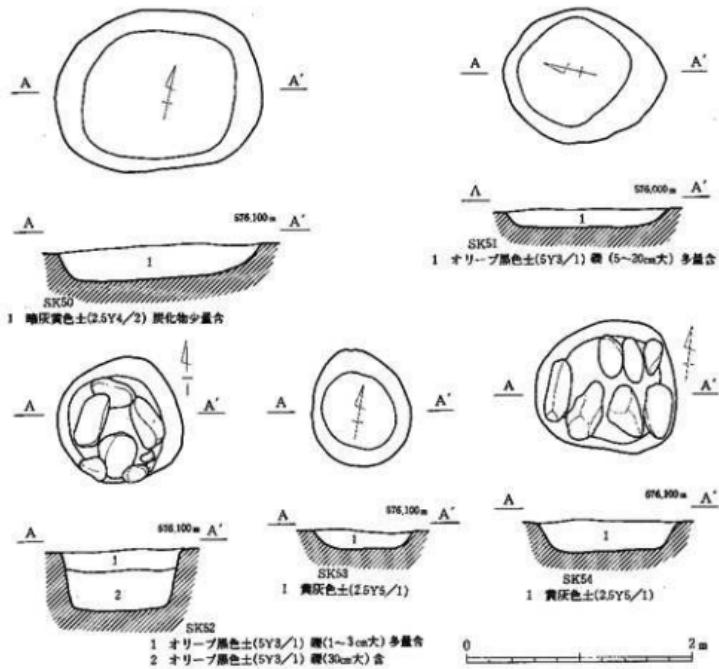


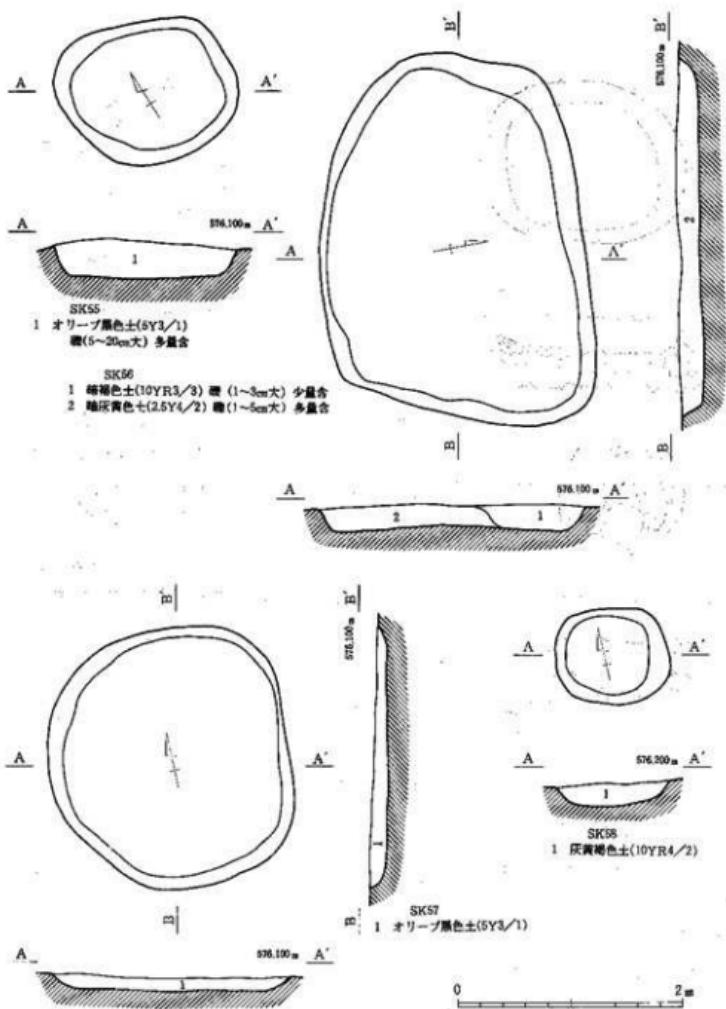
図20 SK50～54実測図

大の礫が5個まとまっていた。

遺物には古瀬戸平瓶（15世紀前葉）がある。

SK51 主郭西側中央 G-3に位置する。平面形は $1.40 \times 1.17\text{m}$ のやや不整の円形を呈す。壁は緩やかに掘り込まれており、深さ16cmを測る。底面は礫が露出するものの平坦であった。覆土はオリーブ黒色土の單層で、人形の礫を多量に含んでいる。

遺物の出土はない。



挿図21 SK55~57実測図

SK52 主郭西寄り中央 F - 4 に位置し、SK53に接する。平面形は 1.15×1.10 m の円形を呈し、内側を30~50cm大の礫が並んでいる。その内径は30cmで、中に材が横たわっていた。掘り方はほぼ直でその底は平坦である。覆土は二層に分かれる。しかし、礫の内外で土層の違いは認めがたく、しまりも特に変わらなかった。井戸に類する構造とも考えたが、規模も小さく積極的根拠に欠ける。

遺物の出土はない。

SK53 主郭西寄り中央 F - 4 に位置し、SK52の東に接する。平面形は 1.05×0.90 m の梢円形を呈し、深さは19cmを測る。壁は斜めに掘り込まれており、礫混じりの底面も緩やかな傾斜を持っている。覆土は黄灰色土の単層であった。

遺物の出土はなかった。

SK54 主郭西寄り中央 G - 4 に位置し、SK52・53に近接する。平面形は 1.25×1.15 m の円形で、深さは28cmを測る。底面は概ね平坦で、壁は斜めに掘り込まれていた。覆土は黄灰色土の単層で、30~50cm大の礫が並んでいる。SK52と構造が共通しており、同じ性格の遺構と考えられよう。

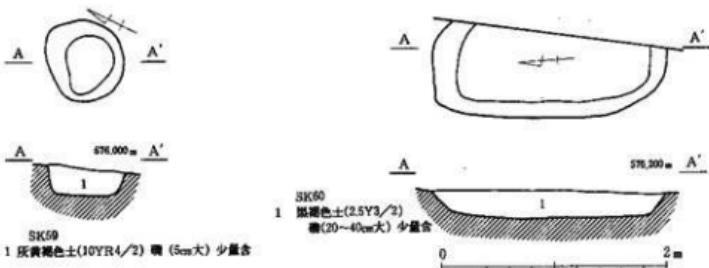
遺物の出土はない。

SK55 主郭西寄り中央 G - 4 に位置し、平面形は 1.65×1.30 m の不整梢円形を呈す。壁は斜めに掘り込まれており、底面は礫が露出するものの平坦であった。覆土はオリーブ黒色土の単層で人形の礫が多量に認められた。

遺物には灰釉を施した碗（座地・時期不明）がある。

SK56 主郭南西寄り G - 4 に位置する。平面形は 3.30×2.40 m の不整形を呈し、深さは20cmを測る。壁は斜めに掘り込まれ、底面は礫が露出するものの平坦であった。覆土は二層に分かれる。全体に礫が多く含むが、北側に少ない部分がある。

遺物は北西側より大窯期の灰釉丸皿（16世紀中頃）、土器皿、内耳上器、錢貨などが出土している。



挿図22 SK59・60実測図

SK57 主郭南西側 G-4に位置する。2.35×2.10mのやや不整の円形を呈す浅い遺構である。壁は緩やかに掘り込まれており、底面は平坦であった。しかし、其盤の礫が露出しており、特に北西側で顕著であった。覆土はオリーブ黒色土の単層である。

遺物には土器皿、大窯期の灰釉丸皿（16世紀中頃）、志野縦部丸皿（17世紀前半）、瀬戸美濃天目茶碗（17世紀前半）・灰釉碗（18世紀）、内耳土器がある。

SK58 主郭南西側 G-4に位置し、SK57に近接する。平面形は1.00×0.85mの梢円形を呈す。深さは20cmで、壁は斜めに掘り込まれる。底面には10~20cm大の礫が出ており、また、壁に向かって緩やかな傾斜を持つ。覆土は灰黄褐色土の単層であった。

遺物の出土はない。

SK59 主郭西側中央 F-4に位置する。平面形は0.75×0.70mのやや不整の円形を呈し、壁は直に掘り込まれている。深さは25cmで、底面は平坦であった。覆土は灰黄褐色土の単層で5cm大の礫を少量含んでいる。

遺物の出土はなかった。

SK60 主郭南側やや東寄り I-8に位置する。調査地端のため全容は明らかにできなかったが、長辺が208cmの梢円形の遺構であったと考えられる。壁は斜めに掘り込まれ、深さは25cmを測る。底面は概ね平坦であった。覆土は黒褐色土の単層で、南側を中心に入形の礫が少量含まれている。

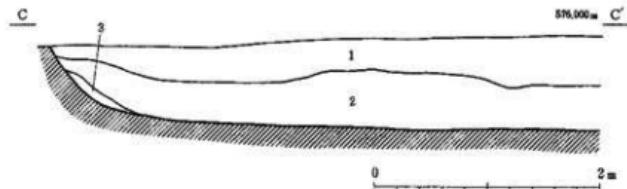
遺物には内耳上器小片と錢貨（皇宋通宝）がある。

SK61 主郭南側やや東寄り H-8に位置し、SK89を切って構築されている。平面形は 5.11×2.62 mの長方形を呈す。壁は斜めに掘り込まれ、底面は礫が露出するもの、概ね平坦であった。深さは25~30cmを測る。覆土は四層に分かれる。西側に10cm厚の灰層があり、その上に多量の小礫が載っている。また、1層中には小礫とともに炭化物が少量含まれていた。

遺物には須恵器壺・甕、土師器甕、龍泉窯系の青磁碗（13~14世紀）、古瀬戸天目茶碗・灰釉鉢（15世紀）、土器皿、内耳上器がある。青磁は北西側上位からの出土であった。

SK62 主郭南側やや東寄り H-8に位置し、SK89を切って構築されている。調査地図のため全容は明らかにできなかったが、幅約2m、深さ75cm強でさらに南側へと続く細長い造構である。壁は斜めに掘り込まれ、断面V字状を呈している。覆土は一層に分かれる。崩落したと考えられる3層を除いて、灰色系の砂質土・粘質土から成り、滲水していたことが窺える。周囲の造構、例えばSK61・90よりやや高い位置から掘り込まれているのが観察でき、時代が下ってからの溝と考えられる。

遺物には須恵器甕の小片、瀬戸美濃灰釉丸皿、多量の内耳土器と磁器の小片、釘がある。

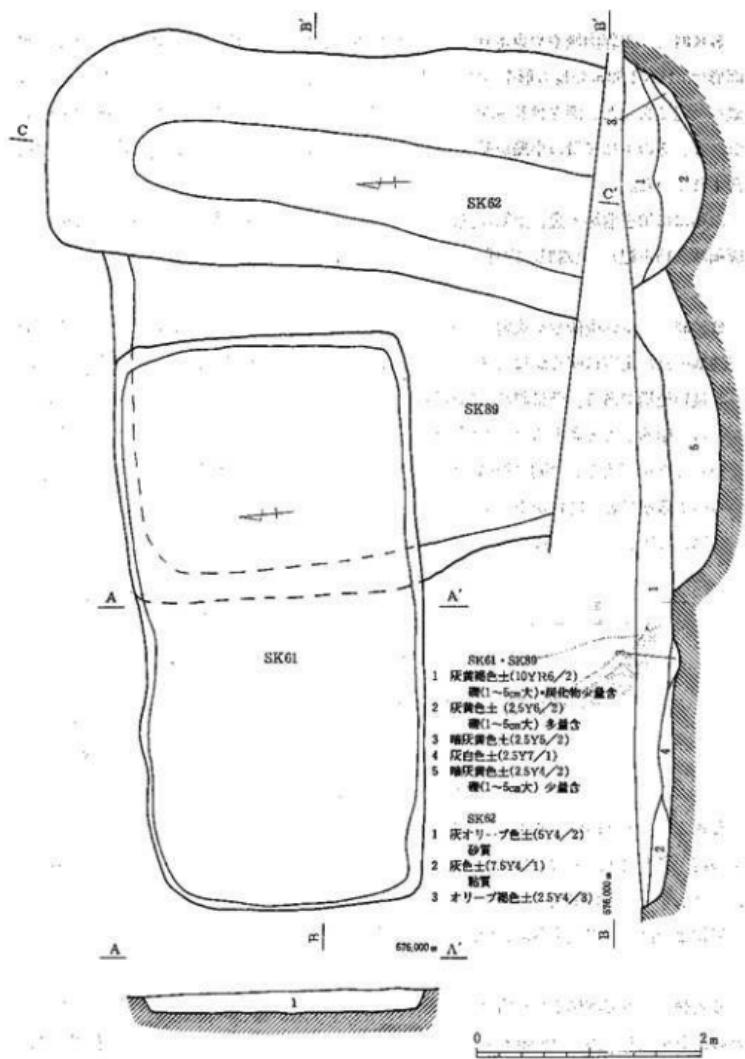


插図23 SK62断面図

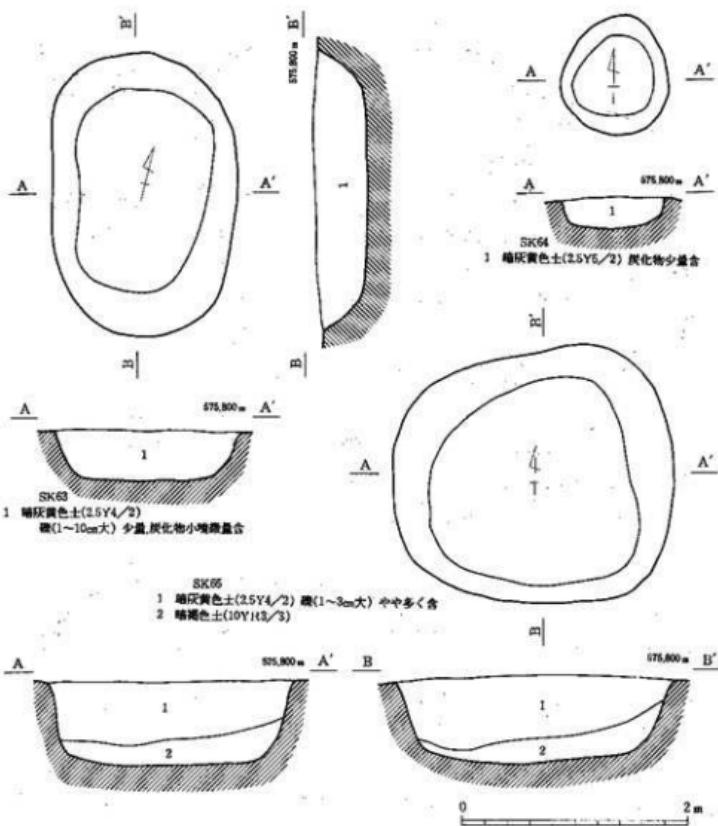
SK63 主郭南側やや東寄り H-8に位置し、P173に接する。平面形は 2.52×1.65 mの楕円形を呈す。壁は斜めに掘り込まれ、底面は概ね平坦であった。深さは45cmを測る。覆土は暗灰黄色土の単層で、少量の礫と炭化物小塊を含んでいた。

遺物は南側から黒色土器壺、内耳上器が出土している。

SK64 主郭南側やや東寄り H-8に位置し、SK65に接する。平面形は 1.08×0.95 mの円形を呈し、深さは29cmを測る。壁はほぼ直に掘り込まれ、底面は緩やかな傾斜を持っている。覆土は暗灰黄色土の単層で、炭化物を少量含んでいた。遺物の出土はない。

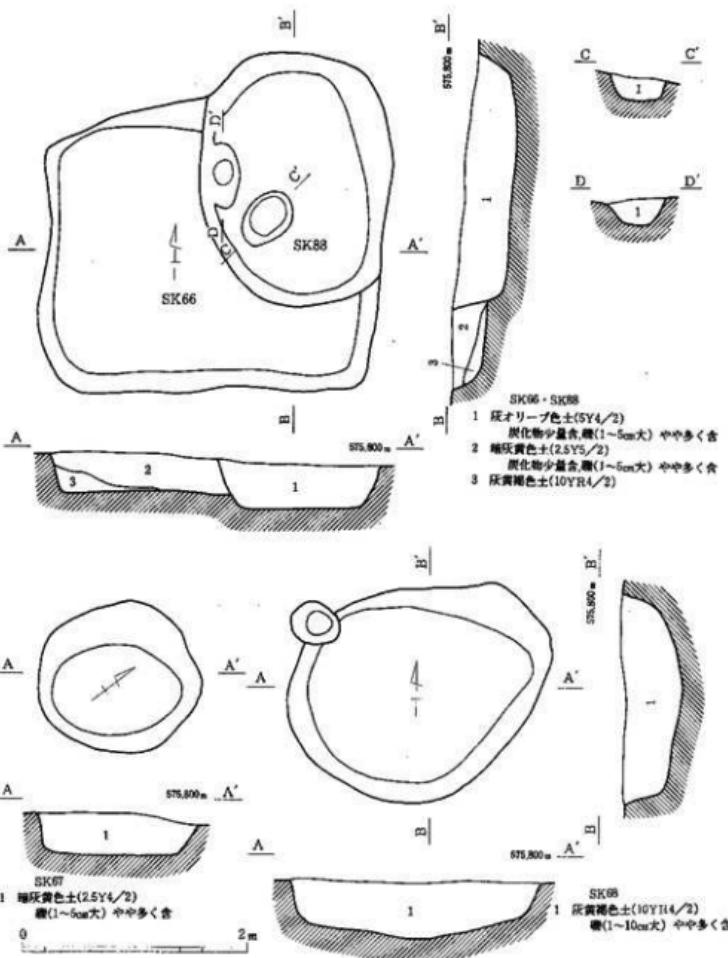


挿図24 SK61・62・89実測図



挿図25 SK63~65実測図

SK65 主郭南側やや東寄り H-8に位置し、SK63・64・66に近接する。平面形は $2.50 \times 2.20\text{m}$ でやや不整の隅丸方形を呈す。壁はほぼ直に深く掘り込まれ、深さは77cmを測った。底面は緩やかな傾斜を持っている。覆土は二層に分かれ。うち、1層に小礫を多く含んでいる。遺物には内耳上器小片がある。



擇図26 SK66~68 + 88実測図

SK66 主郭南東側 H-8 に位置し、SK88に北東側を切られる。また、西に SK65 が近接する。平面形は 3.06×2.55 m の長方形を呈し、深さは35cmを測る。壁は一部崩落しているものの、ほぼ直に掘り込まれており、底面は平坦であった。覆土は二層に分かれる。うち、上層に多量の礫とともに炭化物が含まれていた。

遺物には土器皿、陶器小片と石臼がある。石臼は南東側からの出土であった。

SK67 主郭南東側 G-8 に位置する。平面形は 1.37×1.35 m の円形を呈し、深さは35cmを測る。壁はほぼ直に掘り込まれているものの、西側は崩落が著しい。底面は平坦であった。覆土は暗灰黄色土の単層で小礫をやや多く含んでいる。

遺物は須恵器甌と陶器片、釘がある。

SK68 主郭南東側 G-8 に位置し、P178に切られる。また、SK65・66・67・69・88などに近接する。平面形は 2.40×1.90 m の不整円形を呈し、深さは最大で50cmを測る。壁は斜めに掘り込まれ、そのまま傾斜を持つ底面へと続いている。覆土は灰黄褐色土の単層で礫を多く含んでいた。

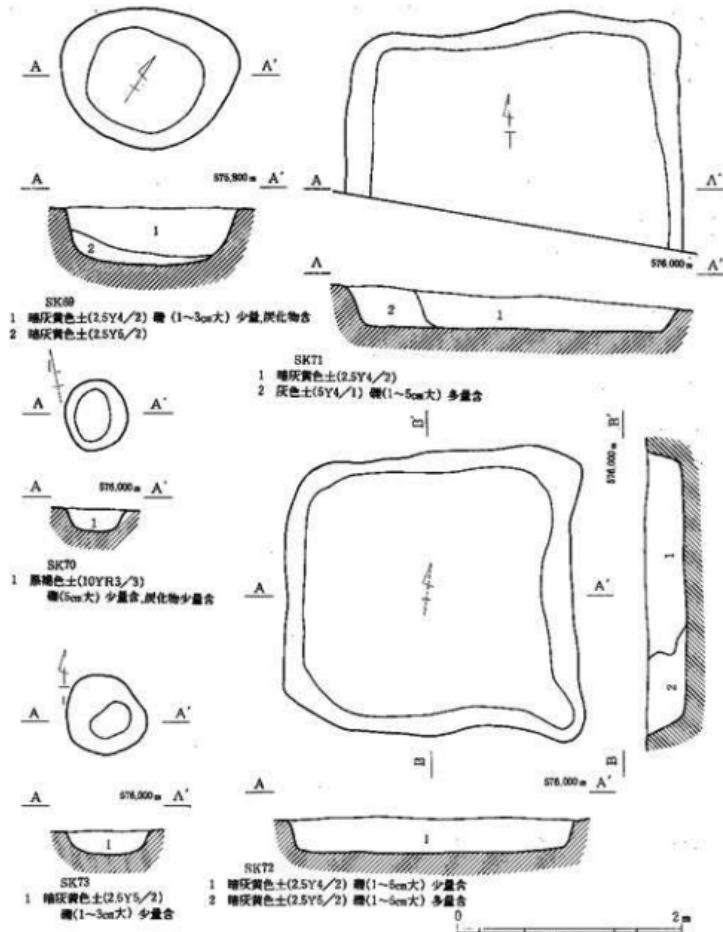
遺物には土器皿がある。

SK69 主郭南東側 G-8 に位置し、SK68に近接する。平面形は 1.56×1.28 m の梢円形を呈す。壁はほぼ直に掘り込まれており、深さは50cmある。底面は平坦であるが、壁へは緩やかな傾斜でつながっている。覆土は二層に分かれる。うち、1層中に小礫と炭化物が含まれていた。遺物には内耳土器、瀬戸美濃灰釉碗（18世紀後葉）と錢貨がある。

SK70 主郭南側やや東寄り I-8 に位置し、柱穴群に近接する。 0.62×0.53 m の円形を呈す小形の遺構である。深さは19cmを測り、壁は斜めに掘り込まれていた。底面は緩やかな傾斜を持って壁へと続いている。覆土は黒褐色土の単層で、礫と炭化物を少量含んでいた。

遺物の出土はなかった。

SK71 主郭南東側 I-9 に位置する。調査地端のため全容は不明だが、一辺 2.95 m ほどの方形の遺構であったと考えられる。壁は斜めにしっかりと掘り込まれており、深さは30cmあった。底面は平坦である。覆土は二層に分かれる。1層中には礫がほとんど含



插図27 SK69~73実測図

まれないのに対し、2層中ではそれが多量に認められた。

遺物には古瀬戸茶壺（15世紀）、灰釉小皿（15世紀）、内耳土器と錢貨がある。

SK72 主郭南東側 H-8 に位置する。平面形は $2.55 \times 2.52\text{m}$ の南東側のやや突出する方形を呈し、周囲のSK66・71などと規模のうえで似ている。壁はほぼ直に掘り込まれ、深さは30cmを測る。底面は基盤の礫が露出するものの平坦であった。覆土は二層に分かれ、全体的に礫を含むが、特に南側で顯著であった。

遺物には上師器甕の小片、古瀬戸灰釉鉢（15世紀）、内耳土器などがある。

SK73 主郭南東側 H-8 に位置し、SK66・71などに近接する。平面形は $0.85 \times 0.70\text{m}$ の楕円形で、深さは21cmある。壁から底面にかけては緩やかな傾斜を持っており、その断面は半円形を呈している。覆土は暗灰黄色土の単層で、小礫が少量含まれている。

遺物の出土はなかった。

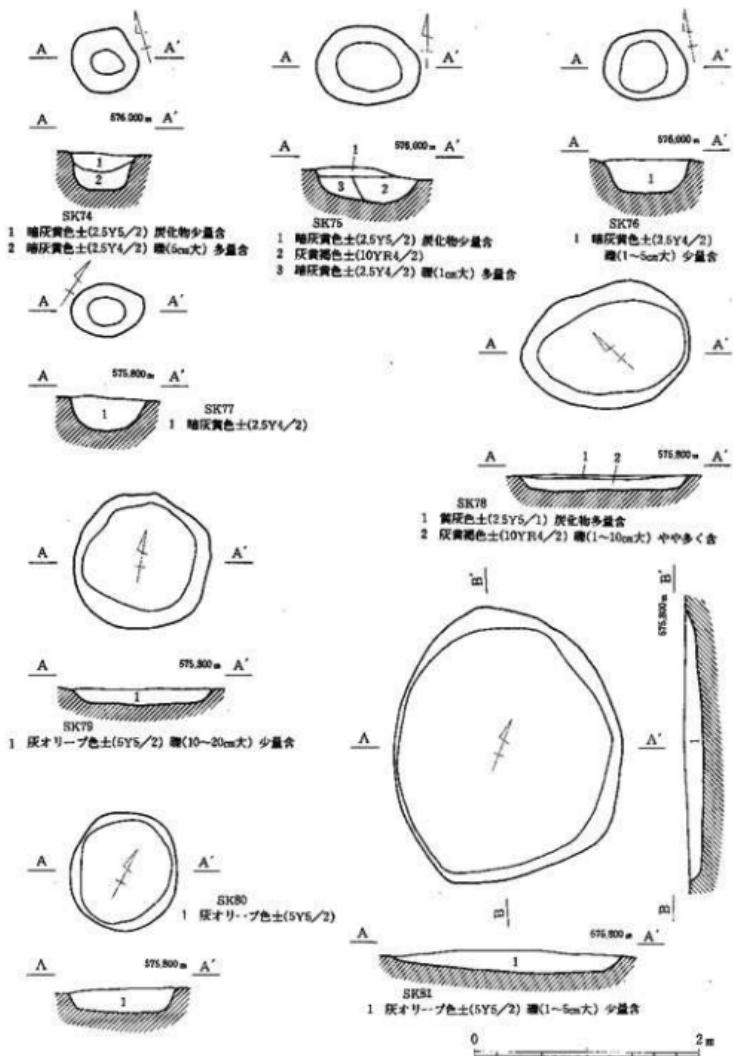
SK74 主郭南東側 H-9 に位置する。 $0.58 \times 0.55\text{m}$ の円形を呈す小形の遺構である。深さは30cmあり、壁は直に掘り込まれている。底面は概ね平坦であるが壁に向かって緩やかな傾斜をもっている。覆土は二層に分かれ、うち1層中に炭化物が少量認められた。また、2層中には礫が多量に含まれていた。遺物の出土はなかった。

SK75 主郭南東側 H-9 に位置する。SK72の東で、平面形は $0.95 \times 0.78\text{m}$ の楕円形を呈す。深さは30cmある。壁から底面にかけて緩やかな傾斜を持っており、その断面は半円形となる。覆土は一層に分かれ、うち3層には小礫が多量に含まれていた。断面からはその3層を2層の灰黄褐色土が切っているように見え、複数の遺構の切り合いも考えられる。なお、上に薄く載る1層中には炭化物が少量認められている。

遺物には瀬戸美濃灰釉丸皿（15世紀）がある。

SK76 主郭南東側 II-9 にSK75と並んで検出された。 $0.75 \times 0.60\text{m}$ の円形を呈す小形の遺構である。深さは30cmあり、壁は緩やかな傾斜を持って掘り込まれている。底面は概ね平坦であった。覆土は暗灰黄色土の単層で小礫を少量含んでいる。

遺物には土器皿と内耳土器の小片がある。



挿図28 SK74~81実測図

SK77 主郭南東側 H-9に位置する。平面形は $0.68 \times 0.46\text{m}$ の楕円形を呈し、深さは30cmを測る。壁から底面にかけて緩やかに傾斜しており、その断面は半円形をしている。覆土は暗灰黄色土の単層であった。

遺物の出土はない。

SK78 主郭東側南寄り I-9に位置し、柱穴群が近接する。平面形は $1.55 \times 1.05\text{m}$ の楕円形で、深さ10cmほどの浅い遺構である。壁は北側で特に崩落が認められるが、おおよそ斜めに掘り込まれたものであろう。底面は平坦であった。覆土は躙を多く含む灰黄褐色土で、その上に炭化物を多量に含んだ黄灰色土が薄く載っている。

遺物の出土はなかった。

SK79 主郭東側南寄り H-9に位置し、SK85に近接する。平面形は $1.22 \times 1.20\text{m}$ の円形を呈す。深さは13cmで、壁は斜めに掘り込まれている。底面は基盤の躙が露出するものの概ね平坦であった。覆土は灰オリーブ色の単層で、大型の躙を少量含んでいる。

遺物の出土はなかった。

SK80 主郭東側中央やや南寄り G-9に位置し、SK81に近接する。平面形は $1.05 \times 0.95\text{m}$ の円形を呈す。深さは22cmあり、壁はほぼ直に掘り込まれていた。底面は躙が露出し、壁際がやや丸みを持っているものの平坦であった。覆土は灰オリーブ色の単層で、SK79・81などと共に通する。

遺物には内耳土器の小片がある。

SK81 主郭東側中央やや南より G-9に位置し、SK80に近接する。平面形は $2.40 \times 2.08\text{m}$ の不整円形を呈す。深さは17cmと浅い遺構である。壁は斜めに掘り込まれており、底面は中央に向かって緩やかな傾斜を持っている。覆土は灰オリーブ色の単層で、小躙を少量含んでいた。

遺物には内耳土器の小片がある。

SK82 主郭東端南寄り H-10に位置し、SK83に接する。平面形は $1.25 \times 1.15\text{m}$ の円形を呈し、深さは20cmを測る。壁から底面にかけて基盤の躙が多く露出し、掘り方は安

定していない、覆土はしまりのない灰色土であった。

遺物の出土はない。

SK83 主郭東端南寄り H-10に位置し、SK82・84などに近接する。平面形は0.76×0.54mの楕円形を呈し、深さは18cmを測る。壁は斜めに掘り込まれていたものと考えられるが、多くで崩落している。底面にかけて緩やかな傾斜を持っている。覆土はしまりのない灰色土で、接するSK82に共通する。

遺物の出土はなかった。

SK84 主郭東端南寄り H-10に位置し、SK83・85などに近接する。平面形は径1.80mの円形を呈す。深さは13cmで、壁から底面にかけて緩やかな傾斜をもっている。覆土は灰黄褐色土の単層であった。

遺物の出土はない。

SK85 主郭東端南寄り H-10に位置し、SK84・P219と接する。平面形は2.28×1.85mの隅丸方形で、深さは最大で25cmを測る。壁は斜めに掘り込まれ、底面中央に向かって緩やかな傾斜を持っている。その中央がやや窪んで灰の堆積が認められた。また、覆土中には炭化物と焼土塊も少量認められている。

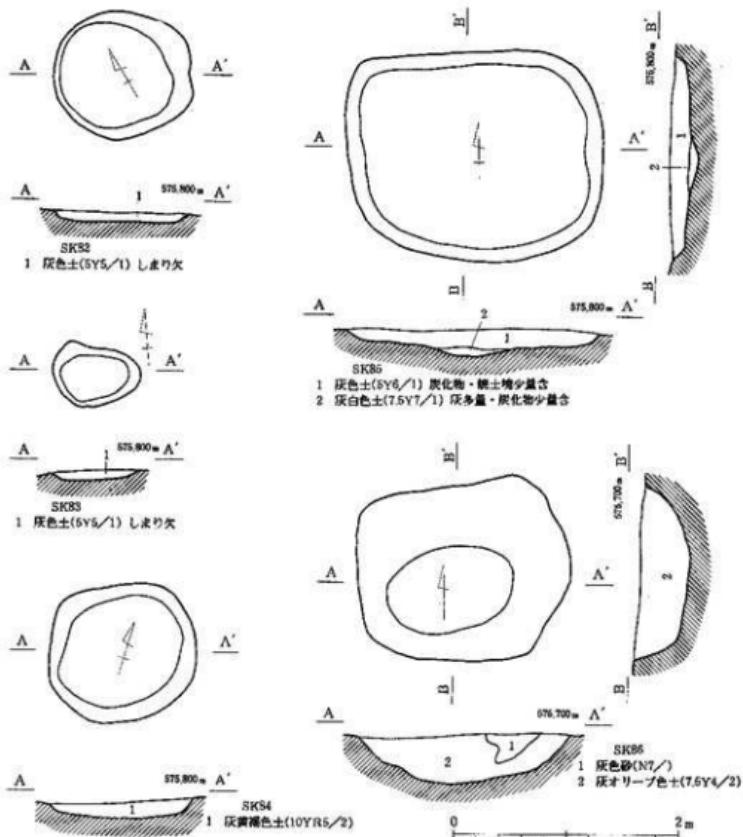
遺物の出土はなかった。

SK86 主郭東端やや南寄り II-10に位置する。平面形は1.86×1.55mの不整方形を呈す。壁から底面にかけて緩やかに傾斜しており、その断面は半円形をしている。深さは最大で45cmを測る。覆土は灰オリーブ色上で、一部灰色砂が混じる。

遺物の出土はなかった。

SK87 主郭東側堀の外 H-11に位置する。平面形は3.00×2.28mのやや不整の円形を呈す。壁はほぼ直に掘り込まれ、深さ68cmを測る。底面は概ね平坦であった。覆土は三層に分かれる。下層が暗灰黄色土、上層が灰黄色土で、その中央に大形の礫が多量に入り込んでいる。

遺物の出土はなかった。



挿図29 SK82~86実測図

SK88 主郭南東側 H-8 に位置し、SK66を切って構築されている。平面形は $2.35 \times 1.75\text{m}$ の梢円形を呈し、深さは38cmを測る。壁は一部崩落しているものの、ほぼ直に掘り込まれており、底面は概ね平坦であった。底面にはピットが二つ確認された。構造および位置的に本址に伴うものかは明らかでないが、一つは $56 \times 40\text{cm}$ で深さが30cm、その底からは内耳上器の大片が出土している。また、もう一つは實際にあり、 $56 \times 30\text{cm}$ で深さ36cmで

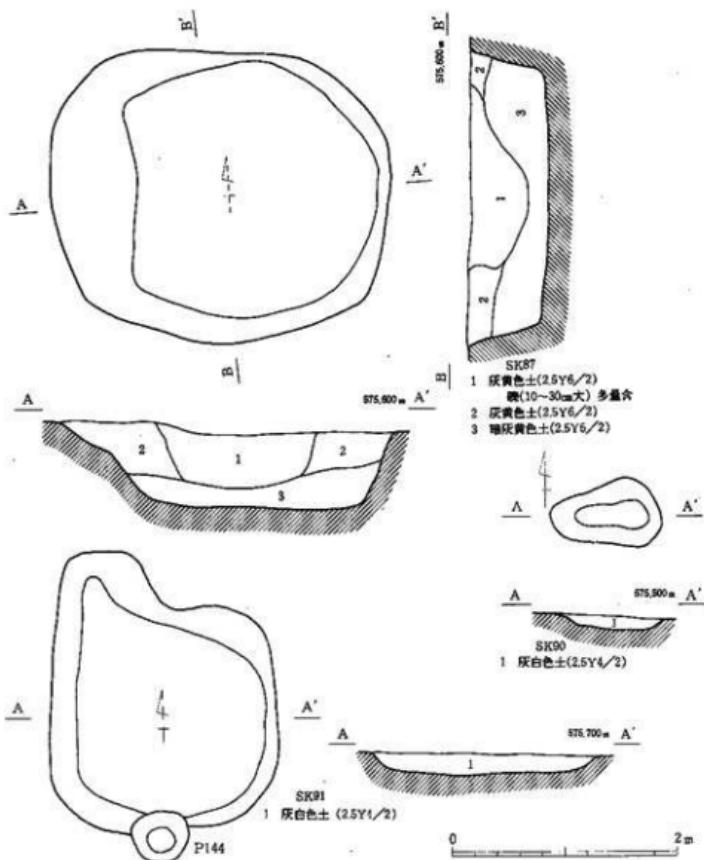


図30 SK87~91実測図

あった。覆土は灰オリーブ色土の単層で、多量の糞とともに少量の炭化物が認められる。

遺物には黒色土器壊、須恵器壊、内耳土器がある。特に内耳土器の小片が多量に出土している。黑色土器壊はピット内からの出土であった。

SK89 主郭南側やや東寄り H-8に位置する。東側をSK62に切られ、また、十分に明確にすることはできなかったが、北西側をSK61に切られている。残存部が少なく平面形は明らかでないが、一辺4m前後の方形の遺構だと考えられよう。壁は斜めに深く掘り込まれ、検出面からの深さで76cmを測る。底面は緩やかな傾斜を持っており、また、その中央に幅40cm、高さ30cmで東西に掘り残した部分が認められた。覆土は暗灰黄色土の単層で小礫を少量含んでいた。

遺物には土器皿、瀬戸美濃天目茶碗、多量の内耳上器片がある。

SK90 主郭中央南東寄り G-9に位置し、SK91に近接する。平面形は 0.97×0.56 mの不整規円形を呈し、深さは15cmを測る。壁は崩落したものとも考えられるが、斜めになっている。底面には凹凸が認められた。覆土は灰白色土の単層で、SK91に共通する。

遺物の出土はない。

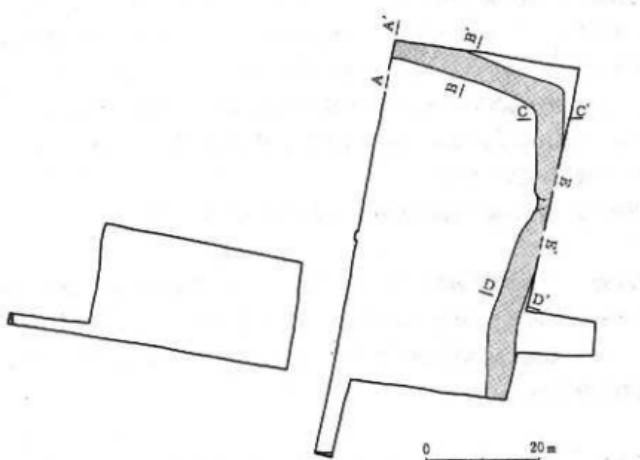
SK91 主郭中央南東寄り G-9に位置し、P144に南側を切られ、SK90に近接する。平面形は 2.04×2.00 mの北西側がやや突出する隅丸方形を呈す。深さは20cmあり、壁から底面にかけて緩やかな傾斜を持っていた。覆土は灰白色土の単層で、SK91・P144に共通している。

遺物には常滑壺小片、土器皿、内耳土器、伊万里小片（18世紀）がある。特に内耳土器片が多量に出上している。

ST1 主郭北東 E-10に位置する。基盤の礫が多く露出する調査区の中で、比較的その少ない場所で、SK9・10・16等に近接している。P65・66・68・72・73・74から成る1間×2間の建物で、面積は約20m²である。主軸方向はN-15°-Eを指し、ほぼ堀の方向と対応している。柱穴は概ね30~40cmの円形で、深さは10cmほどと浅い。

柱穴からの遺物の出土はなかった。

ST2 主郭中央やや南寄り G-6に位置する。P135・136・137・138・141・142から成るが、P135に対応する柱穴は搅乱のため確認できなかった。2間×2間の建物で、面積は約15m²、主軸方向はN-10°-Wを指している。柱穴は概ね30~40cmの円形で、深さは13cm前後のものが多い。柱穴からの遺物の出土はなかった。



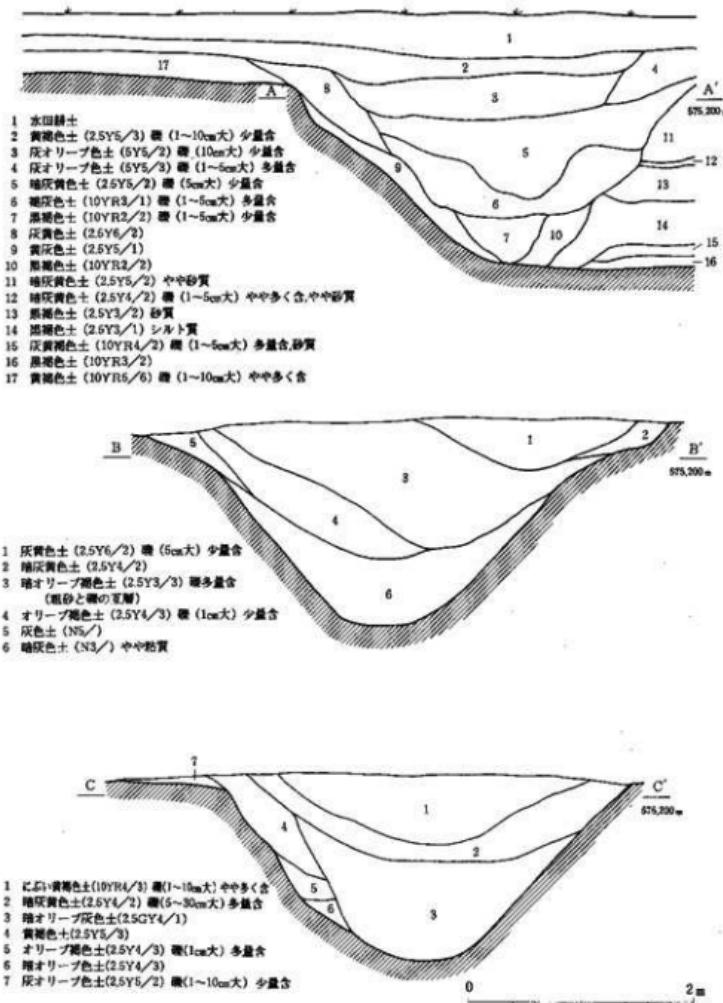
挿図31 堀全体図

3 堀

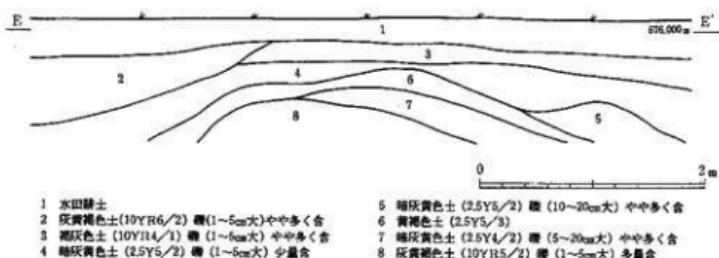
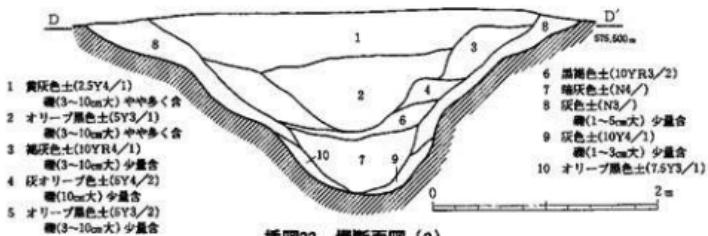
主郭の北・東で堀を検出した。また、南側と西側でそれぞれ1箇所、トレンチ調査によりその内側のラインを確認した。調査は堀の下部までは工事の影響が及ばないとの判断から上面にとどめ、北側で2箇所、東側で2箇所の断ち割りをして規模を明らかにした。また、天保2年(1831)の絵図(挿図6)に記された堀の切れる部分の精査を行った。

検出された堀は館跡北西に残る堀に対応しており、また、絵図に記されていたとおり東側では切れる部分も確認できた。幅は北側で4.2~4.6m、東側で4.5~4.8m、深さは北側で1.6~1.8m、東側で1.65mを測る。斜めに掘り込まれており、その角度は50°近くあった。埋土中には灰色土や砂・粘質土が見られ、滲水していたことがわかる。また、中位にもそれらが認められ、埋没の過程で水路として利用されていたことも窺える。特に東側では19世紀代の遺物が多量に堀の中位に見られ、その時期に屋敷地に大きな改変が行われ、多くの道具等が廃棄されたことを窺わせている。

堀の切れる部分では6層が上構になっていたと考えられ、堀を埋めて構築した様子が窺える。また、北側調査地端では堀の埋土の北側に地山とは考え難い層が水平に堆積してお



挿図32 堀断面図 (1)



り、(11~16層)、その部位では堀が造り変えられたことも考えられよう。

遺物には常滑窯、古瀬戸半碗・仏花瓶(15世紀)、大室期の灰釉丸皿(16世紀)、瀬戸美濃灰釉丸皿(16世紀)・灰釉丸碗(18世紀)をはじめ、多くの陶磁器がある。また、石臼の出土もある。中層から上層でまとまって出土したものがほとんどである。19世紀中葉以降のものが中層にあることから、その時期までは堀が完全に埋まらず残っていたことがわかる。

4 土壘

館跡北西側には基底幅3~4m、高さ2m強の土壘が良好に残っている。しかし、調査地内では一部でしか、明らかな痕跡を認める事ができなかった。北側中央では17層が土壘の跡と考えられよう。礫を多量に含んだ黄褐色土でそれを構築したことがわかる。また、堀の埋土を観察すると内側に上位より入り込んだ層が確認できる。これらも土壘に由来するものととらえられ、堀の内側に土壘が巡っていたことが想像できる。

しかし、東側では堀のすぐ近くに検出された遺構もあり、また、SK23のように堀と密接

にかかわっていたと推定されるものもある。堀からの出土遺物が東側からに集中していることからも、障壁となるほどの土塁は存在していなかったのかもしれない。

補説 堀の土層について

堀の土層は当時の水中堆積を示す有機物に富む黒色土層と、周囲からの崩落とみられる上層、それに人工的に埋め立てられたとみられる上層よりなっている。V字堀の底部に残る当時の黒色土層は平均して薄いことから、時々改修により沢上を掘り上げたか、又は使用期間が短かったかのいずれかである。周囲からの崩落とみられる土層は、V字堀の壁面にはほぼ平行な層理面を残している。堀の土層の主体部を成す極めてふるい分けの悪い砂礫土層は、上記二つの土層とは明瞭に区別でき、人工的でガラスの破片なども含み、耕地化に際して土塁などを削って埋めたものとみられる。東側に土塁の存在は断定できなかったが、堀の砂礫土と現在西側に残っている土塁の砂礫土とが酷似していることから、耕地化するまで土塁が存在していた可能性が大である。

確認された堀の形状は、堀の最終的なものを示しており、初期の形状は発掘地点北西隅で見る限り、北側に黒色有機的土層が延びることから、多少違っていたものと推定される。

(森 義直)

第3節 遺 物

1 土器・陶磁器

(1) 古代の土器

S B 1 と、検出面および中世以降の遺構に混入して出土している。小片が多く、量も少ない。土器の種類には須恵器・土師器・黒色土器・灰釉陶器がある。概ね、平安時代（9世紀代）に属するものである。

須恵器

坏　すべて無台のものである。体部は薄く、大きく外開している。また、灰白色で黒斑をもつ軟質のものもある。

甕 口縁部と体部の小片が出土している。体部の叩き目には平行のものと擬格子のものが認められた。

土師器

甕 長胴のものの小片が3点認められた。外面はハケで調整している。

黒色土器

坏 体部は膨らみをもちながら立ち上がり、底部内面には明瞭な境を作らない。底部外面には回転糸切り痕を残す。内面をヘラ磨き・黒色処理するもののみで、外面を黒色処理するものは認められなかった。

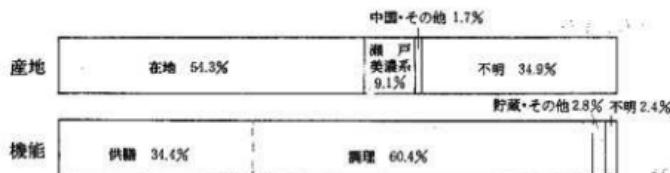
椀 坏に断面三角形の高台を付す。

灰釉陶器

皿 口縁部の小片が1点出土した。黒窓14号窯期のものと考えられる。

(2) 中世以降の土器・陶磁器

遺構内外から多量に出土している。土器には皿（かわらけ）、内耳土器（鍋・ほうろく）、火鉢がある。いずれも在地産と考えられるものである。陶器には常滑、占瀬戸、大窯、瀬戸美濃の本業焼、志野などの製品がある。多くは瀬戸美濃系であるが、時期の新しいものの中には在地産と考えられるものも認められた。磁器は中国産の青磁が1点、青花が2点確認できた。他に肥前系の染付（伊万里）が若干と、19世紀以降のものが多量に出土している。堀・遺構外から19世紀以降の磁器が多量に出土していること。内耳土器に小片が多いこと。時期を明らかにできなかったものが多いことなど、必ずしも遺跡の内容を表しているとは言い難いが、産地別・用途別の組成は表に示したとおりとなる。時期的には15世紀以降20世紀まで継続して遺物が認められる。



挿図35 出土陶磁器の組成

土器

皿　　いずれもロクロ成形され、底部は回転糸切りで切り離されている。法量は口径10cm、器高2.5cm前後である。体部の形態には、薄い体部がやや丸みをもって立ち上がるもの(4)、厚い体部が中位で稜を成すもの(13)などがある。

内耳土器　出土量は多いが、全体を復元できるものは少ない。鍋とほうろくがある。薄く平らな底部から体部は直立あるいは弱く外開しながら立ち上がる。口縁部の形態には、「く」状に強く外反させるもの(30)、内面に指による調整痕を1～3周残すもの(29・52・54など)。幅広の調整痕を残すもの(19・53)などがある。口径は25cm前後と30cm前後に復元できたものが多いが、20cmぐらいの小型のものも認められる。

火鉢　　1点のみ出土した。小片で器形を窺うことはできなかった。

陶器

碗　　古瀬戸の天目茶碗・鉄釉平碗、瀬戸美濃系(本業焼)の大日茶碗・灰釉碗・鉄釉碗・拳骨茶碗、志野碗などがある。時期的には15世紀～19世紀まで認められる。

皿　　大窯・瀬戸美濃系の灰釉丸皿、志野丸皿、鉄絵を施す志野織部丸皿などがある。

壺　　古瀬戸の瓶子・茶壺、瀬戸美濃系の徳利がある。

甕　　常滑があるが全形を知ることのできるものはない。

提鉢　　時期の瀬戸東海系のものが1点。他は瀬戸美濃系のものと在地産と考えられるものとがある。

擂鉢　　大窯期のものが1点。他は時期の下る在地産と考えられるものである。在地産のものは、いずれも鉄釉を施している。

その他　　古瀬戸のおろし皿・花瓶、瀬戸美濃系の花生、灯明皿、香炉、行半鍋とその蓋などがある。時期の下るものは在地産と考えられるものである。

磁器

碗・皿　　中国龍泉窯系の青磁片(碗)が1点、明代の染付(青花)が2点出土した。他は18世紀の伊万里が少量あるのみで、主体は堀の上面から出土した19世紀以降のものである。中に瀬戸美濃のものが若干認められた。

その他　　小片が多く、碗・皿の他は全体を知ることのできるものがない。

2 金属製品

遺構内外から鉄製品が14点出土している。形状がわかるものでは刀子が1点、釘が11点ある。刀子は遺構外から、釘はSK22・SK37・SK45・SK62・SK67・遺構外から、それぞれ4点・1点・1点・2点・1点・2点出土した。図示できたのはSK22出土の釘2点だけである。釘には長短があり、太さは4mm前後であった。

3 石器・石製品

石鎚が2点、砥石が3点、大小の凹石が3点、石臼が7点出土している。石鎚は62がチャート製、63が黒耀石製で、豊科町の平地部では吉野町館跡遺跡での4点に次ぐ山上例となつた。砥石は面状の砥痕の他に、線状の砥痕も認められる。凹石のうち68は石皿とも考えられる。石臼のうち、上臼に72・73、下臼に71・74がある。石質は安山岩のものが多い。

4 錢貨

遺構内から10点、遺構外から3点の計13点出土した。全て銭種が判読でき、その内容は初鋤造年が古い順に、唐の乾元重宝（758年）1点、宋の至道元宝（995年）1点、咸平元宝（998年）1点、景德元宝（1004年）2点、祥符元宝（1008年）1点、天禧通宝（1017年）1点、皇宋通宝（1039年）2点、熙寧元宝（1068年）1点、元祐通宝（1086年）1点、政和通宝（1111年）1点、明治20年代（判読不明）の一錢銅貨1点である。書体・背文・範型等による分類と模鋤銭の識別は今後の課題としたい。

5 その他

複数の遺構から漆膜が出土している。形状をとどめるものはないが、漆器の食膳具の存在が予想される。

註 (1) 中・近世陶磁器については、(財)長野県埋蔵文化財センター市川隆之氏にご教示いただいた。担当者の力量不足により、それらを十分に生かしきれなかったこと、分類および呼称などについてやや混乱が生じていることをお詫びしておきたい。

第4章 調査の成果と課題

第1節 鳥羽館跡遺跡の発掘成果

石器の出土　調査地内から石器が2点出土した。東山山中及び山麓からの出土例を除けば、吉野町（館跡）遺跡での4点に次ぐ出土例となった。土器や住居址など居住の痕は未だ発見されていないが、成相遺跡や豊科高校近くでも打製石斧が出土しており、この平地部にも広く縄文人が足跡を残していたことが窺える⁽¹⁾。しかし、その様相は全く不明である。古環境の復元も含めて、今後の検討課題となろう。

古代集落の検出　平安時代の竪穴住居址が1軒検出された。また、少数であったが調査地内に古代の土器が散布しており、周辺に集落が広がっていたことも窺えた。

ここに古代に溯源する遺跡のあることはもともと知られておらず、試掘調査でもその痕跡は得られなかった。そのような中で、1軒とはいっても住居址が発見された意義は大きい。出土土器より9世紀の後半、吉野町（館跡）遺跡の8軒、梶海渡遺跡の1軒とほぼ同時期に位置づけられた。しかし、他遺跡の例と同様に集落は継続されず、その後、13世紀ころにわずかな生活の痕跡を残すだけで中世末を迎えていた。洪水の痕が認められたように、未だ安定した生活域とはならなかったようである。

館跡の様相　鳥羽館跡の北西隅には今でも堀と土塁が良好に残っており、往時を偲ぶことができる。搅乱が著しく十分に明らかにできたとはいえないが、今回の調査によって、農村部における小領主層（土豪）の居館の姿がさらに具体的なものとなった。

一部トレンチ法によったが、四周で堀の位置を確認できた。その内寸は東西84m、南北72mであった。また、東側では天保二年（1831）の絵図（挿図6）に認められたとおりに土橋が確認できた。堀は幅約5m、深さ2mで吉野町館跡よりも規模が大きい。また、掘り方もV字状の薬研堀で急であった。土塁は北西隅に残る敷3～4m、高さ2m強と同規模のものが巡っていたと考えられるが、東側では堀に近い位置に遺構も検出されている。特にSK23は堀と密接な関係があったものと理解できる。遺構は多くの柱穴と土坑が検出されたものの、建物に組めた例は少なかった。



挿図36 堀の規模

柱穴の径は30~40cmと小さく、礎石立ちのものや縦柱のものも認められない。簡易な建物であったことが窺える。土坑には一辺300cm前後の人形のものも認められるが、多くは一辺100~200cm前後の楕円形のものであった。規模から見て、そのまま堅穴建物に復元できるものはなく、掘立柱建物に付隨するものか、貯蔵などの施設と考えられるものばかりである。中にはSK18・85など焼上・炭化物を含むものもある。一方、SK16・86などは砂質で水との関係が窺えた。SK52・54は井戸の可能性も考えられる。

遺物は15世紀代に位置づけられる古瀬戸の製品や、16世紀に位置づけられる大窯期の製品が多く出土している。伝世などを考慮しても、大窯期の製品がわずかに認められただけの吉野町館跡よりも古くに築かれたとみてよいであろう。遺物からはその後、20世紀初めまで継続して屋敷があったことが窺える。ここが水田や畠になったのは明治時代末以降、その時に不用の家財が東側の堀に捨てられたようである。

第2節 古代における安曇郡南部の様相—豊科町内の発掘調査から—

調査遺跡の概要　近年まで豊科町の平地部の遺跡については、わずかな遺物出土地が「点」として示されているだけで、その様相については全く不明であった。このことは安曇郡の南部地域全体を見ても同様で、例えば隣の筑摩郡（松本市内など）に比べればその様相はまだまだ明らかになっていない。しかし、過去3年間の吉野町（館跡）遺跡・梶海渡遺跡・鳥羽（館跡）遺跡の発掘調査によって、ようやく資料が蓄積されるようになってきた。以下にそれら遺跡の概要と、他遺跡の既出遺物をあらためて紹介し、現段階で知ることのできる古代の安曇郡南部の様相について概観する。

吉野町（館跡）遺跡　8軒の堅穴住居址が発掘された。礎混じりの褐色土中に深さ60~70cm掘り込んで構築されている。規模は一辺3m前後の小型のものと4.5~5mの中型のものがある。いずれにも柱穴は認められない。カマドは1例北東隅に構築したものがあつたが、他は東壁中央に設けられている。礎を芯にした粘土カマドである。遺物には須恵器壺蓋・壺・皿・壺・四耳壺・甕、十師器壺・盤・小形甕・甕・黒色土器壺・碗・鉢・灰釉陶器皿・椀・瓶などがある。また、綠釉陶器や鏡の出土もあった。食器具は軟質の須恵器壺と黒色土器を主体に構成されている。

梶海渡遺跡　堅穴住居址1軒が発掘され、また、自然流路内から多くの土器が出土している。住居は一辺4mほどのもので、東壁中央に礎を芯にした粘土カマドが設けられて

いる。出土遺物には須恵器壺・長頸壺・短頸壺・甕・土師器小形甕・甕・鍋、黒色土器壺・碗・鉢、灰釉陶器皿・碗・瓶などがある。食膳具は軟質の須恵器壺と黒色土器を主体に構成されている。また、這構外からであるが綠釉陶器の出土もあった。

その他の遺跡 町内で出土し

た遺物の多くは所在が不明で、そのうち古代の遺物を発見することのできた例はわずか2遺跡にすぎない。87・88は寺所の原村遺跡から出土した須恵器片である。⁽²⁾ 1987

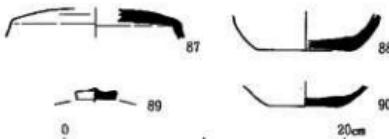


図37 町内遺跡出土遺物実測図

年、は場整備の工事中に発見されたもので、他に凹石、内耳土器の山土もある。87は壺あるいは盤の蓋になるとと思われる。88の壺は回転糸切りの厚く大きな底部（径6.8cm）から体部があまり外開せずに立ち上がっている。89・90は南安曇教育会で所蔵している須恵器で、熊倉北端という注記がされているだけで、出土地点は不明である。89は蓋のつまみ、90は壺である。回転糸切りの小さな底部（径5.2cm）から薄い体部が大きく外開している。焼成は良好である。

また、「南安曇郡誌」には荒井遺跡出土遺物として土師器壺と甕が紹介されている。その記述からは、食膳具に黒色土器・軟質の須恵器壺と考えられるものがある。

遺跡の分布 これらの遺跡は梓川の形成した段丘丸田面の端に、ほぼ南北、一直線上に分布している。しかし、これより東の低位面にあたる高家地区でも古代の遺物の出土が報告されているので、実際には自然流と湧水を活用できる微高地を選んで小規模な集落が散在的に広がっていたと見るべきであろう。

遺物の検討 出土遺物は筑摩郡出土のものと大差なく、土器群の変化は同じにとらえることが可能である。ほぼ完成しているその編年にあてはめると、原村遺跡出土のものが8世紀の終わりから9世紀の初頭に位置づけられる可能性があるものの、他は概ね9世紀の中頃から後半に位置づけられる。

黒色土器と軟質の須恵器壺が食膳具の中心となること。土師器に武藏型と呼ばれる胴部にヘラ削りを施した甕が少量ながら存在すること。発掘調査した3遺跡の出土遺物中にいずれも墨書き器が認められ、この時期に敷衍した様相が窺えることなどは筑摩郡内の様相と同様である。一方、北信地方に分布する鍋形の甕が認められることなどは、この地域の特徴と言えるかもしれない。また、吉野町（館跡）遺跡・梶海渡遺跡、三郷村の犬塚遺跡・

検道下遺跡などからは縁軸陶器の出土が報告されている。いずれも点数は少ないが、そのあり方が、今後注目されよう。

沖積地の開発 豊科町に発見された古代集落は、その出土遺物から概ね9世紀の中頃から後半に位置づけられた。安曇郡南部の遺跡のうち、出土土器が図示されその内容を知ることのできる堀金村岩田天神南遺跡・古城下遺跡、三郷村堂原遺跡などもほぼ同じ時期のものととらえられる。また、松本市島内地区の遺跡もほぼ同じ様相をしている。⁽⁵⁾ この時期を画期として広く沖積地の開発が進んだことがわかる。資料の多い筑摩郡内では、この時期、台地上や低位の自然堤防上など最も広い範囲に集落が展開したことが指摘されている⁽⁷⁾が、同じことがこの安曇郡内でも認めることができた。一方、安曇郡の中でも、たとえば八原郷に比定される穂高町矢原地区の遺跡と比較すれば、そのあり方が対照的であることに気づく。すなわち矢原地区の遺跡は幾度かの洪水に見舞われながらも、弥生時代あるいは古墳時代から長く継続してあったのに対し、南部地域の遺跡は9世紀の中頃から後半に現れ、しかも多くは短期で消えているのである。

今後の課題 古代における安曇郡南部の様相を概観したが、資料が少なく具体的な姿を復元するには至らなかった。集落構造と景観、沖積地の開発と住吉庄への展開の過程、そして考古学的には積極的根拠を欠いている安曇郡高家郷の比定についてなど、今後の資料の蓄積に期待したい。

第3節 中世～近世初頭における様相—出土遺物からの概観—

町内における中・近世遺跡の調査 1986年に岐阜県埋蔵文化財センターが調査した中曾根の上手木戸遺跡、1990年以降3カ年に豊科町教育委員会が調査した吉野町鉢跡遺跡、桝海渡遺跡、鳥羽館跡遺跡と、豊科町内ではここ数年の間に中世から近世にかけての遺跡の発掘調査が4件行われた。これらは、それぞれ居館・村落・寺院関連の遺跡と性格づけることができるかと思う。以下にそれら遺跡の出土遺物から窺える様相を概観する。

上手木戸遺跡 中曾根地盤を中心とした広い範囲の激高地上に所在する。中央道長野線の建設に伴り、その東縁が発掘調査された。その結果、中世には竪穴住居址を中心に入小の上坑群が分布すること。近世では掘立柱建物址を中心に、溝址を狭んで北に吊壙が分布することなどが明らかになった。



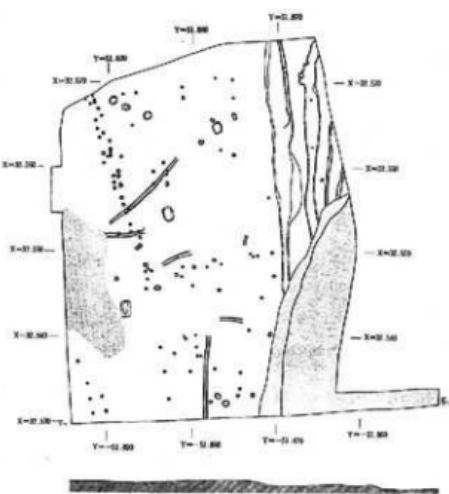
挿図38 吉野町館跡遺跡全体図（※除 古代堅穴住居址）

吉野町館跡遺跡（挿図38）　　ほ場整備事業に先立ち、主郭部分のほぼ全体が発掘調査された。幅3.5～4.5mの堀に囲まれた内寸はほぼ70m四方であった。遺構は大小の土坑・柱穴が約580検出されている。遺物は16世紀代から19世紀代まで認められたが、主体は17・18世紀だった。16世紀末の築造で、屋敷地として近世以降使用されていたことが窺える。

梶海渡遺跡（挿図39）　　ほ場整備事業に先立ち調査された。調査地は永正3年（1506）から慶長16年（1611）まで法藏寺（現 畠科町新田）が所在したとされる一画（同寺縁起による）である。遺構には大小の土坑・柱穴と溝があり、中には墓址と考えられるものも複数認められた。遺物は16～17世紀前半の様相をしており、法藏寺の所在したという年代と合致する。寺の遺構と認められるものはないが、それと関係のある遺跡と考えてよいであろう。なお、法藏寺の開基は武田氏と抗戦した平瀬氏に仕え、吉野中村に居を構えた丸

山氏といわれる。

遺跡の時期 摂図40は、それぞれの出土遺物から遺跡の消長を模式的に示してみたものである。4例だけだからであるが、16・17世紀という激動の時期に、遺跡の消長にも画期を認めることができる。すなわち、この期を境に景観を変え荒野あるいは生産域になつた土地と、この期に現れ、そのまま現集落と通じている土地とである。前者に上手木戸遺跡や梶海渡遺跡、後者に吉野町館跡・鳥羽館跡などの館跡、さらには寺院とそれを中心に形成された町並みをあげることができよう。



摂図39 梶海渡遺跡（I地区）全体図

遺跡	14 C	15 C	16 C	17 C	18 C	19 C	20 C
吉野町館跡遺跡				■	■	■	
鳥羽館跡遺跡			■	■	■	■	
上手木戸遺跡			■	■			
梶海渡遺跡			■	■			

摂図40 遺跡の時期

出土遺物の構成 これらの遺跡の特質を主に出土遺物から検討する。時期的な要因もあるだろうが、それぞれの出土遺物の構成には違いが認められた。表2を一見して上手木戸遺跡の内容の貧弱さ、対して梶海渡遺跡の豊富さ、さらに吉野町館跡遺跡と鳥羽館跡遺跡の様相が似ていることなどがわかる。

遺物 遺跡	陶	磁	器	錢	貨	石	製	品	金	屬	製	品	木
	青	白	青	渡	國	硯	砥	凹	石	水	煙	釘	鑿
	磁	花	來	廣		石	石	臼	滴	管	子	刀	漆
吉野町館跡遺跡	◎	○	○	◎		○	○	○	○	○	◎	○	
鳥羽館跡遺跡	○		○	◎		○	○	○	○	○	◎	○	
上手木戸遺跡	○		○			○	○						
梶海渡遺跡	○	○	○	◎	○	○			○	○	○	○	○

表2 出土遺物の構成

錢貨・硯や水滴など、梶海渡遺跡出土のそれらは墓址に副葬されたものであろう。一方、凹石や臼の出土は認められなかった。墓域には持ち込みなかったのだろう。

出土土器・陶磁器の構成 供給形態は在地の上器皿と漸戸美濃系を中心に若干の中国産で構成されている。調理具は捏鉢・擂鉢などを漸戸美濃系から、煮炊きする鍋など土器は在地のもので構成されている。貯蔵具は全体としては量は少ないが常滑と漸戸美濃系で構成されている。また、梶海渡遺跡で多くの漆膜が出土したように、漆器の椀や曲物などがこれに加えられよう。しかし、北陸系の陶器は認められなかった。

それぞれの遺跡の内容を比較したものが挿図41～43である。内耳土器が小片となって出土するため、産地別では在地が、機能別では調理の割合が高くなっている。その中で以下のことを認めることができた。

- ① 上手木戸遺跡で在地産のものが卓越していること。総数297点のうち、搬入されてきたものは中国産の青磁1点と、大窓期の丸皿・志野丸皿など4点だけである。
- ② 二つの居館、吉野町館跡遺跡と鳥羽館跡遺跡とで、産地別・機能別とともに大きな違いがあること。
- ③ 梶海渡遺跡では、在地産の割合、供給形態の割合が高いこと。
- ④ 花瓶や香炉などは吉野町館跡遺跡・鳥羽館跡遺跡・梶海渡遺跡では出土したもののが上手木戸遺跡では出土していないこと。

館跡における出土遺物の構成の違いは、吉野町館跡遺跡で土器皿と内耳土器の出土が少なかったことが原因である。このことが何を意味するかについては、さらに検討しなければならない。梶海渡遺跡は土器皿の出土が多いことから、他遺跡と組成で違いが認められた。その上器皿は墓址に副葬ないし宗教的な行為に用いられたもの。あるいは多くに煤・

吉野町館跡遺跡	在地 60.3%	瀬戸美濃系 24.5%	中国 7.4%	その他 不明 7.8%
その他・不明 1.3%				
鳥羽館跡遺跡	在地 89.5%		瀬戸 3.7%	美濃系 6.8%
その他 1.3%				
上手木戸遺跡	在地 98.7%		その他・不明 1.3%	
梶海渡遺跡	在地 87.5%		瀬戸 11.2%	美濃系

図41 出土陶磁器の組成（産地）

吉野町館跡遺跡	供膳 36.6%	調理 59.1%	貯蔵・その他 4.3%
貯蔵・その他 3.3%			
鳥羽館跡遺跡	供膳 10.3%	調理 86.4%	
貯蔵・その他 1.2%			
上手木戸遺跡	供膳 13.1%	調理 86.9%	
梶海渡遺跡	供膳 30.7%	調理 68.1%	

図42 出土陶磁器の組成（機能）

吉野町館跡遺跡	在地 5.3%	瀬戸美濃系 71.3%	中国 19.1%	その他 不明 4.3%
中国 その他・不明 1.4%				
鳥羽館跡遺跡	在地 38.3%	瀬戸美濃系 54.8%	その他 2.6%	5.5%
その他 2.6%				
上手木戸遺跡	在地 89.7%		瀬戸 7.3%	美濃系
梶海渡遺跡	在地 64.3%	瀬戸美濃系 31.6%	その他 不明 2.6%	

図43 出土陶磁器の組成（供膳形態の産地）

焦げが観察できることから、灯明具として利用されたものと考えられる。しかし、櫛海渡遺跡における瀬戸美濃系の陶器や外国産の磁器のあり方は館跡のあり方と大差ない。このことは、そこに埋葬された人々の生活、あるいはそこに所在したという寺院の姿を求める上で示唆的である。また、搬入品や嗜好品の範疇に入るものを少量しか持たない上手木戸遺跡と他遺跡との様相は対照的であった。性格による違いと理解してよいであろう。

今後の課題 本項では遺物から窺える様相を概観した。遺構からの検討、そして景観の復元などは今後の課題である。また、近隣で発掘されている人町市清水氏居館・須沼氏居館、松本市神戸遺跡・秋葉原遺跡・松木城とその城下の遺跡などとの比較も必要である。そういった作業によって、また文献などによる研究との協力によって、16・17世紀という激動の時代が見えてくるであろう。

- 註 (1) 西山山麓の遺跡から流されてきたことも考えられる。しかし、特に摩耗してはいない。
(2) 穂高町 望月正昭氏蔵。
(3) 小平和夫「古代の土器」(『中央自動車道長野線埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書4-松本市内その1-』, 1990年)
(4) 小平和夫「古代の土器」(前掲)
牟原正「長野県内の古代集落遺跡と墨書き土器」(『信濃』43-4, 1991年)
(5) 古野町(鉢跡)遺跡SB11、櫛海渡遺跡SB1から出土している。
(6) 長野県埋蔵文化財センター『中央自動車道長野線埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書10-松本市内その7-』, 1989年
(7) 小平和夫「古代の集落」(『中央自動車道長野線埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書7-松本市内その1-』, 1990年)
(8) 桐原健「安曇郡四郷の考古学的同定」(『信濃』41-10, 1989年)
(9) 長野県埋蔵文化財センター『中央自動車道長野線埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書10-豊科町内-』(1989年)
(10) 烏羽館に居館した丸山氏と同族とされる。
(11) 桐原健氏が石臼の所有について、上木戸遺跡と古野町鉢跡遺跡を例に考察している。
桐原健「信濃中世における石臼の所有者」(『信濃』45-4, 1993年)
(12) 破片の点数で検討している。なお、遺跡の時期が異なるため、古野町鉢跡遺跡と烏羽館跡遺跡からは18世紀以降と認められる遺物は除いた。また、13世紀の東海系の壺鉢も除いたが、12~14世紀代の青白磁は伝世を考慮して含めている。
(13) 特に神戸遺跡は昌羽館に居館した丸山氏が転居した場所の一画でもある。

- 参考文献 『南安曇郡誌』第二巻上(1968年)
『三郷村誌I』(1980年)
『穂高町誌 歴史編上・民俗編』(1991年)
『堀今村誌(上巻)』(1991年)
豊科町教育委員会『古野町鉢跡遺跡』(1992年)
豊科町教育委員会『櫛海渡遺跡』(1993年)

年代	時代	日本のできごと	長野県のできごと	豊科町のできごと
1900	明治時代 昭和 大正 近代 明治	日本憲法 第一次世界大戦 大日本帝国憲法・帝国議会 明治政府の成立 開国		現在の豊科町の区域ができる 豊科町制施行
1800	近江		成瀬山の大噴火	道祖神が多く作られる 桔梗が造られる
1700	江戸 世安土桃山	諸侯 江戸幕府の成立 源氏秀吉の安土桃山統一		町域の多くが松木源頭
1600	中(頃開)	豊臣大老の登場	松本城が造られる	武田信玄が安堵し求め入る 合野町院・鳥羽船など多くの駁船が造られる (上手木戸通路・櫛海波通路)
1500	市町	忍びの乱	川中島の戦い	
1400		* 全羅		
1300	鎌倉	鎌倉の新政	* 秋篠政治	
1200	世古	鎌倉幕府の成立 源平の戦い	木曾義仲の活動	平地の開拓が進む(作渠が現れる)
1100	平安		* 平等院 * 桐原政治 * 関原通長 * 鶴式郎	
1000				この場の「和名抄」という記録によると高家に集落があった 半邊(中種地区)の開拓が進み小さな村が現われはじめる(古野・鳥羽等) 山上で盛んに猿巣巻が施される
900				
800	奈良	平安京へ移る	* 律令政治 * 延喜寺 * 正倉院	
700		平城京へ移る	上田に圓分寺・保福尼寺建立	
600		大化の改新 孝德天皇の改政		
500	古墳		松本市中山、藤原町有明の古墳群	
400				
300	代原	各地に古墳が作られる 大和朝廷の國上統一	松本市弘法山古墳	
200			* 那須台四 率所	田代・町田遺跡・成程集落が現われる
100	房生		* 寺昌道跡	
0			水堀畠井が伝わる	
300		水堀畠井が始まる		
400	開文			(穀物を求めて平地にも足をのばす) 裏山を荷台に開文人が活動する
1万年前	始	先土器 土器の発明	野尻湖人の活動	

表3 関係年表

第5章 結語

本書の刊行で県営は場整備事業豊科南部地区に係る4年間にわたる調査が終了する。発掘した遺跡は3遺跡。豊科町の平地部において、初めて古代の堅穴住居址を発見したこと。断片的ながら中世から近世にかけての様相が明らかになったことなど多くの成果を上げることができた。

一方で、多くの課題も残った。前章で3年間の調査成果を概観したが、郷土の歴史を復元するには至らなかった。遺跡の持っていた多くの情報をどれだけ取り出せただろうか。明らかになったこと以上に、わからないまま失ってしまったことがどれだけ多いことか。反省材料が多い。今後、残された記録と資料をもとに担当者としての責を果たしていくべき。また、もともと古代の遺跡のあることが知られていないところでそれが発見されたことは、分布や遺跡の範囲について再検討する必要を生じさせた。町内にはまだまだ知られていない遺跡の多いことが予想でき、それらに注意を向けるとともにその保護対策が課題となる。

ところで豊科町では、これまで1986年の上手木戸遺跡、1977・87年の上ノ山窯跡群・菖蒲平窯跡群でしか発掘調査が行われていなかった。多くの住民にとって、郷土の歴史を実感する機会も得られなかっただろうし、埋蔵文化財への関心も無に等しかった。例えば、1968年発刊の『南安曇郡誌』には、豊科町内で出土遺物の発見がほとんど報ぜられない理由の一つは「甚だこの方面への関心が薄」いからだと記されている。上器片の一つ一つ、その蓄積が郷土の歴史を明らかにするのであり、そして、何よりも私たちの生活はそれらの基盤の上に成り立っているのである。今回の調査が、埋蔵文化財に対する関心への契機になることを期待したい。

資料の活用、今後の保護対策…、いろいろな意味で、この3年間の調査の上に立っての新しいスタートが始まる。

最後になりましたが、多くの皆様から貴重なご教示をいただきながら担当者の力量不足でそれらを十分に生かせなかったことを深くおわび申し上げ、また、調査にご理解とご協力をいただいた多くの皆様に感謝申し上げ、結語といたします。

報告書抄録

ふりがな	とばやかたあといせき
書名	鳥羽館跡遺跡
副書名	県営ほ場整備事業豊科南部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
卷次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	山田真一
編集機関	豊科町教育委員会
所在地	〒399-82 長野県南安曇郡豊科町大字豊科 4289 - TEL 0263-72-2158
発行年月日	西暦 1994年 3月 25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 ° ° °	東經 ° ° °	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
とばやかたあといせき 鳥羽館跡遺跡	ながのけんみなみあづみぐん 長野県南安曇郡 とよしまちおほほざとよした 豊科町大字豊科 あさ かみとば 字 上鳥羽	20461	36° 10' 36"	137° 45' 40"	19820717 ~ 19820925	2875 m ²	農業関連 (県営ほ 場整備事 業)に伴 う事前調 査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
鳥羽館跡遺跡	集落跡 居館跡	平安 中・近世	堅穴住居 掘立柱建物 土坑 堀	須恵器、土師器 土器皿、内耳土器 瀬戸美濃系陶器 輸入磁器 錢貨	館跡の主郭部分の ほぼ半分を調査

付 表

- 1 柱穴一覧表
- 2 出土土器・陶磁器観察表
- 3 金属製品一覧表
- 4 石器・石製品一覧表
- 5 錢貨一覧表

柱穴-観表

番号	位置	縦 横 縦幅 横幅	縦幅 高さ (cm)	層		土 平面形	層	出土遺物	備考
				深さ	横幅				
P-1	C-9	55	41	9	椭円形	にぶい黄褐色土(10YR5/3)			
2	D-9	41	36	7	円形	にぶい黄褐色土(10YR6/3)			
3	C-9	120	36	9	長円形	1:5にぶい黄褐色土(10YR5/4)			
4	D-9	41	40	10	円形	灰褐色土(10YR5/2)			
5	C-9	45	35	10	椭円形	にぶい黄褐色土(10YR5/3)			
6	C-9	30	30	20	円形	1:5にぶい黄褐色土(10YR5/3)			
7	C-9	35	30	18	円形	にぶい黄褐色土(10YR5/3)			
8	D-9	35	30	13	円形	褐色土(10YR4/4) 稀少量含			
9	D-9	27	25	13	円形	褐色土(10YR4/4) 稀少量含			
10	D-9	37	31	11	円形	褐色土(10YR4/4) しまり欠			
11	D-9	33	32	10	円形	1:5灰褐色土(10YR5/2), 2:にぶい黄褐色土(10YR5/3)			
12	D-9	30	29	8	円形	灰褐色土(10YR6/2)			
13	C-9	30	29	12	円形	にぶい黄褐色土(10YR4/3)			
14	D-10	30	25	20	円形	にぶい黄褐色土(10YR5/2), 岩化物含			
15	C-10	24	23	9	円形	1:5灰褐色土(10YR5/2), 2:にぶい黄褐色土(10YR5/3)			
16	D-10	22	22	6	円形	にぶい黄褐色土(10YR5/3)			
17	D-10	25	22	13	円形	褐色土(10YR4/4)			
18	D-10	35	28	15	椭円形	にぶい黄褐色土(10YR5/3)			>SB1
19	C-10	17	15	25	円形	褐色土(10YR4/4)			
20	D-10	28	25	12	円形	褐褐色土(2.5Y4/2)			
21	D-10	35	30	20	円形	褐褐色土(2.5Y4/2)			
22	D-10	25	22	6	円形	褐褐色土(2.5Y4/2)			
23	D-11	37	25	不整	不整	褐褐色土(2.5Y4/2)			
24	D-11	31	26	26	円形	褐褐色土(10YR5/3)			
25	E-11	37	31	20	椭円形	褐褐色土(2.5Y4/2)			
26	E-11	40	37	8	円形	灰褐色土(5Y6/1)			
27	E-11	26	24	4	円形	灰褐色土(5Y6/1)			
28	E-11	30	25	12	円形	暗灰黄色土(2.5Y5/2)			
29	E-11	32	32	14	円形	暗灰黄色土(2.5Y5/2)			
30	E-11	29	25	18	円形	暗灰黄色土(2.5Y5/2)			

番号	位置	規格	底径 mm	深さ mm	土層		出土遺物	備考
					平面形	形状		
P 31	E-11	25	22	7	円	灰色土(5Y6/1)		
32	E-10	33	30	11	円	暗灰褐色土(3.5Y5/2)		
33	E-10	34	30	7	円	暗灰褐色土(3.5Y5/2)		
34	D-9	35	33	10	円	灰褐色土(10YR4/2)		
35	D-9	32	32	10	円	褐色土(10YR4/4)		
36	D-9	38	35	7	円	灰褐色土(10YR4/2)		
37	D-9	48	45	6	円	灰褐色土(10YR4/2)		
38	D-9	36	35	9	円	にふい黄褐色土(10YR5/3)		底面に擦
39	D-9	32	30	18	円	にふい黄褐色土(10YR5/3)		
40	D-9	45	41	17	円	褐色土(10YR4/4)		
41	D-9	48	45	16	円	1:にふい黄褐色土(10YR5/3), 2:褐色土(10YR4/4)		
42	D-9	34	33	15	円	褐色土(10Y5/4)		
43	E-9	35	31	15	円	褐色土(10Y14/4)		
44	E-9	35	34	16	円	灰褐色土(10YR5/2)		
45	E-9	31	28	14	円	1:にふい黄褐色土(10YR5/3), 2:褐色土(10YR4/4)		
46	E-9	31	29	8	円	形:にふい黄褐色土(10YR4/3)		
47	E-9	30	27	7	円	にふい黄褐色土(10YR4/3)		
48	E-8	40	37	13	円	形:にふい黄褐色土(10YR4/3)		
49	E-8	43	35	10	円	褐色土(10YR4/4)		
50	E-8	32	26	24	円	褐色土(10YR4/4)		
51	E-9	40	32	6	橢円	形:にふい黄褐色土(10YR5/3) 錫多環合		
52	E-8	35	30	10	円	にふい黄褐色土(10YR4/3)		
53	E-8	32	30	13	円	にふい黄褐色土(10YR5/3)		
54	E-8	37	35	21	円	にふい黄褐色土(10YR4/3)		
55	E-8	40	35	8	円	灰褐色土(10YR4/2)		
56	E-8	38	30	12	円	にふい黄褐色土(10YR4/3)		
57	E-8	35	32	18	円	1:灰褐色土(10YR5/2), 2:褐色土(10YR4/4)		
58	E-8	35	36	15	円	形:1灰褐色土(10YR5/2), 2:褐色土(10YR4/4)		
59	E-8	42	40	16	円	にふい黄褐色土(10YR4/3)		
60	E-9	43	40	10	円	灰褐色土(10YR5/2)		

番号	位置	層厚 長径	規 則性	縫 合	深さ (cm)	平面形	土 質	出土遺物		備考
								左	右	
P-61	E-9	40	40	10	14	円	褐色 L(10YR4/4)			
62	E-9	34	30	20	19	形	褐色 L(10YR4/4)			
63	E-9	26	25	20	19	形	褐色 L(10YR4/4)			
64	E-9	40	26	20	19	円形	褐色 L(10YR4/4)			
65	E-9	31	30	5	19	形	褐色 L(10YR4/4)			
66	E-9	38	37	10	19	形	褐色 L(10YR4/4)			
67	E-10	40	30	42	42	椭円形	1:4-2:4:1褐色土(10YR5/3), 2:褐色土(10YR4/4)			
68	E-10	39	38	13	19	円	暗灰褐色 L(2.5Y5/2)			
69	E-10	45	45	9	19	形	暗灰褐色 L(2.5Y5/2)			
70	E-10	35	25	10	19	形	暗灰褐色土(2.5Y4/2)			
71	E-10	31	31	11	19	円	暗灰褐色土(2.5Y5/2)			
72	E-10	36	35	10	19	形	暗灰褐色土(2.5Y5/2)			
73	E-10	25	25	12	19	円	暗灰褐色土(2.5Y5/2)			
74	E-10	35	32	15	19	形	暗灰褐色土(2.5Y5/2)			
75	E-10	35	35	13	19	形	暗灰褐色土(2.5Y5/2)			
76	E-10	28	27	6	19	形	暗灰褐色土(2.5Y5/2)			
77	E-10	40	30	15	19	形	暗灰褐色土(2.5Y5/2)			
78	E-10	40	38	7	19	形	暗灰褐色土(2.5Y5/2)			
79	E-10	40	36	10	19	形	暗灰褐色土(2.5Y5/2)			
80	F-3	38	30	10	19	椭円形	暗灰褐色土(2.5Y5/2)			
81	F-11	26	23	5	19	形	灰色 L(5Y6/1)			
82	F-9	28	28	10	19	形	褐色 L(10YR4/4)			
83	C-10	44	40	22	19	形	1:4:1褐色土(10YR4/2), 2:灰褐色土(10YR5/2)			
84	C-10	40	38	8	19	形	灰色土(5Y6/1)			
85	G-10	35	30	35	19	形	1:4-2:4:1褐色土(10YR4/3), 2:灰色 L(5Y6/1)			
86	G-9	39	35	15	19	形	褐色土(2.5Y5/2), 2:灰褐色土(10YR4/3)			
87	G-9	51	51	45	19	形	1:4:1褐色土(2.5Y4/1), 2:灰褐色土(10YR4/3)			
88	G-9	38	32	23	19	形	褐色土(10YR3/3) しまり灰			
89	G-9	43	41	10	19	形	褐色土(10YR4/3)			
90	G-9	40	31	10	19	椭円形	暗灰褐色土(2.5Y4/2)			

地図?

内耳器

番号	位置	規格	長径 短径 (cm)		半面形 深さ (cm)	土 形	出土遺物		備考
			長径	短径			形	種類	
P	91 G- 9	29	26	16	円	にぶい黄褐色土(10YR4/3) やや少含			
	92 G- 9	35	35	20	円	暗褐色土(10YR3/3) 少含			
	93 G- 9	32	30	13	円	暗灰褐色土(2.5Y4/2)			
	94 G- 8	36	30	18	円	暗褐色土(10YR3/3)			
	95 G- 8	35	29	25	円	暗褐色土(2.5Y3/2)			
	96 G- 8	35	32	10	円	暗灰褐色土(2.5Y4/2) 少含			
	97 G- 8	40	37	20	円	1:弱灰褐色土(2.5Y5/2) 2:灰 黄褐色土(10YR4/3)			
	98 G- 8	47	45	38	円	黒褐色土(10YR4/2)			内口土器
	99 G- 8	35	30	19	円	黒褐色土(2.5Y4/2) 出土物少含			
	100 G- 8	52	46	28	円	灰黃褐色土(10YR4/2) 少含			
	101 G- 8	37	31	20	円	暗灰褐色土(2.5Y4/2)			内口土器
	102 F- 8	36	35	10	円	1:灰 黄褐色土(10YR5/3)			
	103 F- 8	40	40	9	円	灰黃褐色土(10YR5/2)			
	104 F- 8	35	32	15	円	灰 黄褐色土(10YR4/3)			
	105 F- 8	42	40	20	円	灰 黄褐色土(10YR4/3)			
	106 F- 8	35	28	13	楕円	褐色土(10YR4/4)			
	107 F- 8	40	37	13	円	にぶい黄褐色土(10YR4/3) 少含			
	108 F- 8	25	22	11	円	1:灰 黄褐色土(10YR6/3)			
	109 F- 8	55	45	7	楕円	にぶい黄褐色土(10YR5/3)			土器皿
	110 F- 8	30	23	8	楕円	にぶい黄褐色土(10YR4/3) 少含			
	111 F- 9	26	25	8	円	暗灰褐色土(2.5Y5/2)			
	112 F- 9	35	33	5	円	暗灰褐色土(2.5Y4/2)			
	113 F- 8	43	36	21	楕円	1:灰 黄褐色土(10YR4/3)			土器皿、内口土器
	114 F- 8	45	43	7	円	褐色土(10YR4/4)			
	115 F- 8	46	46	13	円	にぶい黄褐色土(10YR4/3)			
	116 F- 8	44	40	9	円	褐色土(10YR4/4)			
	117 E- 8	35	33	30	円	暗褐色土(10YR3/4)			
	118 E- 8	31	30	20	円	暗褐色土(10YR3/4)			
	119 E- 9	40	31	6	楕円	暗灰褐色土(2.5Y5/2)			
	120 G 9	75	50	12	楕円	暗灰褐色土(2.5Y4/2) 少含			

番号	位置	基盤 長径 (cm)	基盤 短径 (cm)	深さ (cm)	土		層	出土遺物	備考
					平面形	形			
P-121	E-9	32	28	8	円	灰質褐色土(10YR5/2)			
-122	F-8	35	32	11	円	灰質褐色土(10YR5/2)			
-123	F-9	30	25	20	円	灰質褐色土(10YR5/2)			
-124	F-8	30	26	5	円	褐色土(10YR4/4)			
-125	F-9	35	30	13	円	灰質褐色土(10YR6/3)			
-126	F-9	31	31	13	円	灰質褐色土(10YR6/3)			
-127	F-9	33	28	9	円	灰質褐色土(10YR4/3)			
-128	G-5	52	45	25	円	灰質褐色土(10YR6/3)			
-129	F-5	36	30	5	円	灰質褐色土(10YR6/3)			
-130	H-6	46	35	10	楕円形	灰質褐色土(2.5Y6/3)			
-131	H-6	25	18	18	不整円形	灰質褐色土(2.5Y6/2)			
-132	H-6	32	30	10	円	灰質褐色土(10YR6/3)			
-133	H-6	35	31	5	円	灰質褐色土(10YR6/3)			
-134	H-6	10	28	17	楕円形	灰質褐色土(2.5Y6/4)			
-135	G-6	37	35	13	円	灰質褐色土(10YR6/2)			
-136	G-6	35	35	30	円	灰質褐色土(10YR6/3)			
-137	G-6	33	30	6	円	灰質褐色土(2.5Y6/2)			
-138	G-6	35	30	12	円	灰質褐色土(10YR5/2)			
-139	G-6	30	28	12	円	灰質褐色土(10YR5/2)			
-140	G-6	29	28	10	円	灰質褐色土(10YR5/2)			
-141	G-6	38	30	14	楕円形	灰質褐色土(10YR5/2)			
-142	G-6	46	40	13	円	灰質褐色土(2.5Y6/2)			
-143	G-6	55	35	11	楕円形	灰質褐色土(2.5Y5/2)			
-144	G-9	50	45	18	円	灰質褐色土(2.5Y4/2)			
-145	F-3	34	33	23	円	灰質褐色土(2.5Y4/2)			
-146	F-3	35	35	24	円	灰質褐色土(2.5Y4/2)			
-147	F-3	33	30	16	円	灰質褐色土(2.5Y4/2)			
-148	F-3	45	32	26	楕円形	灰質褐色土(2.5Y5/2)			
-149	F-3	58	44	28	楕円形	灰褐色土(2.5Y3/1)			
-150	F-3	60	42	20	楕円形	1:褐色黃色土(2.5Y3/2), 2:深褐色土(2.5Y5/1)			

内耳土器

内江土器

>SK91

番号	位置	直径 (mm)	軸径 (mm)	深さ	上		層	出土遺物	備考
					平面形	形			
P 151	F- 3	25	24	20	円	輪狀色土(2.5Y5/1)			
152	F- 4	38	37	15	円	輪狀灰土(2.5Y5/1)			
153	F- 4	38	35	35	円	輪狀黃色土(2.5Y4/2)			
154	F- 4	35	25	19	円	輪狀黃色土(2.5Y5/2)			内W+8
155	F- 4	40	36	21	円	輪狀黃色土(2.6Y5/2)			
156	F- 4	35	35	19	円	輪狀黃色土(3.6Y4/2)			
157	F- 5	38	32	18	円	輪狀黃色土(2.5Y4/2)			
158	F- 1	40	35	20	円	輪狀黃色土(2.5Y5/2)			
159	G- 4	40	36	12	円	輪狀黃色土(10YTR4/2)			
160	G- 4	42	40	23	円	輪狀黃色土(2.6Y4/2)			
161	G- 4	45	36	21	楕	圓形 1:輪狀黃色土(2.5Y4/2), 2:輪狀黃色土(2.5Y5/1)			
162	G- 4	41	39	20	円	輪狀黃色土(2.5Y4/2), 2:輪狀黃色土(2.5Y5/1)			
163	G- 4	43	35	20	椭	圓形 輪狀黃色土(2.5Y4/2) 稲多量含			
164	G- 4	50	46	25	円	輪狀黃色土(2.5Y4/2)			
165	G- 4	26	24	13	円	輪狀黃色土(10YTR4/3) 稲多量含			
166	G- 4	37	33	18	円	オーブ形 黑色土(5Y3/1)			
167	F- 4	35	30	21	円	輪狀黃色土(2.5Y4/2)			
168	F- 4	40	33	6	椭	圓形 輪狀黃色土(2.5Y5/2)			
169	C- 4	35	30	19	円	輪狀黃色土(2.5Y4/2)			
170	C- 4	36	30	29	円	灰黃褐色土(10YR4/2)			
171	I- 7	35	30	15	円	輪狀黃色土(2.5Y4/2) しまり穴			
172	I- 7	30	28	13	円	輪狀黃色土(2.5Y4/2)			
173	I- 8	35	30	12	円	輪狀黃色土(2.5Y4/2) 稲多量含			
174	H- 8	45	35	11	椭	圓形 輪狀黃色土(2.5Y5/1)			
175	H- 8	40	29	9	椭	輪狀黃色土(2.5Y5/1)			
176	H- 8	45	40	17	円	輪狀黃色土(2.5Y5/1)			
177	H- 8	43	37	10	円	輪狀黃色土(2.5Y6/1) 稲少量含			
178	G- 8	24	20	25	円	輪狀黃色土(2.5Y4/2) 稲多量含			>SK68
179	I- 8	31	27	19	円	輪狀黃色土(2.5Y4/2) 稲少量含			
180	H- 8	40	31	12	椭	圓形 輪狀黃色土(2.5Y4/2) 稲少量含			

番号	位置	規格	機械 (mm)		層	山上遺物	備考
			長径	短径			
P 181	H- 8	40	31	12	柳円形	陶灰黃色土(2.5Y6/2) 稀少量含	
182	I- 8	63	45	25	柳円形	陶灰黃色土(2.5Y4-/2) 稀少量含	
183	I- 8	45	40	19	円 形	陶灰黃色土(2.5Y4-/2) 稀少量含	
184	H- 8	52	35	15	柳円形	陶灰黃色土(2.5Y4-/2) 稀少量含	内耳上器
185	H- 8	43	35	20	柳円形	灰黃褐色土(10Y7R4-/2)	
186	H- 8	43	37	19	円 形	陶灰黃色土(2.5Y4-/2)	
187	H- 8	40	35	25	柳円形	陶灰黃色土(2.5Y4-/2) 稀少量含	内耳下器
188	H- 8	50	40	21	不整圓形	陶灰黃色土(2.5Y4-/2) 稀少量含	
189	H- 9	60	50	21	柳円形	陶灰黃色土(2.5Y4-/2) 稀少量含	
190	H- 9	63	49	30	柳円形	灰黃褐色土(10Y7R4-/2) 岩化物少量含	
191	H- 9	52	38	28	柳円形	灰黃褐色土(10Y7R4-/2)	
192	H- 9	42	42	25	円 形	陶灰黃色土(10Y7R4-/2) 稀少量含	
193	H- 9	50	45	21	円 形	陶灰黃色土(10Y7R4-/2) 稀少量含	
194	H- 9	46	39	30	円 形	陶灰黃色土(2.5Y4-/2)	
195	H- 9	46	32	20	柳円形	陶灰黃色土(10Y7R4-/2)	
196	H- 9	45	35	10	柳円形	陶灰黃色土(2.5Y4-/2)	上器III. 内耳土器
197	H- 9	37	35	15	円 形	陶灰黃色土(2.5Y6/2) しまり欠	
198	H- 9	40	34	15	柳円形	陶灰黃色土(3.5Y5/2) しまり欠	
199	H- 9	50	44	25	円 形	灰4-7色土(5Y4-/2) 稀少量含	
200	H- 9	42	40	16	円 形	陶灰黃色土(2.5Y6/2) 稀少量含	
201	H- 9	36	35	20	円 形	灰オリーブ色土(5Y4-/2) 稀少量含	
202	H- 9	36	30	13	円 形	灰4-7色土(5Y4-/2)	
203	II- 9	35	35	14	円 形	陶灰黃色土(2.5Y5-/2)	
204	H- 9	53	50	28	円 形	陶灰黃色土(2.5Y4-/2) 稀少量含	
205	H- 9	38	30	10	柳円形	陶灰黃色土(10Y7R4-/2)	
206	H- 9	47	40	19	柳円形	陶灰黃色土(10Y7R4-/2)	
207	H- 9	50	50	16	円 形	陶灰黃色土(2.5Y4-/2)	
208	H- 9	28	25	6	円 形	陶灰黃色土(2.5Y4-/2)	
209	H- 9	28	27	15	円 形	陶灰黃色土(2.5Y4-/2)	
210	I- 9	53	45	12	円 形	灰色土(5Y5-/1) 稀少量含	

番号	位置	長径	幅	幅(横)	深さ	層		出土遺物	備考
						上	下		
P-211	I-10	46	35	20	横円形	灰色+(5Y5-/1)	繊少量含		
212	H-10	45	35	10	横円形	灰色+(5Y5-/1)			
213	H-9	30	29	14	円形	灰オーブ色土(5Y5-/2)			
214	H-9	31	30	10	円形	灰オーブ色土(5Y6-/2)			
215	H-9	41	38	10	円形	灰褐色土(3Y6-/2)			
216	G-10	35	32	15	円形	暗灰褐色土(3.5Y6-/2)			
217	G-10	37	37	11	円形	暗灰褐色土(3.5Y6-/2)	種や多く含		
218	G-10	43	35	10	横円形	黄灰色土(2.5Y6-/2)			
219	II-10	30	24	13	横円形	灰オーブ色土(5Y5-/2)	やや砂質		
220	I-10	32	30	10	円形	灰色+(6Y5-/1)			
221	I-10	43	37	14	円形	暗灰褐色土(3.5Y6-/2)	炭化物少量含		
222	I-10	36	36	15	円形	灰色+(6Y5-/1)	繊少量含		
223	I-10	45	37	18	横円形	灰オーブ色土(5Y5-/2)	繊少量含		
224	I-10	70	50	17	横円形	灰オーブ色土(5Y5-/2)	繊少量含		
225	H-10	37	25	14	円形	暗褐色土(3.5Y6-/2)			
226	H-10	37	35	13	円形	灰オーブ色土(5Y5-/2)			
227	D-10	30	27	10	円形	暗灰褐色土(3.5Y6-/2)			
228	II-9	33	27	12	円形	灰色+(5Y5-/1)			

SB1 出土土器観察表

被き物・器形の種類	番号	法量			形態の特徴	技法の特徴	備考
		口径	底径	高さ			
須恵器 砕	1	13.6	5.4	4.1	*薄い体部が大きく外側する。	*内外ヨコナデ。底部回転糸切り。	*底部外面墨書き。
	2	13.8	5.9	3.6			*灰質。
黑色土器 砕	3	13.7	6.0	3.9	*内面は底部直角に明瞭な縁を作らず緩やかに立ち上がる。	*内外ヨコナデ。底部回転糸切り。 *内面ヘラ磨き。黒色處理。	*底部外面墨書き。

SK5 出土土器観察表

被き物・器形の種類	番号	法量			形態の特徴	技法の特徴	備考
		口径	底径	高さ			
土器 砕	4	10.0	5.7	2.5	*底部はやや丸味を持つ。	*内外ヨコナデ。底部回転糸切り。	

SK21 出土陶器観察表

被き物・器形の種類	番号	法量			形態の特徴	技法の特徴	備考
		口径	底径	高さ			
鉢輪 入口系縁	5	14.0			*円錐形が底を有する。	*内外ヨコナデ。	*古墳。

SK40 出土陶器観察表

被き物・器形の種類	番号	法量			形態の特徴	技法の特徴	備考
		口径	底径	高さ			
灰船 仏花瓶	6		8.4		*斜りこめたた体部が大きく開く。	*内外ヨコナデ。底部回転糸切り。	*古墳。

SK49 出土土器観察表

被き物・器形の種類	番号	法量			形態の特徴	技法の特徴	備考
		口径	底径	高さ			
内耳上唇 壶	7	25.9			*体部は直立し、上位で弱い腰を作りながら外反する。	*内外ヨコナデ。耳貼り付け。	
	8	23.0					
内耳上唇 壺	9						
	10	29.5					

SK50 出土陶器観察表

被き物・器形の種類	番号	法量			形態の特徴	技法の特徴	備考
		口径	底径	高さ			
灰筋 平底	11	16.4			*体部は大きく開き、口縁直下で腰をなす。	*内外ヨコナデ。	*占溝。

SK56 出土陶器観察表

被き物・器形の種類	番号	法量			形態の特徴	技法の特徴	備考
		口径	底径	高さ			
灰筋 丸紐	12	3.6	3.9	2.4	*体部は丸紐を持って立ち上がる。	*内外ヨコナデ。	*削り出し。

SK57 出土土器・陶器観察表

被き物・器形の種類	番号	法量			形態の特徴	技法の特徴	備考
		口径	底径	高さ			
土器 瓢	13	9.7	5.7	2.3	*体部は中位で腰を持ち、口縁直下で腰をなす。	*内外ヨコナデ。底部回転糸切り。	

器物・器形の種類	番号	法量	形態の特徴	技法の特徴	備考
		口径 底径 高さ			
良石器 丸皿	14	11.6	*体部中位で縁を作る。	*内外コナデ。 *内面鉛輪。	*志野彫器。

SK61 出土土器・陶器観察表

器物・器形の種類	番号	法量	形態の特徴	技法の特徴	備考
		口径 底径 高さ			
鉄輪 天日茶碗	15	13.6	*口縁端部が直立する。	*内外コナデ。	*古窓戸。
内耳土器 碗	16	30.8	*体部は直立し、上位で弱い縁を作る。指ナデ痕が明瞭に残る。	*内外ナデ。	

SK69 出土土器観察表

器物・器形の種類	番号	法量	形態の特徴	技法の特徴	備考
		口径 底径 高さ			
内耳土器 碗	17	22.4	*体部は斜めに立ち上がる。	*内外ナデ。	

SK72 出土土器観察表

器物・器形の種類	番号	法量	形態の特徴	技法の特徴	備考
		口径 底径 高さ			
内耳土器 碗	18		*口縁部は直立している。	*内外ナデ。耳部貼り付け。	

SK88 出土土器観察表

器物・器形の種類	番号	法量	形態の特徴	技法の特徴	備考
		口径 底径 高さ			
内耳土器 碗	19	33.5 25.0 14.9	*体部は斜めに、ほぼ真っすぐ立ち上がる。	*内外ナデ。耳部貼り付け。 *底部形位。	

SK91 山土器観察表

器物・器形の種類	番号	法量	形態の特徴	技法の特徴	備考
		口径 底径 高さ			
内耳土器 ぼうろく	20	27.4 23.0 6.3	*体部はやや丸味を持ちながら、斜めに立ち上がる。	*内外ナデ。耳部貼り付け。	
内耳土器 碗	21	25.9	*口縁直下で弱い縁を作る。		

堀出土土器・陶磁器観察表

器物・器形の種類	番号	法量	形態の特徴	技法の特徴	備考
		口径 底径 表高			
灰釉 丸皿	22	5.3	*体部は下半でやや丸味を持つて立ち上がる。	*内外コナデ。 *内面磨花。	*相戸美濃。
灰釉 丸皿	23	11.2	4.8	*体部は下半で丸味を持って肩っすぐ上に立ち上がる。	*内外ナデ。 *相戸美濃。
	24	11.0			
	25	13.7			
磁器 碗	26	14.5	*口縁直下で縁を作り立ち上がる。		
磁器 碗	27	3.7	*底部端よりかなり内側に高台が付く。		*伊万里。
灰釉 仏花瓶	28	6.8		*底部端縁糸切り。	*古窓戸。

器物・形の種類	番号	法量			形態の特徴	技法の特徴	備考
		口径	底径	高さ			
内耳土器・鍋	29	22.7			* 口縁部は内凹し、その内面は指ナメ痕を明瞭に残す。	* 内外ナデ。	
	30	36.4			* 口縁部が大きく外反する。		
行平 罩	31	15.3			* 錫部を水平に折り返す。	* 内外ナデ。体部削目。	* 内外上位輪動。
行平 罩	32	16.0			* 小さな底部から体部が大きく外反し、中位で直立する。	* 内外ココナデ。	* 内面削離または灰施。
	33	17.2			* 口縁部は折り返してから立ち上げて、山を作る。	* 体部外向上平、櫛目。	
	34	17.5	8.4	9.7			
	35	18.8					
灰釉 烧跡	36	26.8	11.8	15.4	* 壁が板らしく立ち上がる。	* 内外ココナデ。	* 海戸美濃。
	37	32.2	13.7	10.0	* 体部は大きく外側する。		
灰釉 脊柱	38	28.4	16.1	14.6	* 体部は丸味を持って立ち上がる。	* 内外ココナデ。	
	39	33.6	17.8	18.2		* 底部削り調整。	
灰釉 脊柱	40	34.8	18.7	15.1	* 体部はやや丸味を持つ。	* 内外ナデ。	
	41	34.0	16.6	15.3	* 高い窓合が付く。	* 底部削り調整。高窓貼り付け。	
					* 片口が付く。		
					* 体部は斜めに、ほぼ真っすぐ立ち上がる。	* 内外ナデ。	
						* 底部削り調整。	

造構外川土器・陶磁器観察表

器物・形の種類	番号	法量			形態の特徴	技法の特徴	備考
		口径	底径	高さ			
長石粉 丸皿	42	11.8	6.5	1.9	* 口縁部は強く外反する。	* 内外ココナデ。	* 志野。
灰釉 丸皿	43	10.1	5.0	2.2	* 体部はやや丸味を持ちながら大きく外側する。	* 内外ナデ。	* 海戸美濃。
長石粉 碗	44		4.3		* 薄い窓合が付く。	* 体部下半削り調整。	* 志野。
磁器 滋	45	7.0	3.1	4.8			
輪滑 灰白皿	46	9.6	3.4	1.9	* 体部は直線的に大きく窪む。	* 内外ココナデ。底部削り調整。	
行平 罩	47	13.2	--	3.1	* 口縁部を水平に折り返す。	* 内外ココナデ。	
鉄(鋳)物・土瓶	48	10.3			* 大井筋に1カ所、穿孔を施す。	* 頂部回転ベラ削り。	
	49				* 約り手は丸花状。	* 体部外面糸目。	
	50				* 体部はほぼ真っすぐ立ち上がる。	* 内外ナデ。底部貼り付け。	
	51	20.2	18.4	10.5	* 口縁部は強く外側する50を除いては直立する。	* 底部砂粒。	
	52	21.7			* 縁部は内面に指ナメ痕を明瞭に残すものと、工具で広い窓を作っているものがある。		
	53	27.9	22.4	10.6			
	54	30.9					
	55	34.0					
	56		23.5				
	57		24.3				
	58		19.8				
	59		14.7				

金属(鉄)製品一覧表

造 様 名	図番号	種 別	法 量 (mm)			備 考	造 様 名	図番号	種 別	法 量 (mm)			備 考
			長さ	幅	厚さ					長さ	幅	厚さ	
SK 9		釘		4	4		SK49		釘		5	3	
SK22	60	〃	45	4	3		SK62		〃	81	2	2	
〃	61	〃		5	3		〃		?		11	6	
〃	〃	54	5	3			SK67		釘		7	4	
〃	〃			4	3		遺構外		刀子		8	5	
SK37		〃		3	2		〃		釘		6	6	
SK45		〃		7	6		〃		〃		7	6	

石器・石製品一覧表

造 様 名	図番号	種 別	法 量 (mm)			備 考	造 様 名	図番号	種 別	法 量 (mm)			備 考
			長さ	幅	厚さ					長さ	幅	厚さ	
SK 7	64	瑪 石	116	39	37	珪長石?	媚		石 白				砂岩
〃	69	碧 石			82	花崗岩	遺構外	63	石 鑿				チャート
SK21	62	石 鑿				珪長石	〃	66	礫 石		32	32	砂岩
SK49	70	石 白				安山岩	〃	67	碧 石	156	144	75	安山岩
〃	〃					安山岩	〃	68	碧 石	301			花崗岩
SK66	71	〃			72	安山岩	〃	73	石 白			103	安山岩
媚	65	瑪 石		29	25	珪長石?	〃	74	石 白			105	安山岩
〃	72	石 白				安山岩							

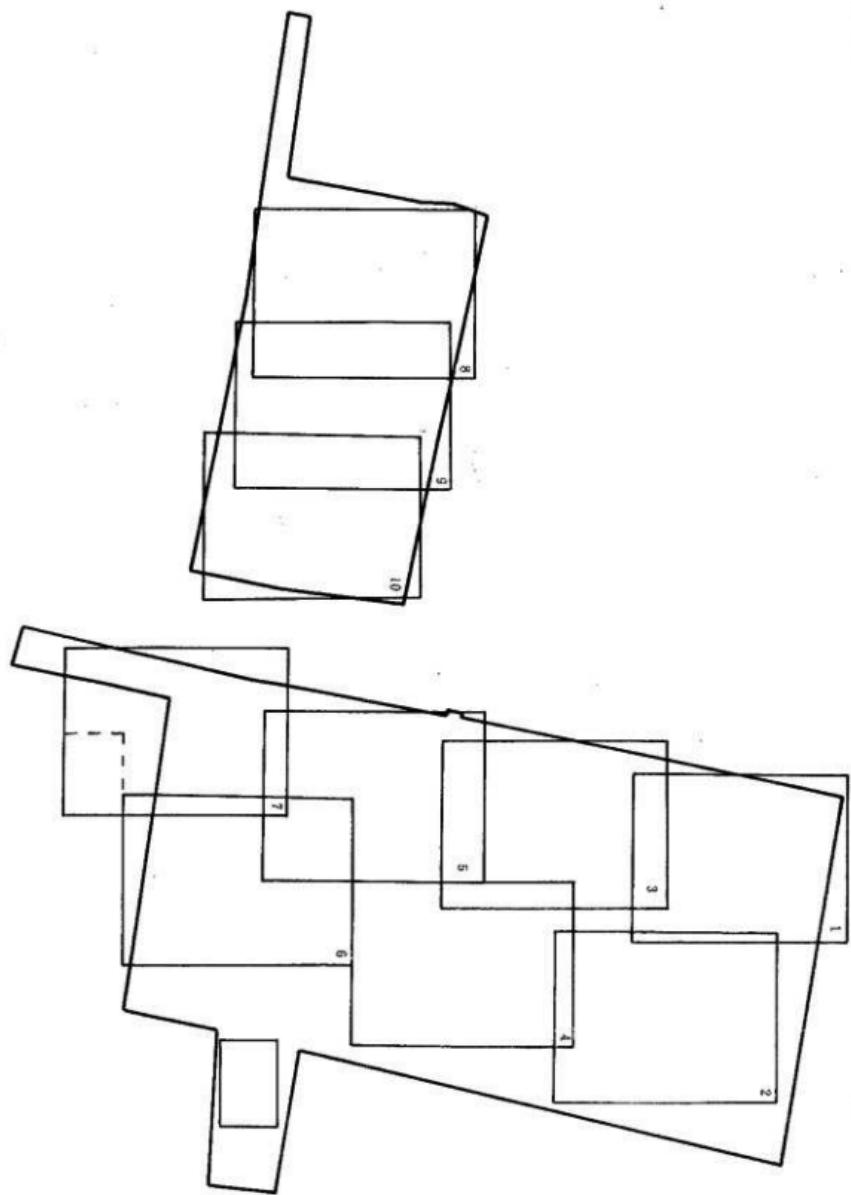
錢貨一覧表

造 様 名	図番号	錢 貨 名	初 鋢 造 年		備 考	造 様 名	図番号	錢 貨 名	初 鋒 造 年		備 考
			王朝名	年代					王朝名	年代	
SK 2	75	元祐通宝	宋	1086年	中国	SK66	81	祥符元宝	宋	1008年	中国
SK21	76	景德元宝	宋	1004年	中国	SK69	82	咸平元宝	宋	986年	中国
SK37	77	至道元宝	宋	995年	中国	SK71	83	乾元重宝	唐	785年	中国
SK45		一钱铜钱	明 治		日本	P 98	84	皇宋通宝	宋	1039年	中国
SK56	78	熙寧元宝	宋	1068年	中国	遺構外	85	天禧通宝	宋	1017年	中国
SK60	79	聖宋通宝	宋	1039年	中国	〃	86	政和通宝	宋	1111年	中国
SK61	80	崇德元宝	宋	1004年	中国						

図 版



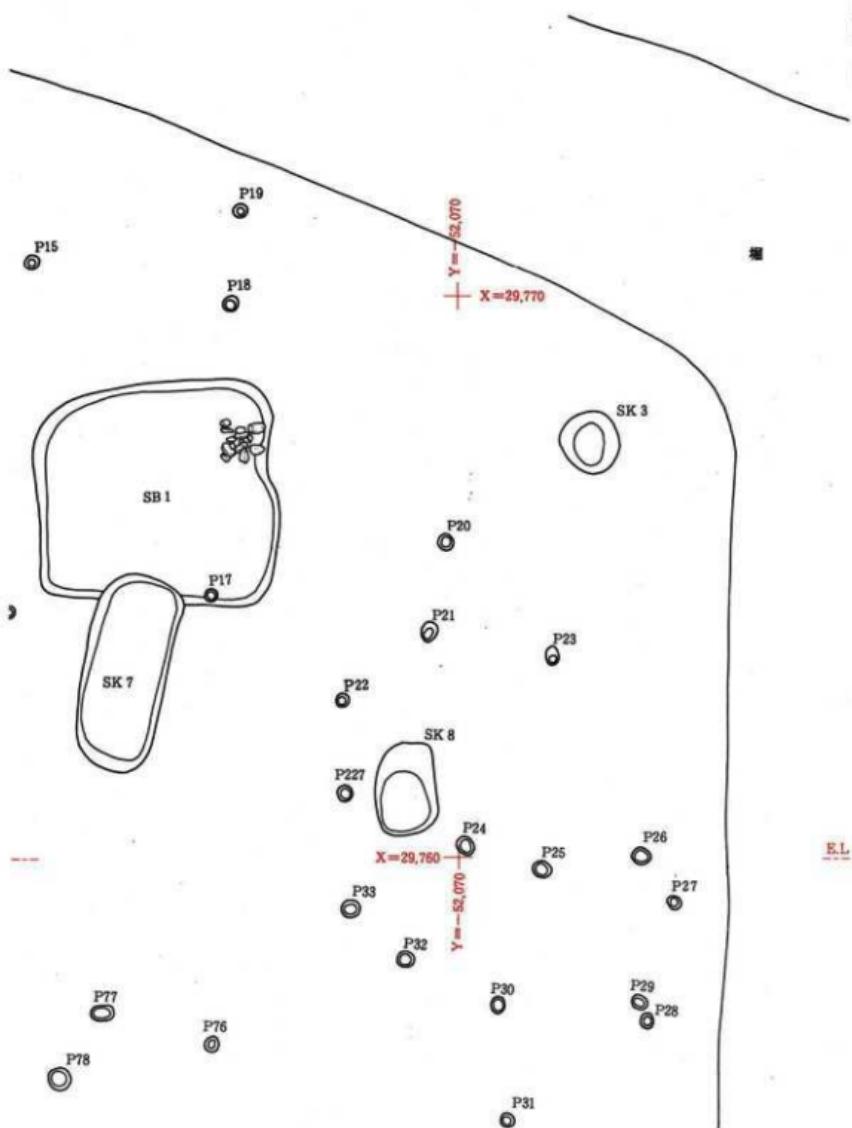
調査地全体図



透構図版割付図



遺構図 (1)



遺構図 (2)

P34 五

X = 29,760 Y = -52,060

X = 29,760 Y = -52,060

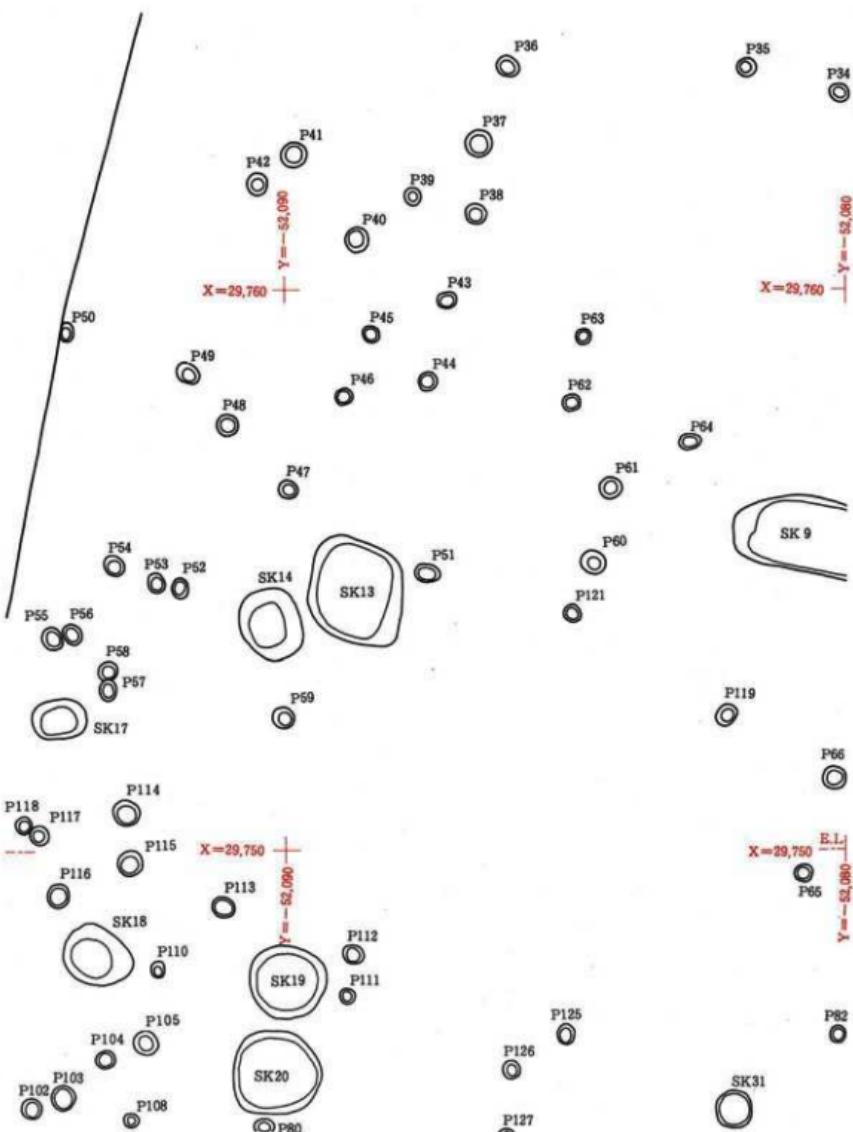
SK 9

P66

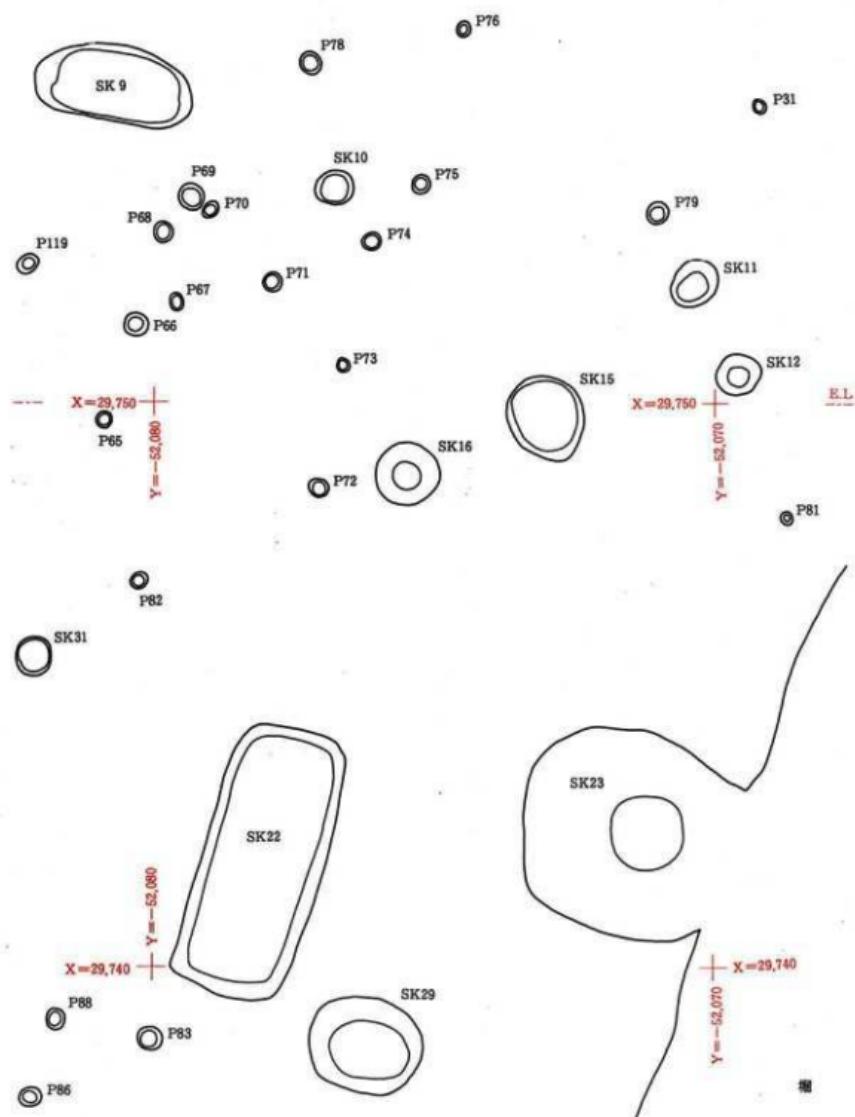
X = 29,750 Y = -52,060

P65

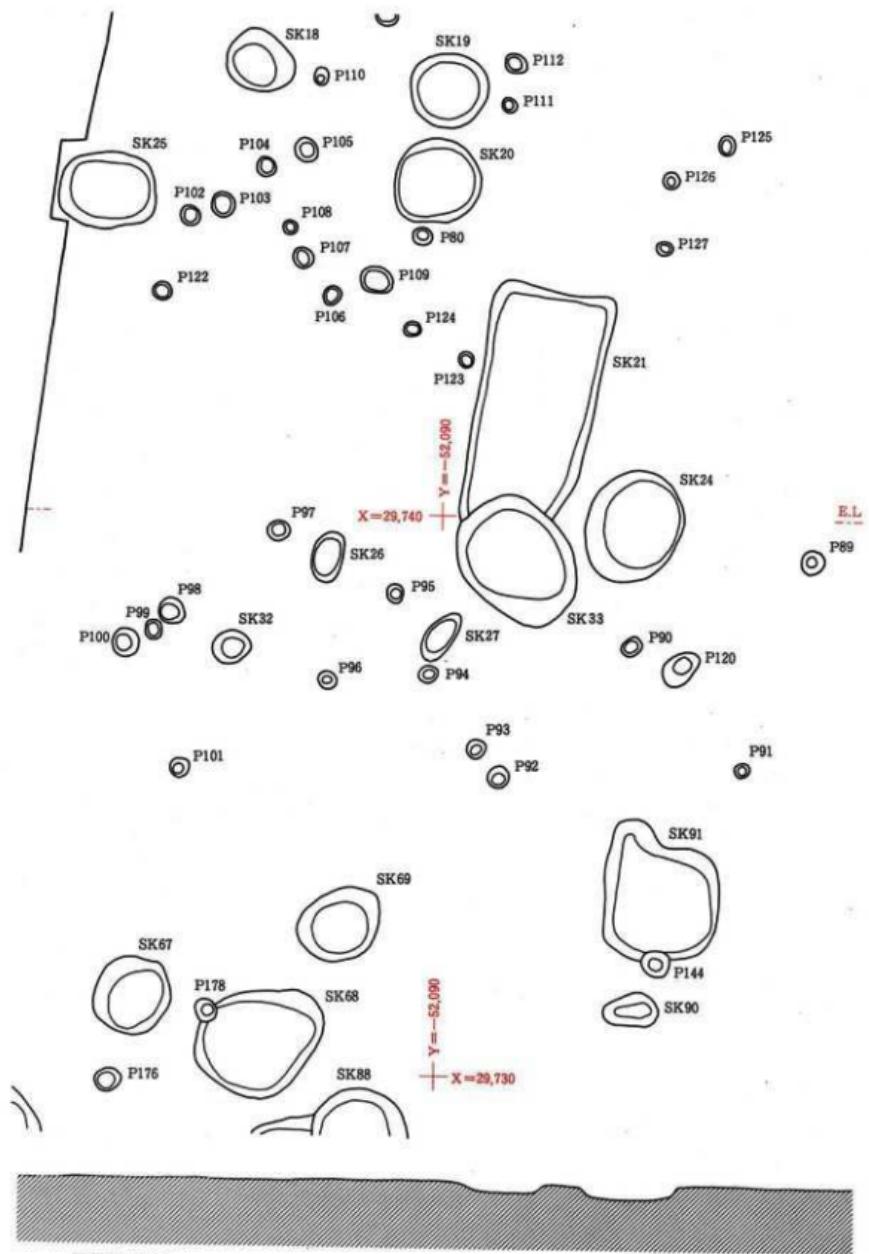
P82



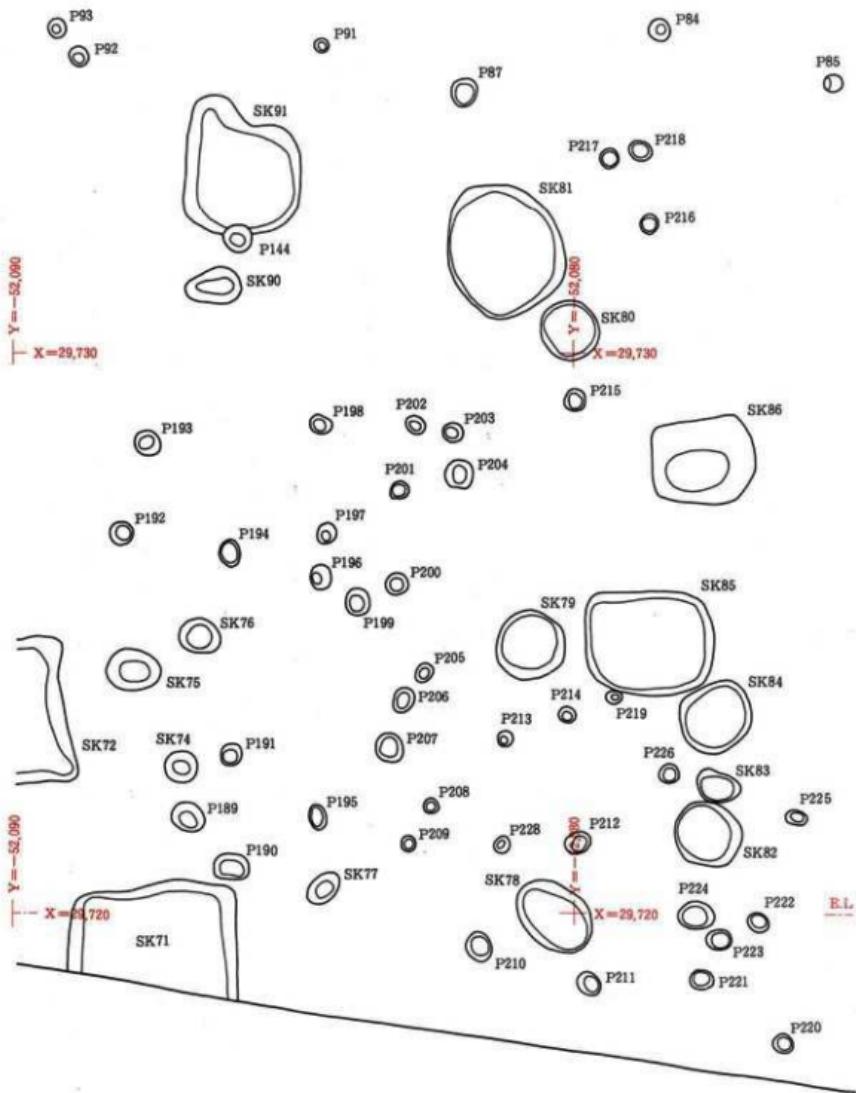
遺構図(3)



遺構図(4)



遺構図（5）



遺構図 (6)

P192

SK75

SK72

X = 29,730
Y = -52,060X = 29,730
Y = -52,100

SK88

P188

P187

P186

P185

SK73

SK62

P181

P180

P183

P184

SK71

P182

P179

SK70

SK69

P173

SK60

P172

P171

SK87

P176

SK68

SK66

SK65

SK64

P177

P186

P185

P175

SK63

P174

P176

SK65

SK66

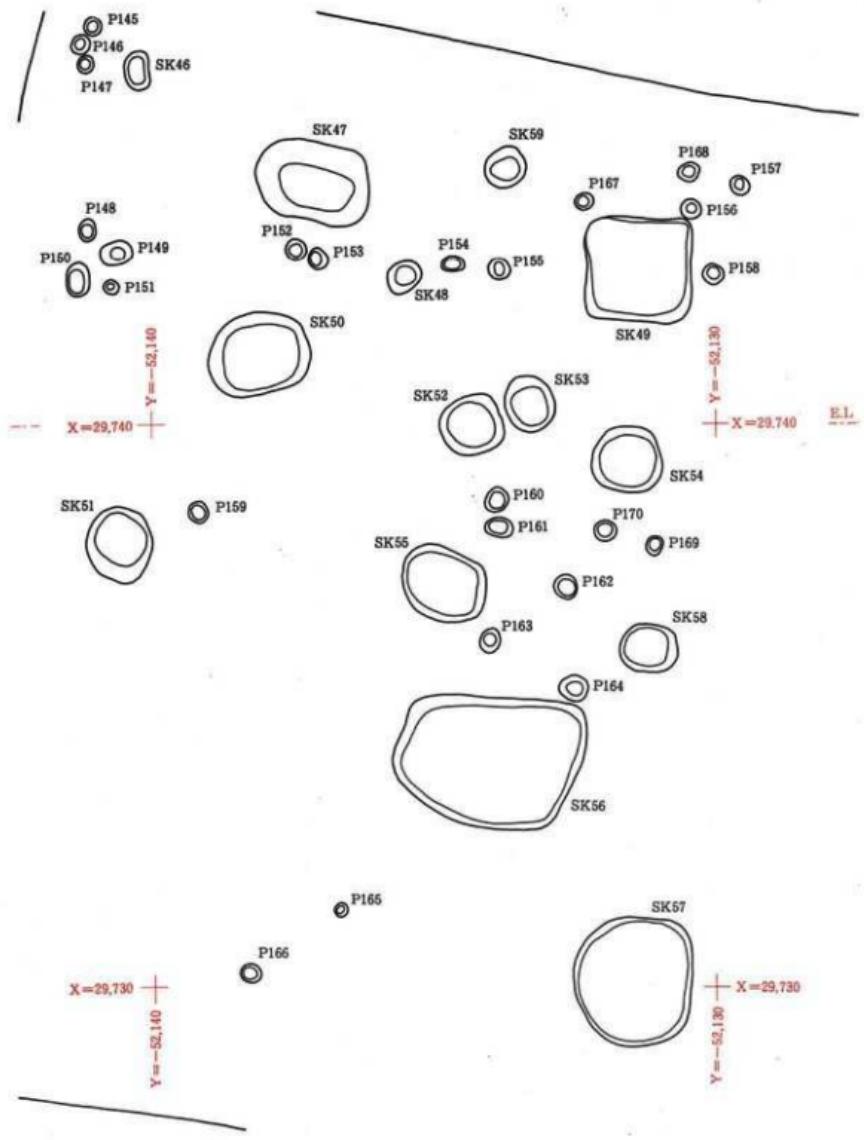
SK68

SK88

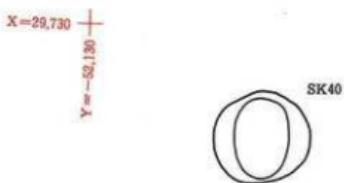
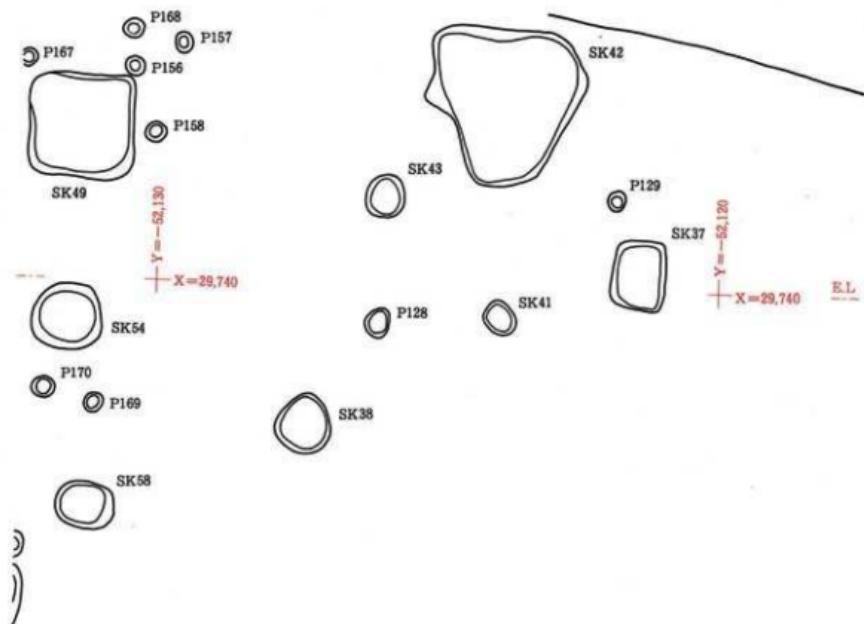
P192

C

遺構図(7)



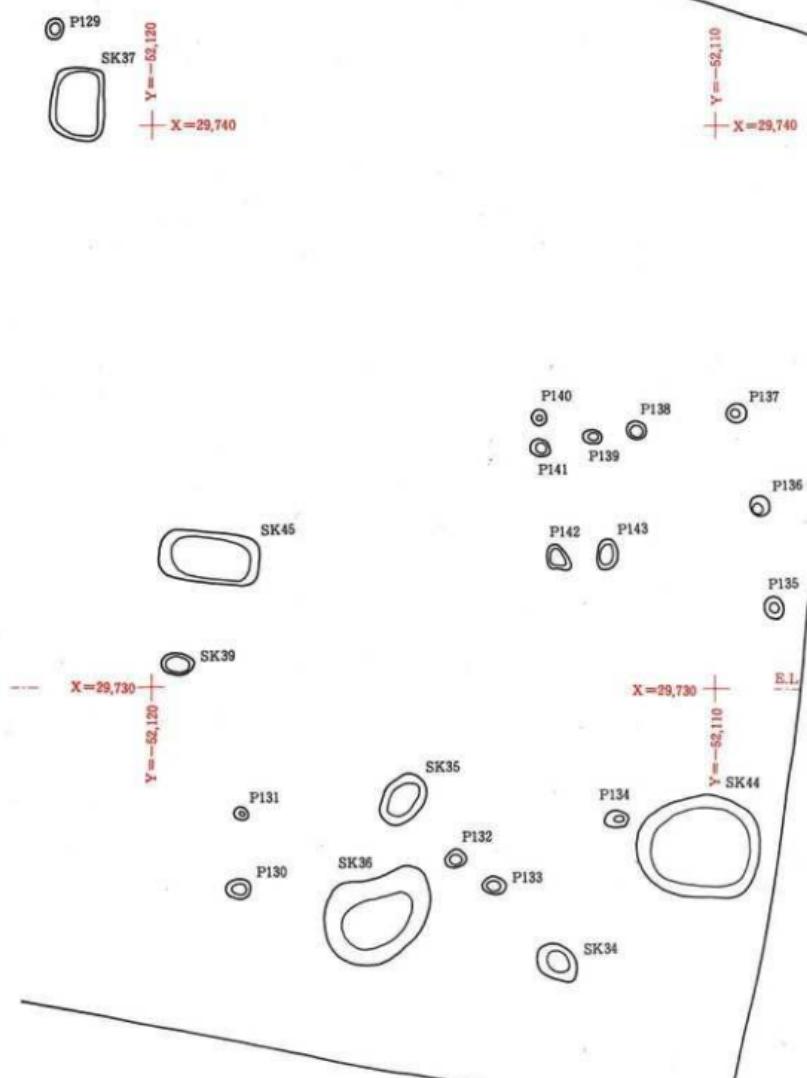
遺構図(8)



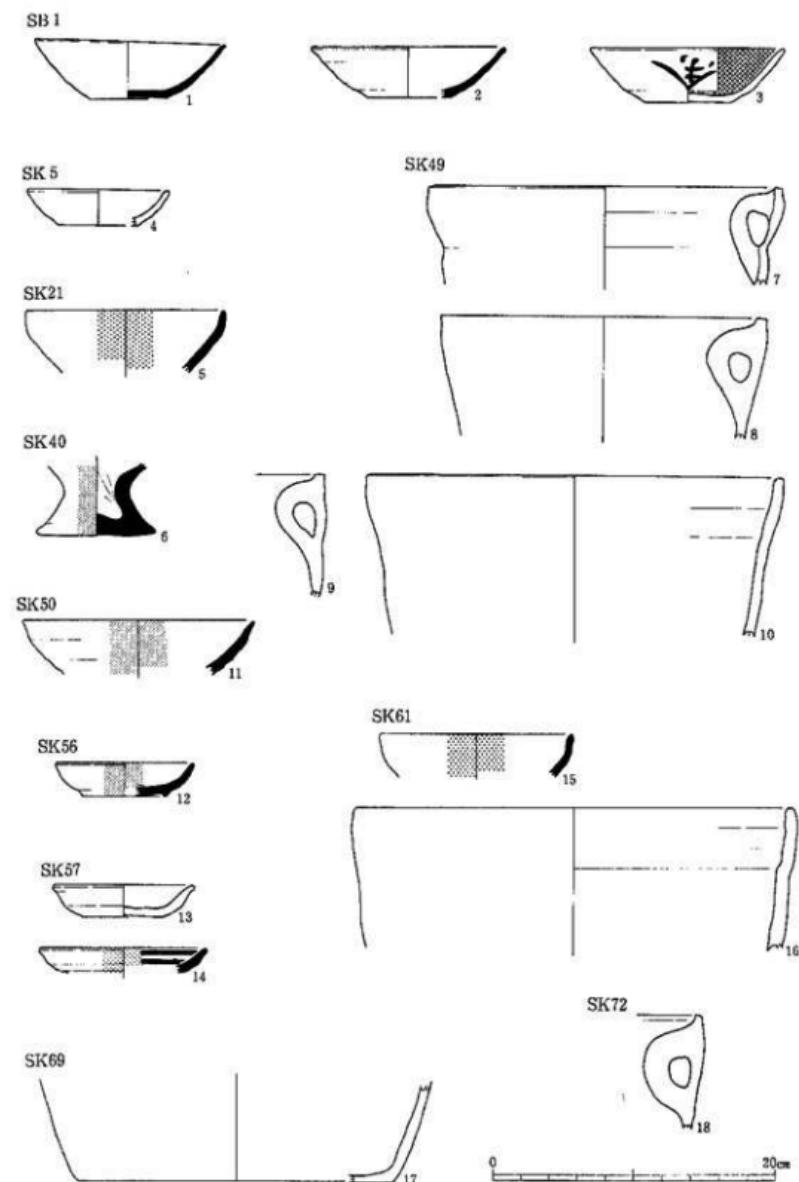
P130



遺構図 (9)

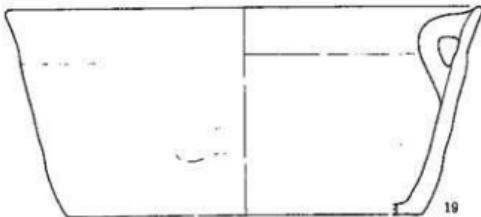


遺構図 (10)



遺物実測図（土器・陶磁器：SB 1, SK 5, SK 21, SK 40, SK 49, SK 50, SK 56, SK 57, SK 61, SK 69, SK 72）

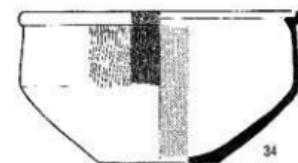
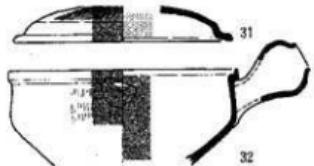
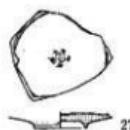
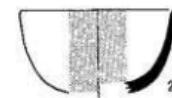
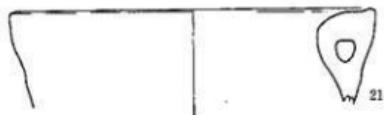
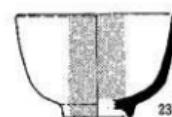
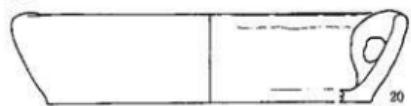
SK88



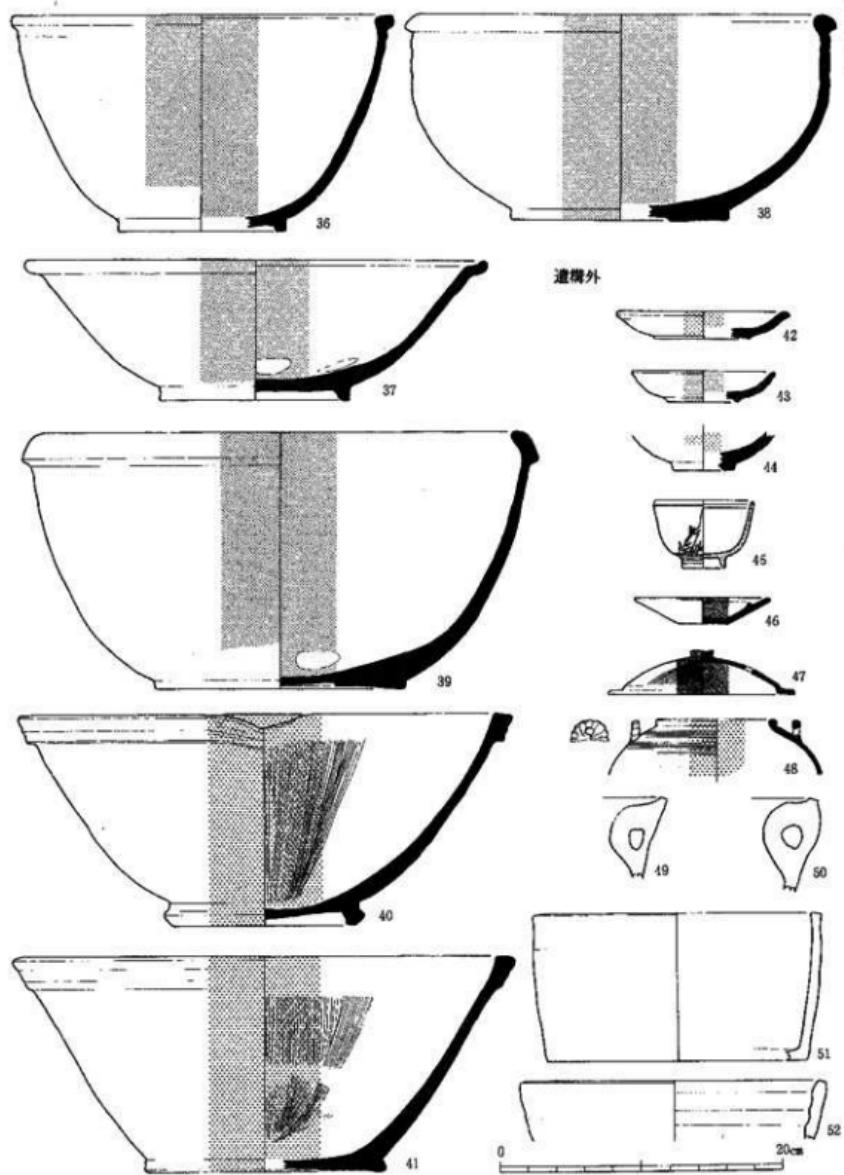
堀



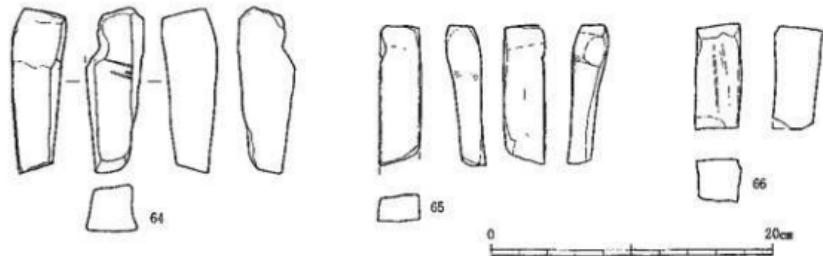
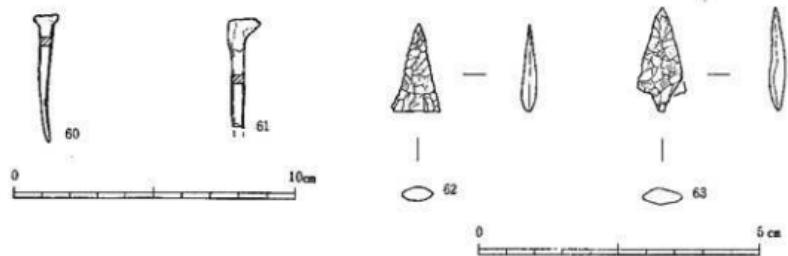
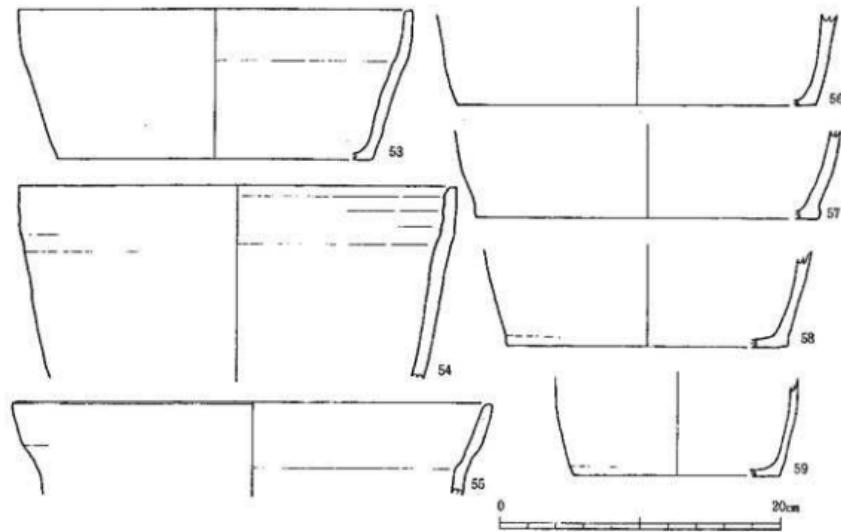
SK91



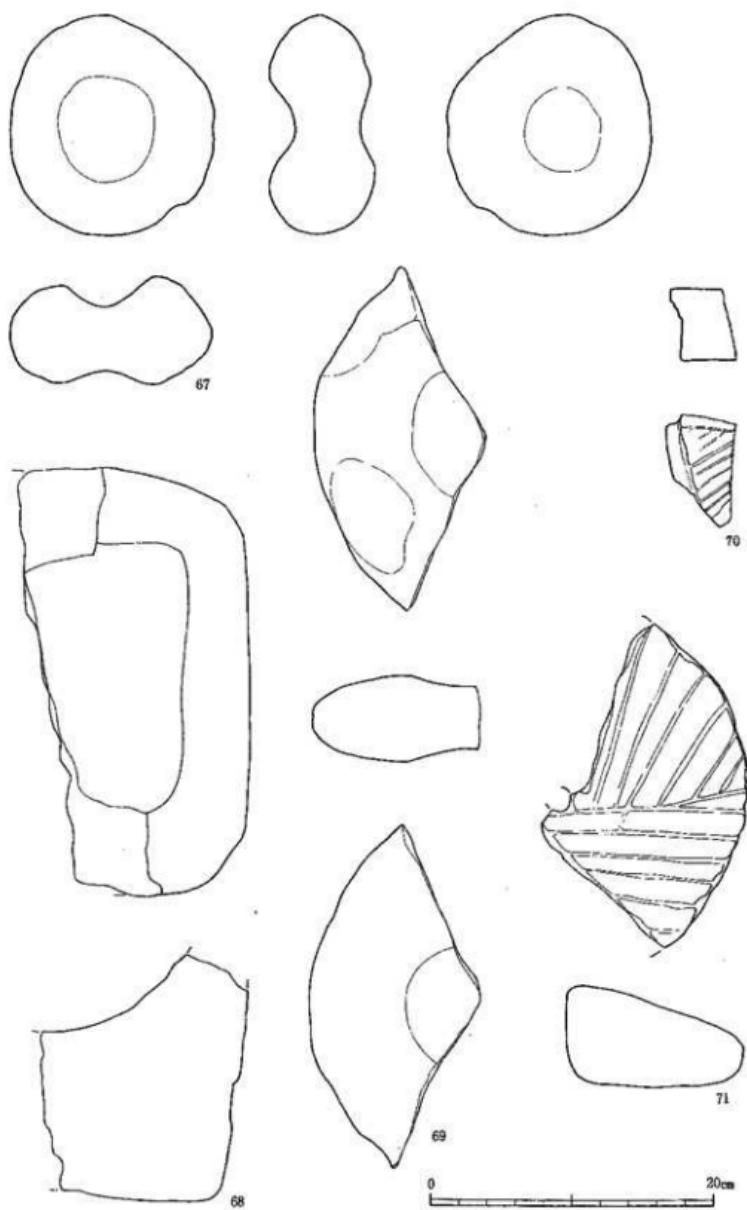
遺物実測図（土器・陶磁器：SK88, SK91, 堀）



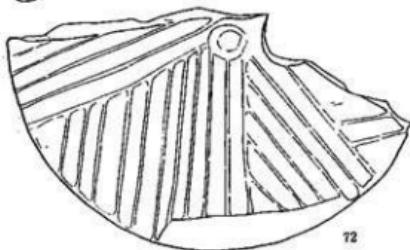
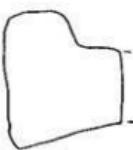
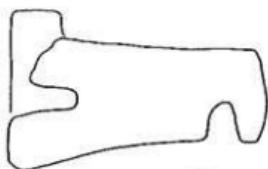
遺物実測図（土器・陶磁器：壺、遺構外）



遺物実測図（土器・陶磁器：遺構外、金属製品、石器・石製品）



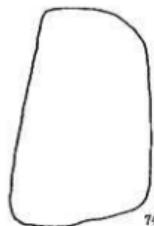
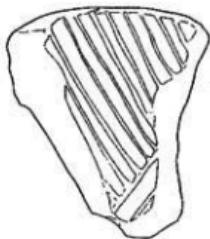
遺物実測図（石器・石製品）



72



73



74



75



76



77



78



79



80



81



82



83



84



85



86



遺物実測図（石器・石製品、銭貨）



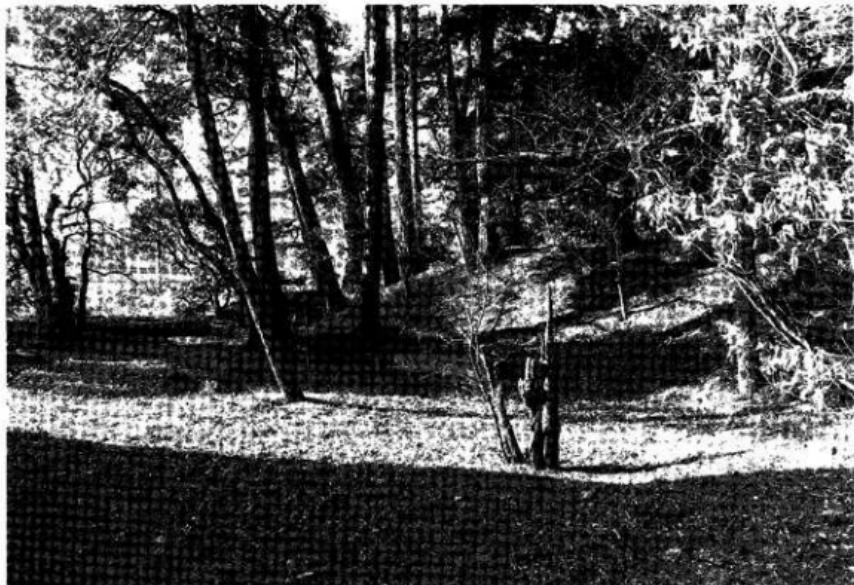
鳥羽館跡全景



圖・土壘（遺跡北西隅）



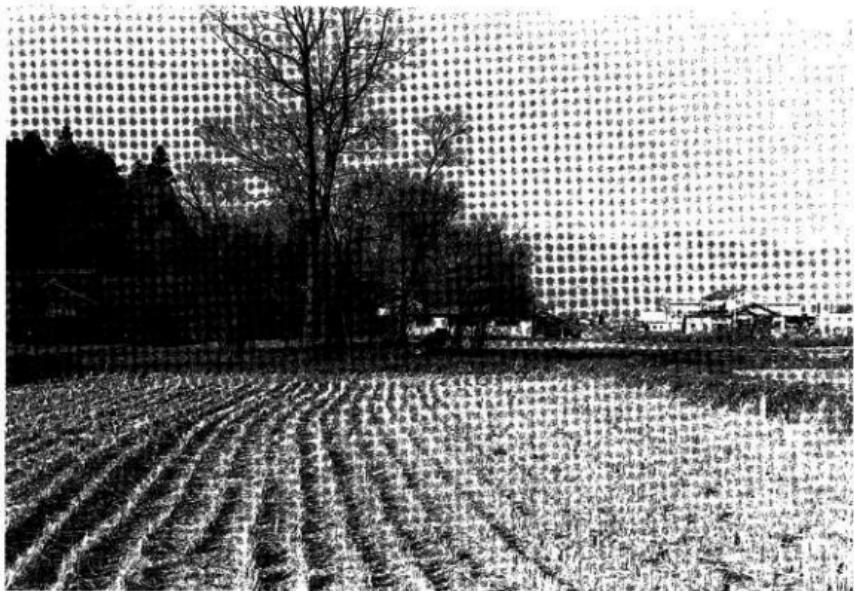
圖・土壘（遺跡北西隅）



土壘（遺跡北西隅）



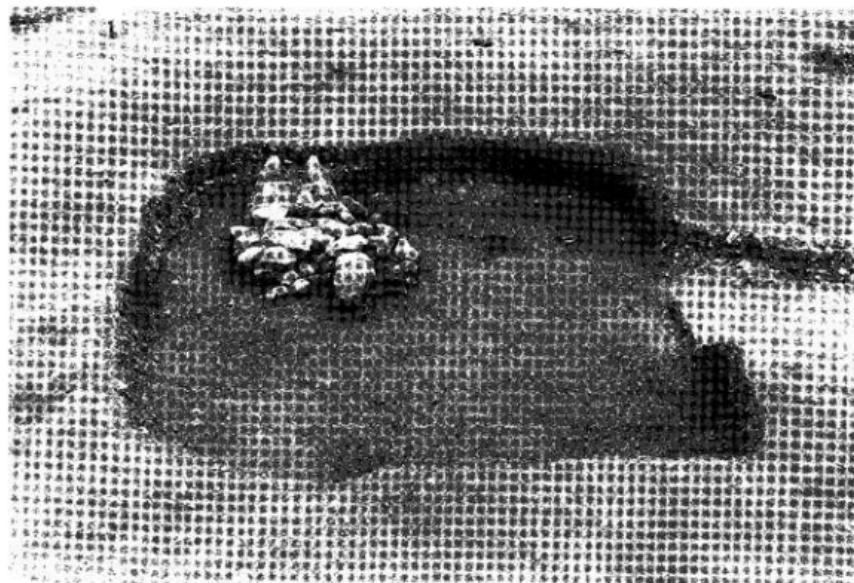
土壘（遺跡北西隅）



山の神（東より）



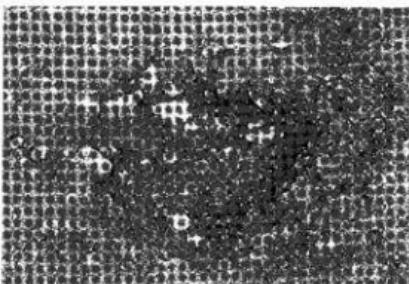
稻荷社（東より）



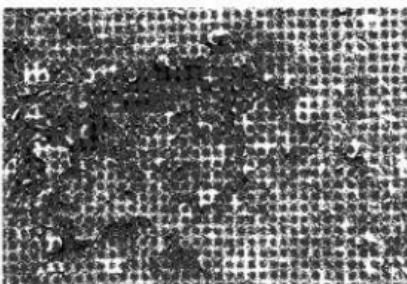
SB 1



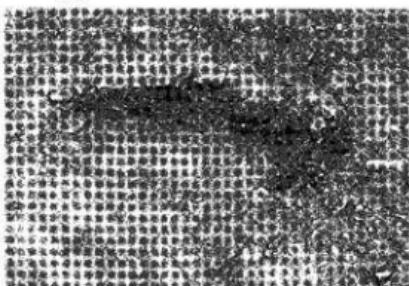
SB 1 カマド



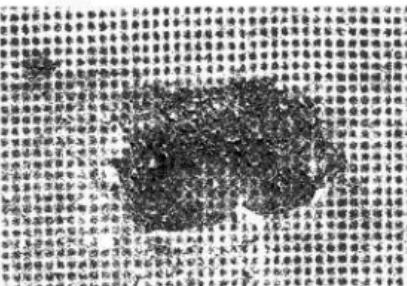
SK 1



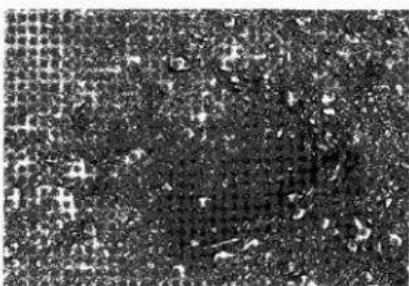
SK 5



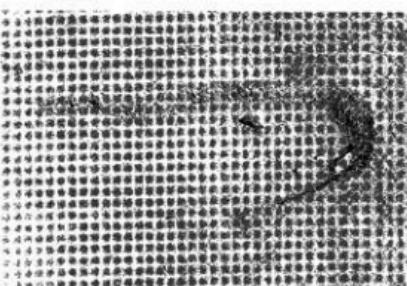
SK 2



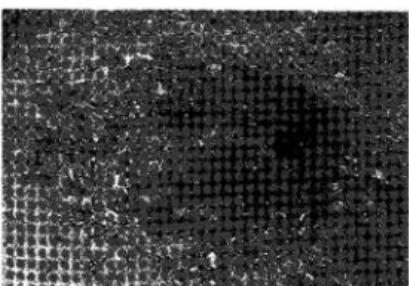
SK 6



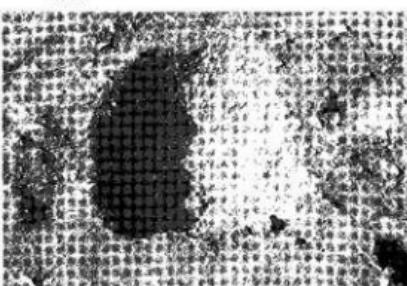
SK 3



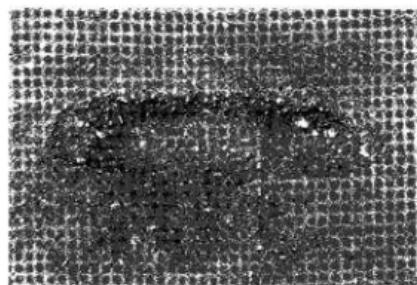
SK 7



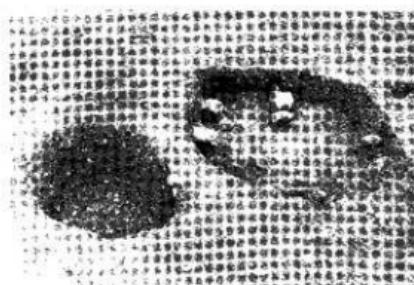
SK 4



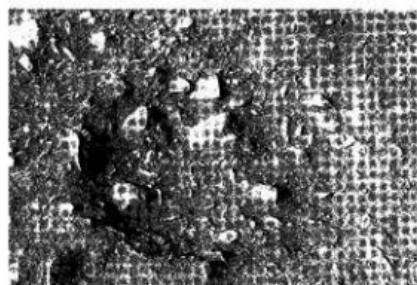
SK 8



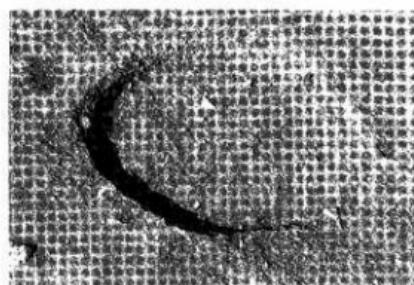
SK9



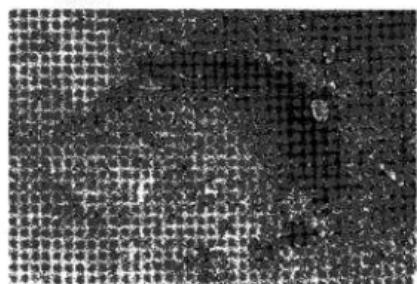
SK13-14



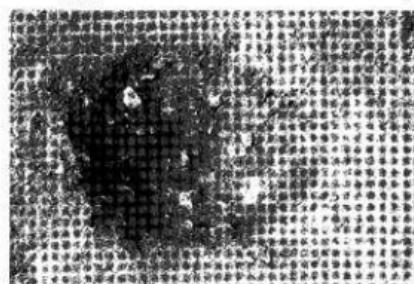
SK10



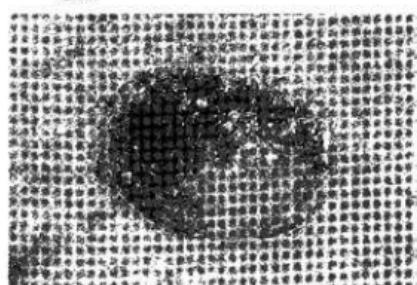
SK15



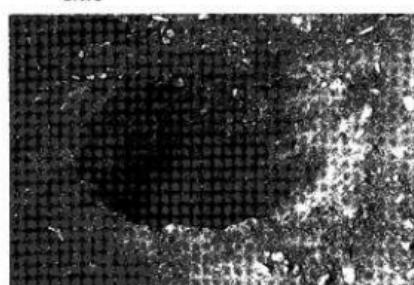
SK11



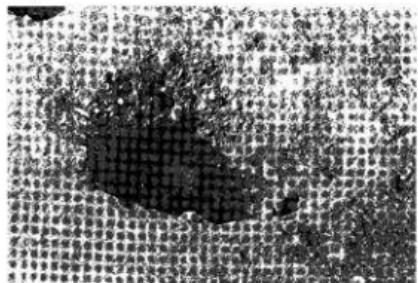
SK16



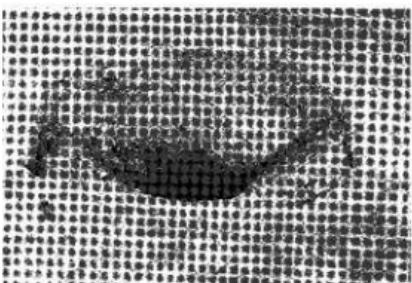
SK12



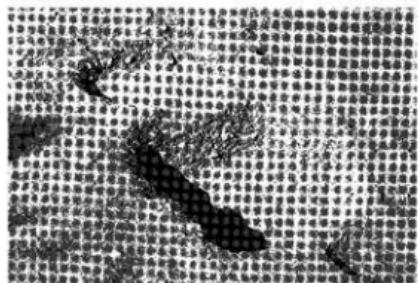
SK17



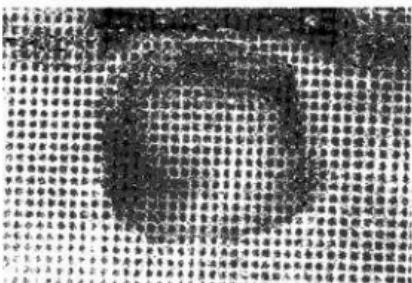
SK18



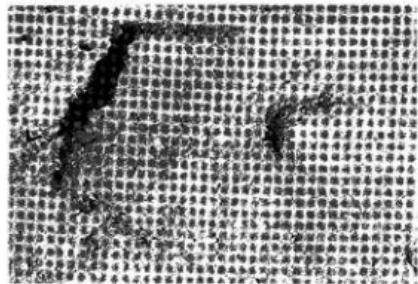
SK23



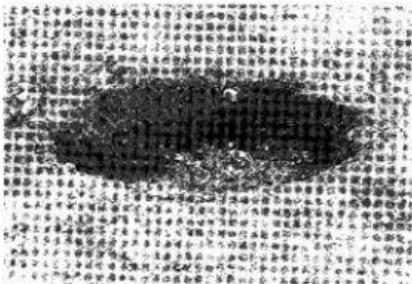
SK19 • 20



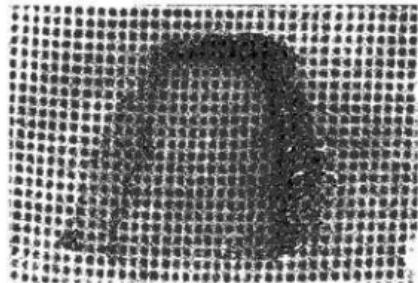
SK25



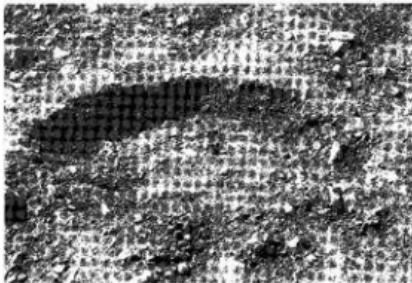
SK21 • 24 • 33



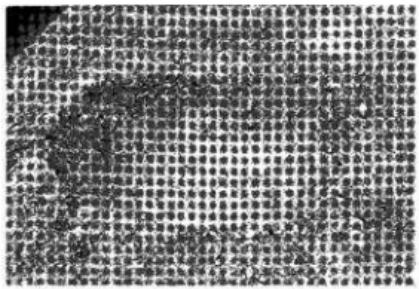
SK26



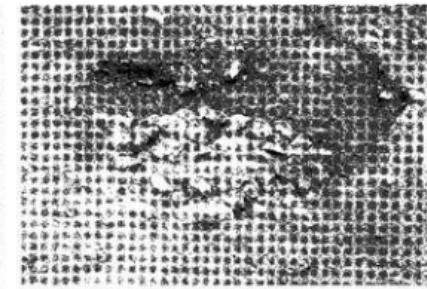
SK22



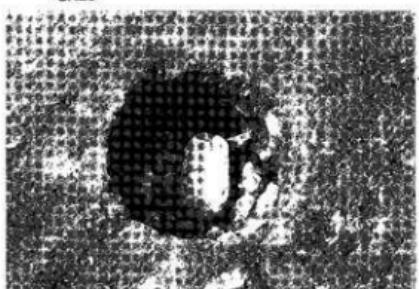
SK27



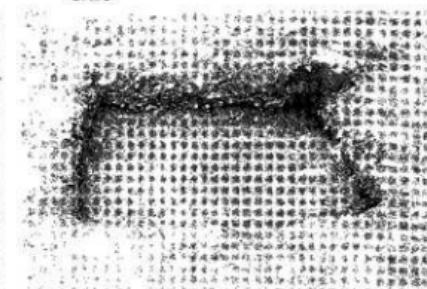
SK29



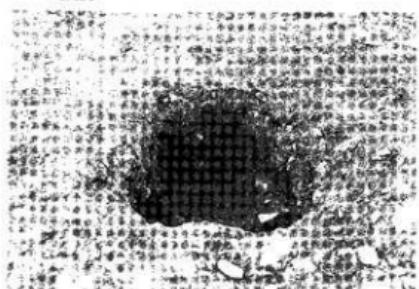
SK36



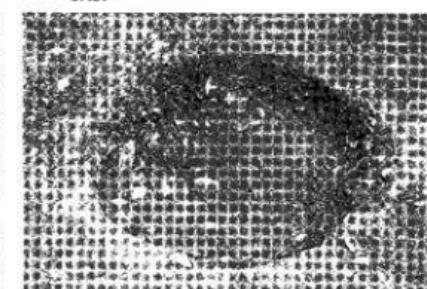
SK31



SK37



SK32



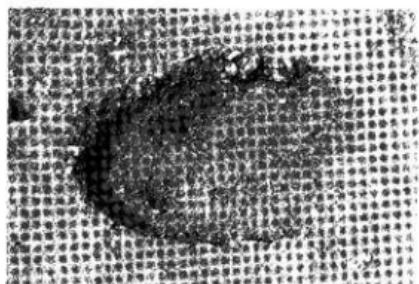
SK38



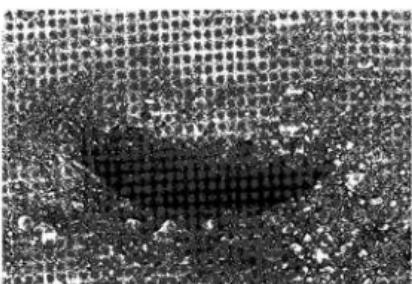
SK35



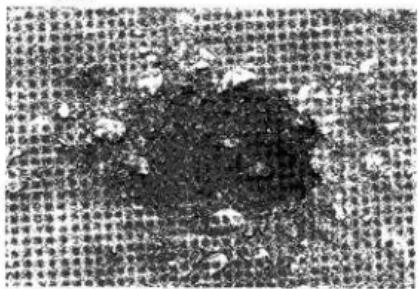
SK39



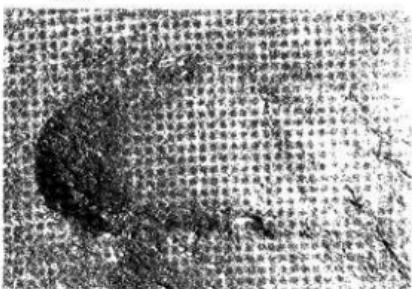
SK40



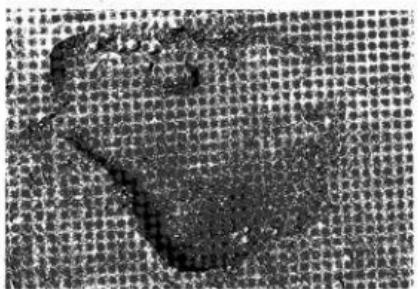
SK46



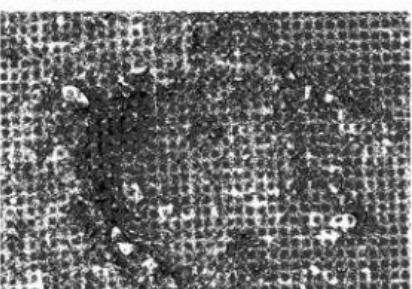
SK41



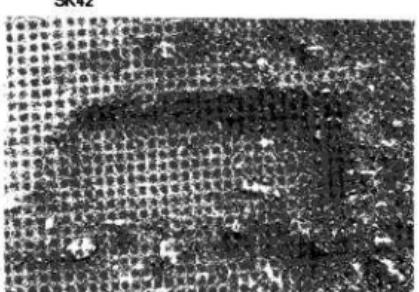
SK47



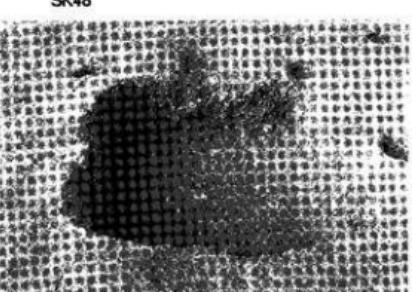
SK42



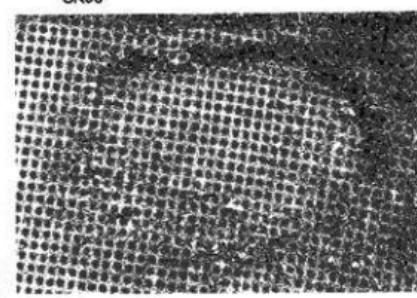
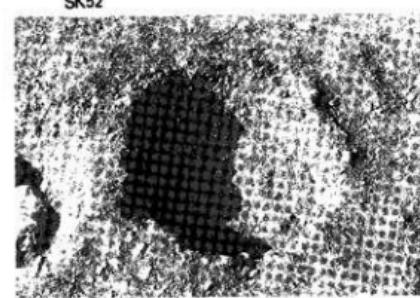
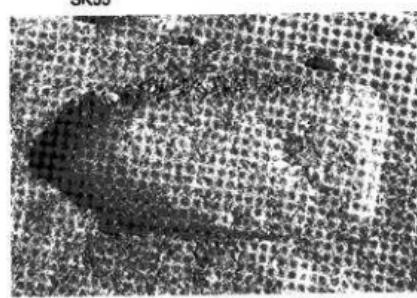
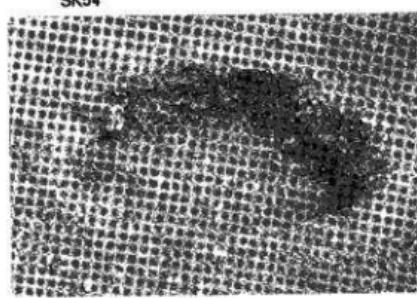
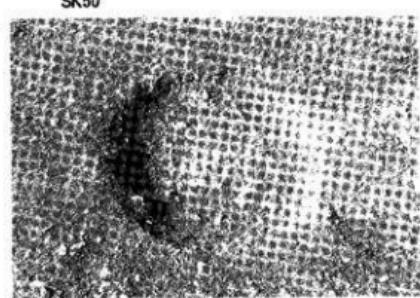
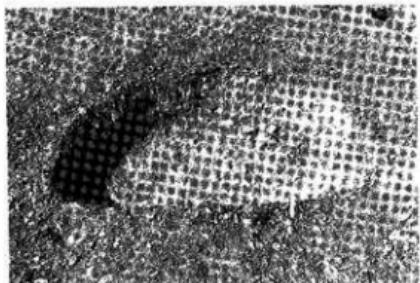
SK48

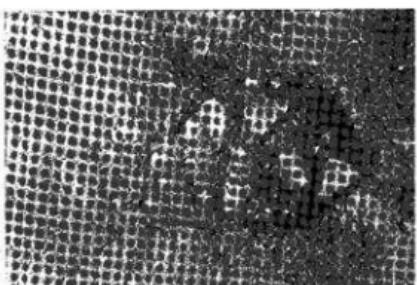


SK45

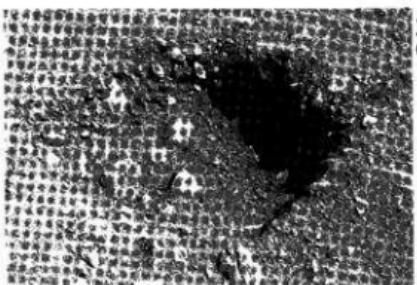


SK49

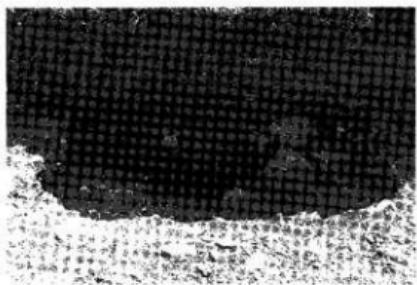




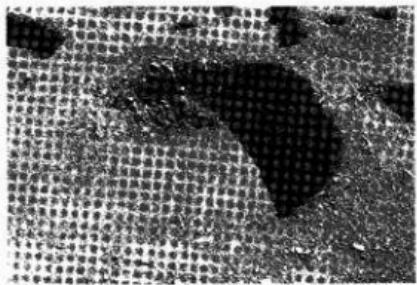
SK58



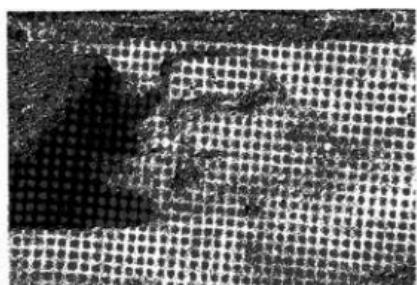
SK64



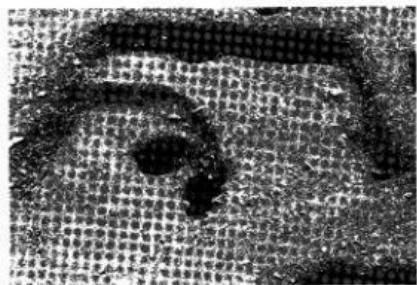
SK60



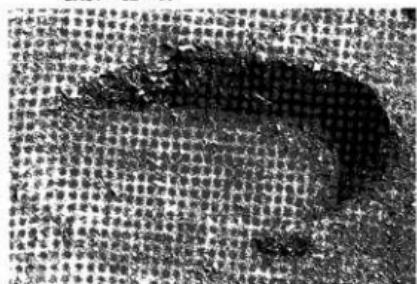
SK65



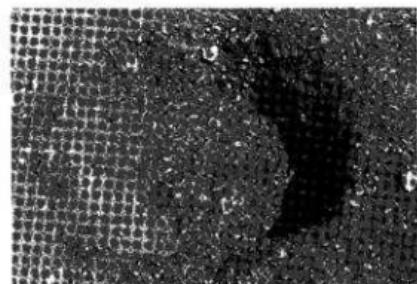
SK61 • 62 • 89



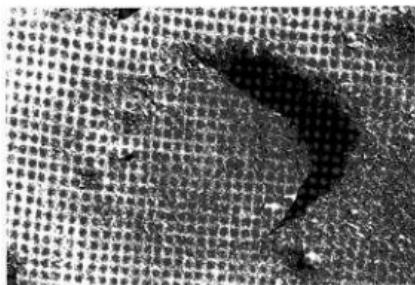
SK66 • 68



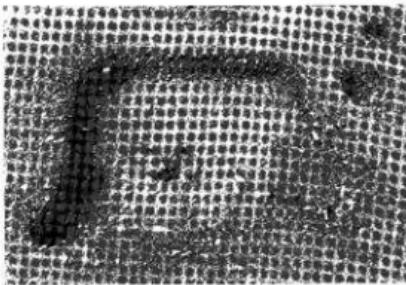
SK63



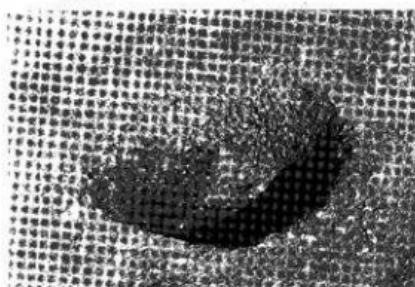
SK67



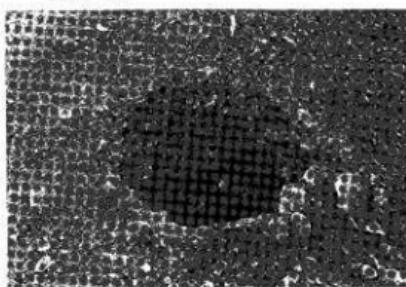
SK68



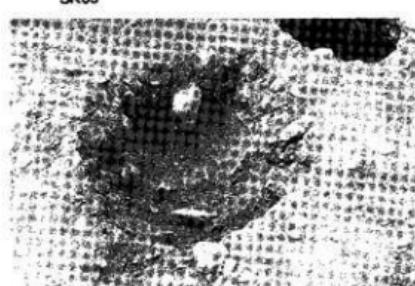
SK72 + 73



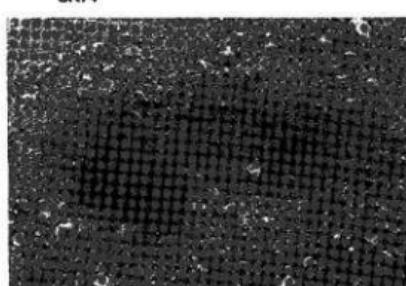
SK69



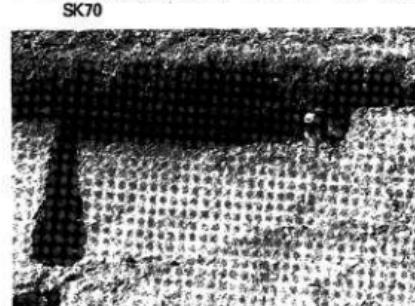
SK74



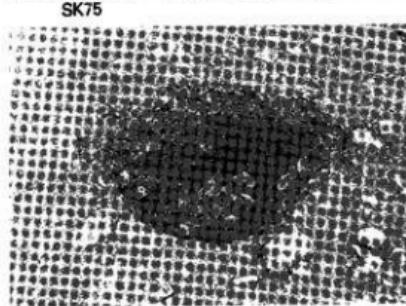
SK70



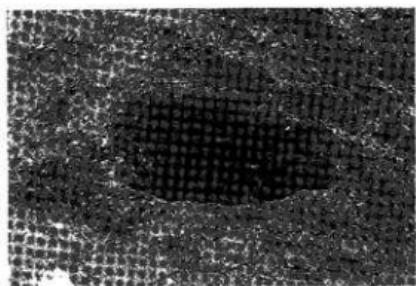
SK75



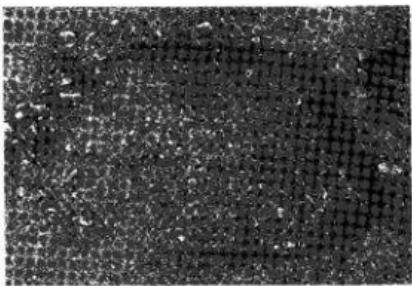
SK71



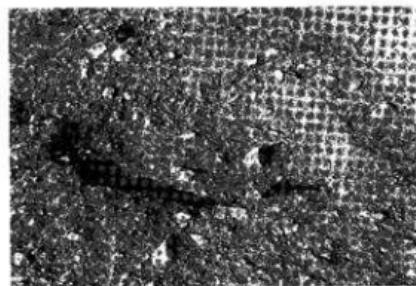
SK76



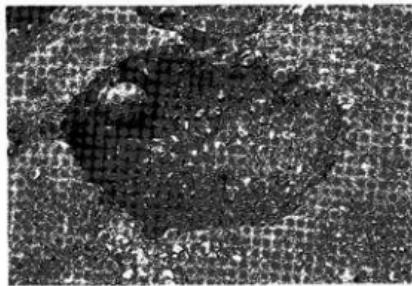
SK77



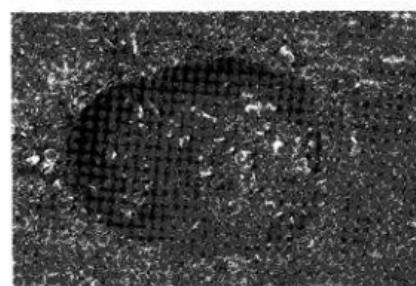
SK81



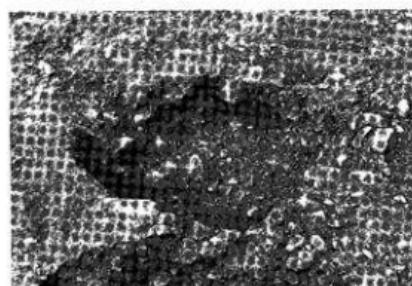
SK78



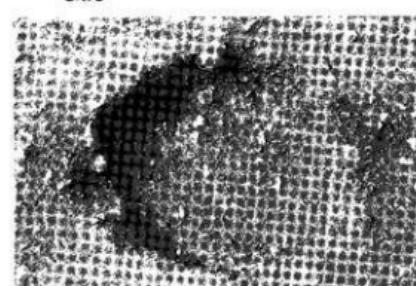
SK82



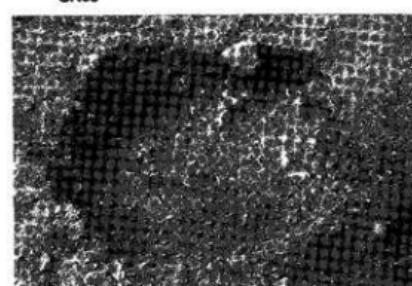
SK79



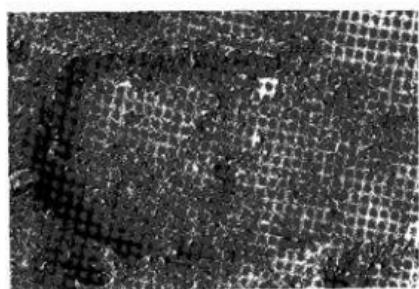
SK83



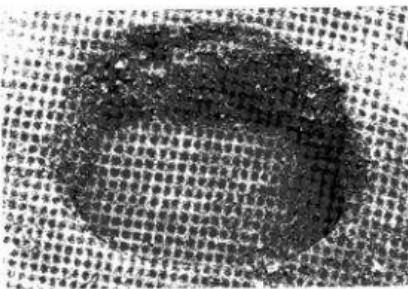
SK80



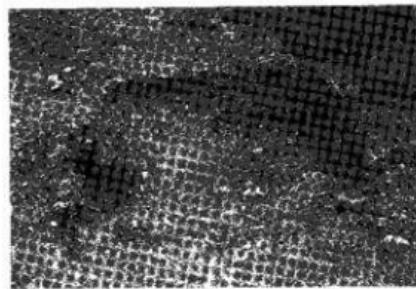
SK84



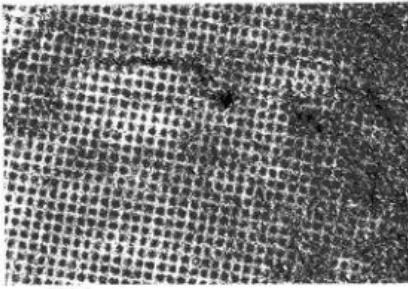
SK85



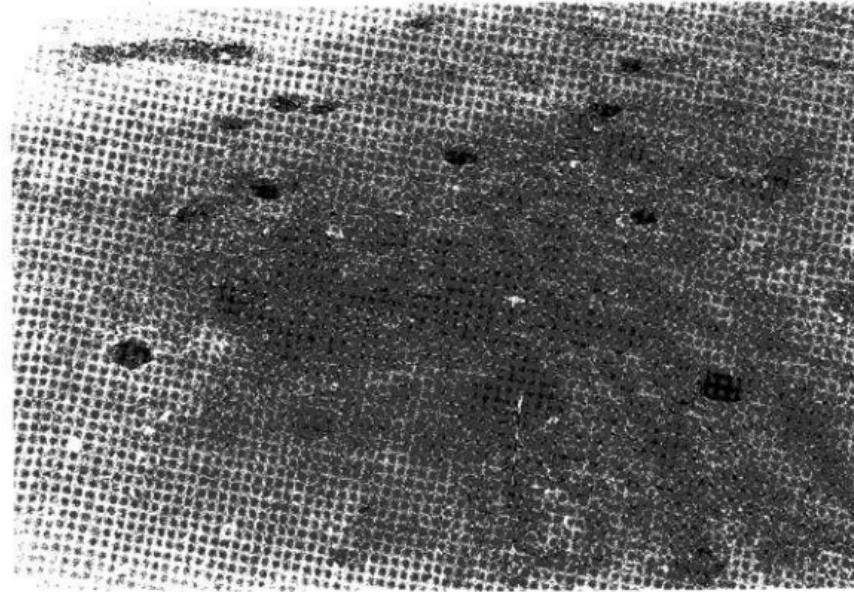
SK87



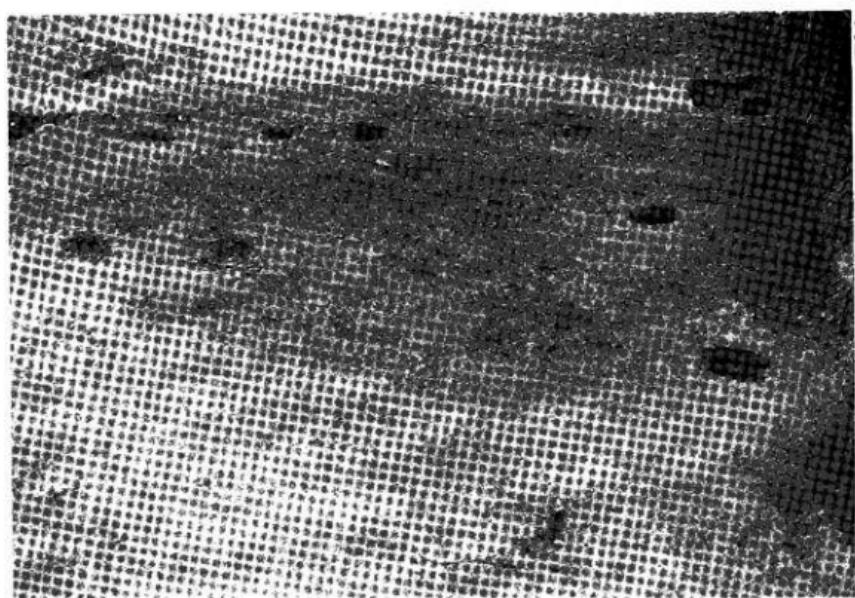
SK86



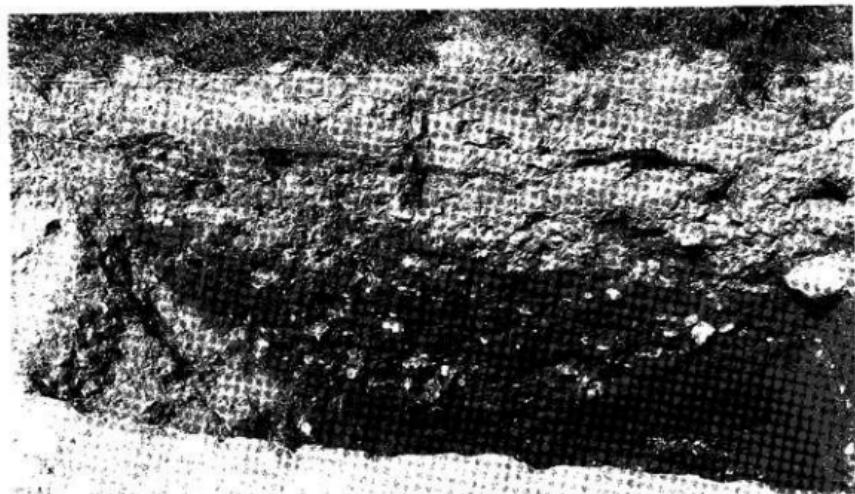
SK90 + 91



ST 1



ST2



堆 (A-A')



図 (B-B')

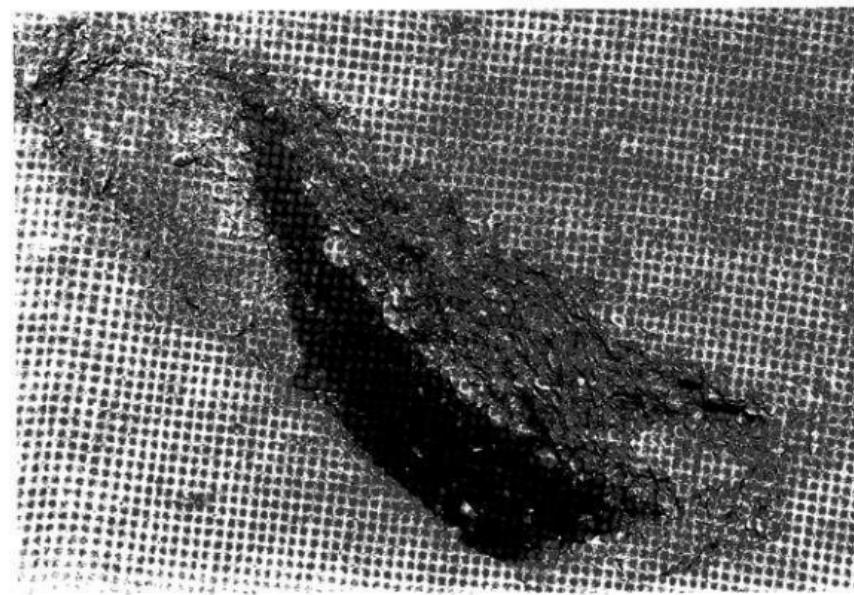
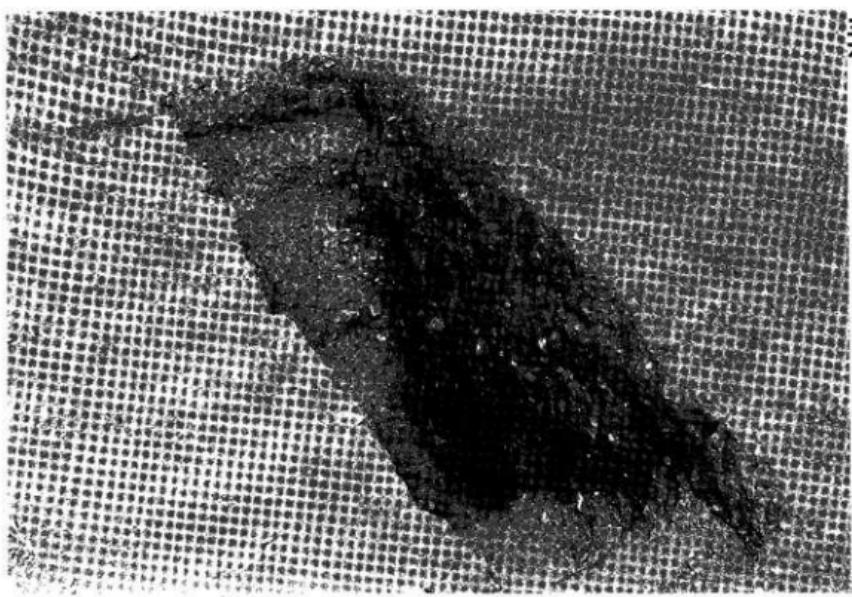


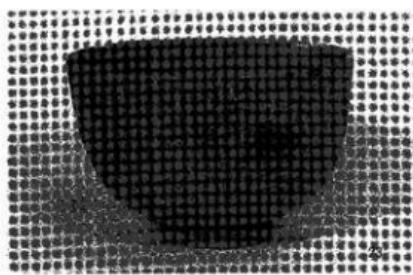
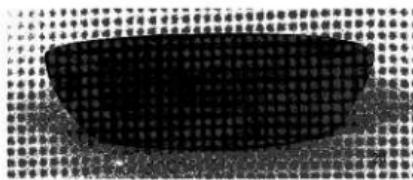
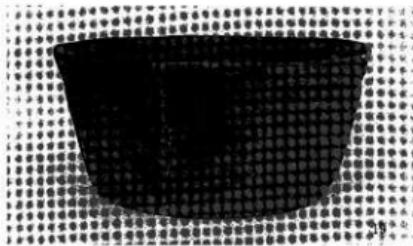
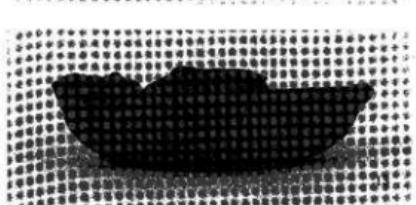
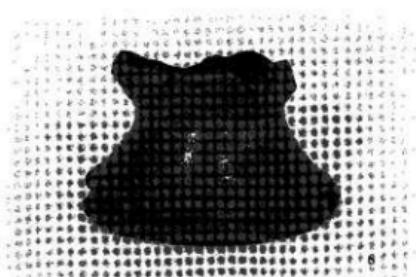
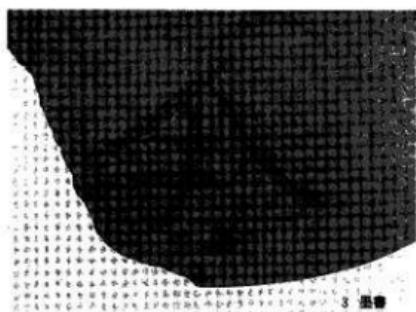
図 (C-C')

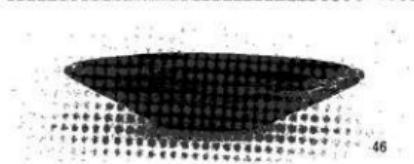
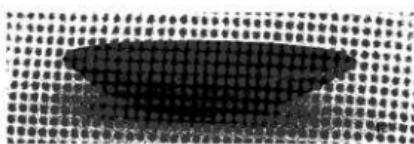
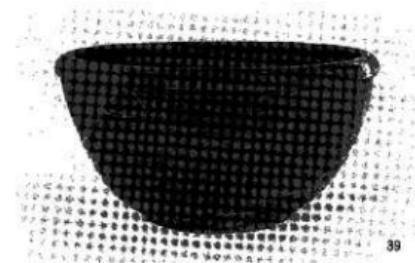
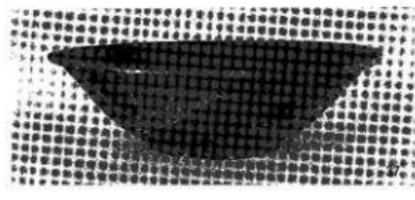


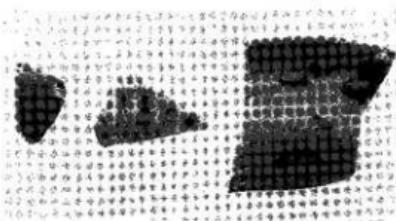
図版 (D-D')



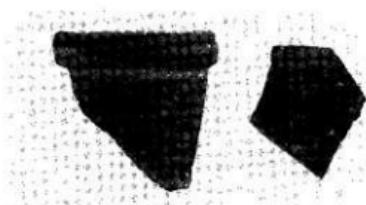
図版 (土構部分の堆積)







青磁・青花



古瀬戸 茶壺



常滑 壺



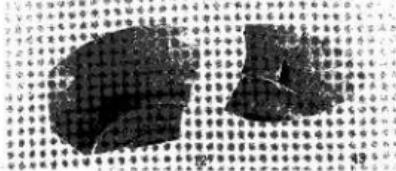
古瀬戸 天目茶碗



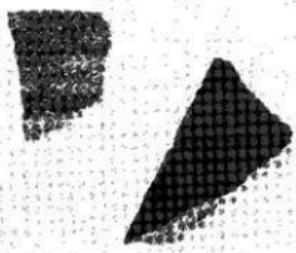
古瀬戸 瓶子



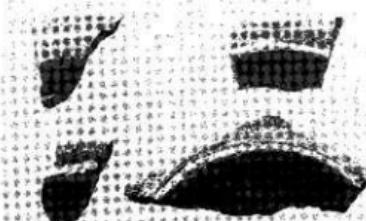
大窯 灰釉丸皿



瀬戸美濃系 灰釉丸皿



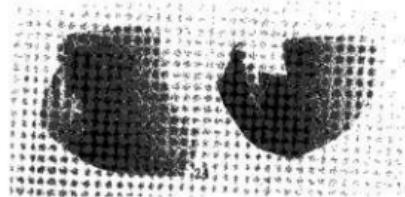
古瀬戸 鉢



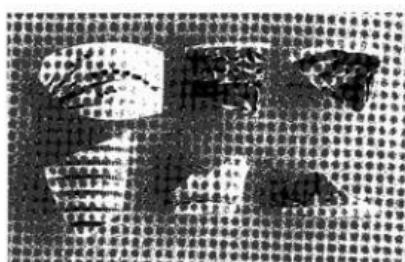
志野 丸皿



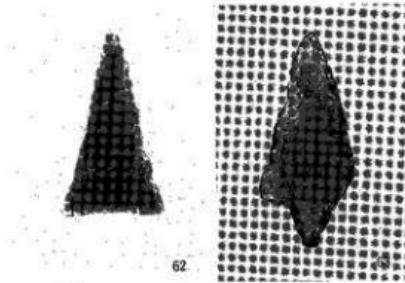
志野機部 丸皿



瀬戸美濃系 灰釉丸皿

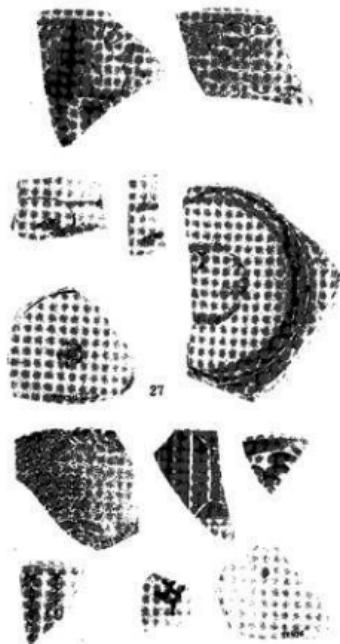


磁器



62

石鏡



27



64



65

石器・石製品

磁器



67



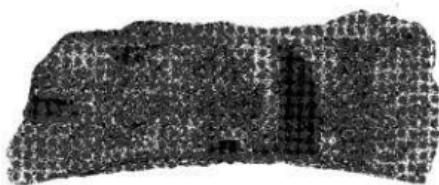
68



69

70

74



72



73



75



76



77



78



79



80



81



82



83



84



85



86

鳥羽館跡遺跡

豊岡市場整備事業費科南部地区に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成6年3月20日 印刷

平成6年3月25日 発行

発行 豊科町教育委員会

長野県南安曇郡

豊科町大字豊科4289-1

印刷 安曇印刷
豊科町大字豊科4821

